
令嬢は元暴走ヤンキー

宵月 璃湫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

令嬢は元暴走ヤンキー

【Nコード】

N0818Q

【作者名】

宵月 璃湊

【あらすじ】

全国でもNo.1を誇る族”Wing” その中でも歴代トップの実力をもっていた6代目総長【レイ】彼女は継る仲間たちを制して、引退。普通の女子高生【香坂 玲】として過ごそうと決意した。しかし、海に落ちた瞬間に異世界へ！しかも、そこで待っていたのはへんてこな生き物と玲の本家の家族だと名乗る面々。実は、玲が今まで生きていた世界こそ異世界だったというのだ！！さらにそこで新たな新事実発覚！元暴走ヤンキー玲の人生、一体どうなる？

1 伝説の総長

夕闇が深く染まる頃、
それはもつとも月が麗しく見える時――…

「レイさん…っ！…」

自分呼びかける声がして、レイは顔だけで振り返る。誰が来たかはもう、声を聞かずとも分かっていた。

「…克也」

ぼんやりと月を眺めていたレイを見つけると、克也は良かった！と駆け寄ってくる。

「はあ、はあ。レイさん、いた！もう会えないかと思いましたよ！いきなり外に出てどうしたんですか？」

「今日は月が綺麗だから…季節は違うが月見酒でもしようと思っ
な」

片手に持っていたビール缶をちらつかせる。それを見て、克也はホ

ツとした顔で微笑んだ。

「レイさん、月が出る夜はいつもそれですね」

「そうか？」

「はい、皆で言ってます。レイさんが実は月の国の住人で、いつか月に還ってしまっんじゃないか…って」

「ぶつ。お前ら、意外と可愛いこと考えるんだな」

クククと笑うレイに、克也は夜目でもわかるほどカーツと頬を赤く染める。

「安心しろ。俺はれっきとした地球人だからな」

ひとしきり笑ってからレイはビールを飲み干す。克也は、それはそうでしょうけど…と唇を尖らせた。

「でも…俺らからしたらレイさんは本当に月のような人なんですよ。一際明るく輝いていて…どんなに懂れていても決して手が届くことがない…」

克也は、ぐっと眉根を寄せる。そして意を決してレイを見つめた。

「レイさん…引退なんかしないで下さい…」

「……………」

「レイさんがいたから、俺らはトップにもなれた。それは全部、貴方が俺たちを支えて引っ張ってくれたからだ」

必死に言葉をつむぐ克也に、レイはただ黙って月を見ていた。さらに克也は言葉を続ける。

「俺や…皆も、貴方だから着いてきたんです。これまでも…これからも…レイさんに着いていきたいんです。だから…っ」

「克也」

静かに、克也、と呼ぶ声は、いつもレイが呼んでいたのと同じもの。それが克也には、無性に嬉しくて…寂しくなる。レイは月から視線を外し、克也の顔をじっと見つめる。

何もかも見透かしてしまいそうなほど、澄んだ黒い瞳。時に伶俐、

時に優しく、さまざまな光を宿していた黒い瞳は、今はとても穏やかだ。

「俺は、お前たちがいたから…ここまで来れた。お前らのやんちゃには色々大変な目にもあったけどよ…楽しかったよ。それに…お前らはもう俺がいなくても、歩いていけるんだ。いつまでも俺の後ろを着いてくるんじゃない…自分の道を歩いていけ」

「でも、レイさん…」

「ばーか。んな顔すんな。永遠の別れとかじゃねーんだからよ」

レイは、フツと口の端を上げると克也の頭をポンポンと撫でる。前はレイの肩くらいまでしかなかった身長が、今ではもうレイを追い抜いてしまいそうな程になっていた。それは喜ばしくも、淋しくもあって、改めてレイは時の流れというものを実感してしまう。

「ありがとうな、克也。俺はお前にも皆にも会えて良かった。…たくさんの楽しい時間をくれて、ありがとう」

「うう…っ、レイさん…っ」

克也が堪え切れずに嗚咽を漏らす。辺りからも同じように、レイさ

ん…っ、と嗚咽を漏らし、むせび泣く声が聞こえた。
皆、レイと克也の話を物陰から聞いていたらしい。レイは、それを分かっていたがあえて指摘はしなかった。
皆の気持ちだが、レイには痛い程分かっていたから…。

「ほら、泣くな。もう立派な…一人前の男なんだろう？」

ポツと背中を叩くと、克也はさらに涙を流す。抑えることなく泣く姿はとても純粹に、強く、レイの心を揺さぶる。

「レイ、さんが、泣がせ、てるんですよ…っ！！」

見事な男泣きをしながら赤くなった目で睨む克也に、レイは困ったように小さく笑った。

それから、克也の頭をもう一度撫でてからゆっくりと歩き出す。黒いレザーパンツにブーツ、黒いタートルネックと黒いコート。黒で身を固めたレイの姿は、闇夜に静かに溶けていきそうだった。

「じゃあな、克也。皆…元気だ」

克也と、それから物陰に隠れて泣いてる面々に微笑み、レイはそのまま暗い闇の中へと足を進める。

「レイさんっ！..!」

「レイさあああん！..!」

物陰から、わらわらと皆出てきてレイのひっそりとした後ろ姿を見つめた。

…その姿をまぶたに焼き付けようとするように。

レイは後ろを振り向かないまま手を小さく振る。

…そして、一度も振り返ることなく…その場を立ち去っていった。

「レイさん…、また会えますよね…」

克也の小さな問い掛けに、答える者は誰もいなかった……

全国No.1の実力をもつ族”Wing”
皆から慕われ、歴代の総長の中でもっとも美しくもっとも強かった、
例えるなら月のような六代目総長【レイ】の名は、伝説の総長とし
て、ずっと語り継がれていくこととなったー…

2・玲

「玲！」

「彩香か。どうした？」

駆け寄ってくる彩香に、玲は足を止めてゆっくりと振り返る。
今は放課後。下校中の生徒も全力疾走して玲に近づく彩香にちらりと目を向ける。

そんな視線をものともせず、彩香は玲のもとに来ると乱れた息を整える。

「大丈夫か？」

「…ハアハア。ん…なんとか……って違う！！玲、あんた郷田先輩と喧嘩したって本当なの！？」

「したけど」

あっさりと認める玲に、彩香は目を剥いた。そしてすぐに眉間にシワを寄せて玲を睨む。

「聞かなくても結果は分かるけど…勝ったの？」

「まあね」

「どーすんの！！？正体ばれちゃったら！！」

「ばれないよ。手加減したし」

焦る彩香とは裏腹に飄々としたままの玲に、彩香はこめかみを押さえて唸った。

「万が一ってことがあるでしょ？郷田先輩、…色々ツテがあるみたいだし」

「そう」

これまたあっさりと相槌を打つ玲に彩香は肩透かしをくらったような気分になった。そんな彩香を見ながら、玲は肩をすくめる。

「手加減したし、あれからもう一ヶ月はたってる。気にすることは

ないよ」

「馬鹿！！一ヶ月ぼっちで、収まるようなことじゃないわよ」

自分が一体どれほど有名なのか分かってるんだろうか…？と彩香は玲を見遣る。

スラリとした長い手足に短く切り揃えられた黒髪と、中性的な線の細い顔立ち、日焼け知らずの白い肌。薄い唇とスラリと通る鼻筋は、綺麗とも可愛いとも違う。だが、その顔立ちで1番目立つのは瞳だ。生まれつきだという灰紫色の瞳は一度目にしたら忘れられない。

美形とは違う、その不思議な魅力は…まさしくフェロモンだと彩香は認識している。

しかも、男女問わず、だ。

それだけで玲は、人の目を惹かせる。持って生まれたカリスマ性というやつだろうか。

加えて、玲は……この地域、いやこの地域以外でも有名だ。

【金蘭のレイ】

この名前を聞いて、知らない者はいない。

族や不良といった奴らが横行していたこの地域を、たった三ヶ月も

の間でまとめ、さらに三ヶ月後には今までは小規模だった【Win
g】という族を全国No.1の族にのし上がらせた強者ー…

しかし、彼は約一ヶ月前に引退し姿を消した。

それが知れ渡った時の反響は凄まじかった。

レイに憧れて族入りした人たちや、してない人たちでさえそのあま
りに早い引退には涙を流さずにはいられなかったという。

絶対的なカリスマ性と強さをもつ伝説の総長

彼の名前は、一ヶ月たった今でも忘れ去られることはない。むしろ、
早くレイの正体を探せ！と血眼になって探している族もいるらしい。

彩香は、隣で能天気な頭をかく友人を見てはああ…と溜め息をつい
た。

「まあ…一応レイは男だと思われてるしね」

彩香は玲の制服に目を向ける。それは彩香が着ているのと同じ紺色
のブレザーに、赤いストライプが入ったスカートだ。

玲は彩香の視線に気付くと、無意識に眉をひそめる。

「俺、本当は男子用が良かったんだけどさ」

スカートを忌ま忌ましそうにつまむ玲に、彩香はプツと吹き出す。

「仕方ないじゃん。あんた、女の子なんだから」

「女だからスカートなんて時代はもう古いだろ。女も男もスカートかズボンを選べる自由ぐらいないと」

「それには、一理あるけどねえ……」

玲が舌打ちをして髪をかきあげると、どこからともなくパシャツというシャッター音がする。

「…いいの？」

「…諦めた」

…ったく、と、これまたシャッターチャンスと思われるような仕草

をしてから玲は、また歩き出した。

「ねえ、玲。本当に大丈夫…なの？」

「大丈夫だよ、…一応、手加減はしたけどあいつがすぐには立ち直れないくらい鼻っ柱は折ってやったし」

…何をしたんだ、何を。

彩香は一度やると決めたらやってしまう座右の銘が、”有言実行、無言実行”の友人をじとっつと眺める。

それに気づいているだろうに、玲は何も言わずに長い足でスタスタと歩いて行く。

しかし、ふと何かを思いたったのか玲がくるつと振り向いた。

「玲？」

「お前、郷田に言い寄られてたんだろ？」

「……っ！！何でそれを!？」

驚きを隠し得ない彩香に、玲は淡々と口にする。

「お前、最近溜め息つくこと多かったから、悪いけど調べた…もちろん独自でな。それで、郷田に言い寄られて、しかも脅しまでされてるって聞いたたら、俺もそろそろ黙ってんのも限界だなって思ったんだよ」

「でも、あれは…」

「彩香が気にすることじゃねえよ。俺は、ただ奴に忠告と…まあ色々言っておきたいことがあったただけだから」

「だけど、それでもし玲が、あいつに…」

ぐっと手を胸の前で握りしめる彩香に、玲はぽんつと手を彩香の頭の上にのせる。

「だから、俺のことはいいって。…だてに、あの荒くれ者の集団をまとめてたわけじゃねーんだから。彩香が1番良く知ってんだろ？」

【金蘭のレイ】という異名を勝ち取るほどの功績を残した玲がどれほど頑張ってきたかを彩香も知っていた。友人として、ずっと玲を見守っていたから…。

「うん…」

「俺は何をやったとして、それがどんな結果になっても後悔しねえ。それは俺が決めて俺がやったことだからだ。だから彩香がんな顔する必要ねーんだよ」

「あひたっ」

それほど強くなく、だがしっかりと彩香の頬をつねって笑う玲に彩香もしだいに口元を緩ませる。

「やったわね!!」

「いへっ」

玲の顔をお返しとばかりにつねってやる。玲は、いてーっとな頬を撫でながら顔をしかめた。

「手加減しろよなあ」

「これは私を心配させた罰よ!……あと、ありがとうね、玲」

微笑む彩香に、玲も小さく微笑み返す。

「帰ろうか」

「ああ……」

こうして、玲と彩香の生活はずっと続いていくのだらう……

玲はそう思って疑ってはいなかった。

「……まさかこんなことになるとはね」

玲は、眼下に広がる景色に目を向けて眩いた。

目の前には、どこまでも広がるかのような緑が続いている。
――…そう、玲は今落ちているのだ。

空から。

3・空中落下

玲は空から落ちていた。

パラシュートもなく、ただ身体一つですごい早さで落ちていた。みるみる下に広がる景色が鮮明になっていくのを玲は、茫然と見ていた。

空気抵抗によつて、服や髪、肌がひきちぎられるようだ。かなり痛い。バサバサと服がはためく音に加えて風を切る音に耳鳴りがする。

これ……死ぬな。

ぼんやりと美しい自然の景色を見渡しながら、玲は冷静に自分の状況を考えていた。

人間、本当に異様な……どうしようもない事態に陥ると焦りやパニックを通り越して悟りのような心境に至るのだ、と玲は頭の中で納得したように頷いた。

死際には過去の映像が走馬灯のように流れるというが、今玲の頭を駆け巡るのは数時間前からのことだった。

――

「ただいま」

返事はもちろんない。母はワーカー人間であり、ほとんど家にはいない。国内、海外へと足を運ぶキャリアウーマンだ。

だが、玲はそれが寂しいとは思わない。母は玲を疎んじているわけではないからだ。時折来る仕送りと、母からのテンション高い手紙は、一方的なものではあるけれども玲を心配してくれている。

玲も母が嫌いなわけではない。というより、母というよか友達といったほうがしっくりくる関係だった。

父のことは知らない。

ただ玲としては、母のあの奔放な性格についていけなくて離婚したんじゃないかな…と勝手に憶測している。

母は、玲が族をやっていたことも全部知っている。怒られるか、止められるかと思っただが母はすんなりと認めてくれた。

若いうちから何事も経験しなきゃ！

ということだ。ただ、一つだけ言われた。

でもね、玲。引き際も大事よ、そういうのは。ズルズルやってい

たら何の意味もなくなるわ。アンタが、ここで引くべきだってころを見極めて引きなさい。

だから、玲は引退した。あそこにいるのは楽しかったけど、もう玲がいなくてもあそこは大丈夫だと判断したからだ。それに、自分が女だということをこれ以上隠し通すのは困難になるだろうって思った。

反対はされたが、後悔はしていない……時折、あの馬鹿騒ぎばかりしていた連中を思うと懐かしくはなるが。

仔犬のようにレイさん、レイさんと纏わり付いていた彼らを思いだして、玲は小さく笑う。

…あいつら、俺が普通の女子高生やってるって知ったらどう思うかな。

多分、ものすごく驚愕するだろう。特に克也。いつも、「俺、レイさんみたいな男の中の男になるっす！」と豪語していたのだから。

「俺も本当に男だったら良かったんだけどな」

鏡に映る自分の姿に、玲は苦笑する。女にしては高すぎる身長に男のようにも見える顔。女らしい丸みのおびた身体というよりはスレンダーな身体つき。スカートを履く自分が浮いているように見えた。

「…ふう」

着替えるか、とクローゼットの中を掻き回す。そしていつも選ぶ部屋着を出そうとして、ふとその奥にしまわれた黒いコートと黒いレザーパンツを出す。

「…たまにはいいか」

全身黒で統一するのが”レイ”スタイルだったが、また騒がれるかもしれないので一応白いワイシャツにした。首から下げる金のネックレスは愛用していても着けている。

モトーンですっきりとしたコーディネートに納得する……つもりだったが、遊び心が起きた。

母がなぜかたくさん持っているカツラのうち、くすんだ茶髪を頭に被せる。そして”レイ”の時に着けていた黒目になるカラコンを着けた。

「こんなもんかな」

鏡で確認すると、そこには”玲”とも”レイ”ともつかない少年が

立っていた。

「上々」

鏡の中の自分が笑う。

玲は、それから茶黒のブーツをはいて街に繰り出した。

1番星が見え始め、街は夜の街へと変貌する前の活気を見せていた。コートポケットに手をつっこみ、悠々と歩く玲の姿を通り過ぎる人たちは振り返って見遣る。時々、玲に声をかける勇気ある女たちがいたが、玲がふつと微笑むだけで顔を赤くして固まってしまふ。

静かなとこねーかなあ…

そろそろ周りがうるさくなってきたところで、玲はいつも自分がいる場所へと足を向ける。

その途中、何度か族関係の顔見知り会いそうになったが気配を消してなんとか乗り切る。

別に見つかってもいいのだが、それでもわざわざ自分から見つけられるのは嫌だった。

克也とか昇斗だったら、絶対バレルだれうなあ。

あの二人は玲がどんな変装をしたとしても、すぐ気付く。

「レイさんリーダーが反応するんす！！」と朗らかに言われた時はさすがの玲も苦笑いしか返せなかった。

懐かしい思い出に浸りながら玲はゆっくりとネオンが輝き始める夜の街を歩く。時折、声をかけてくる者もいたが、玲はそれを易々とかわしていつの間にか街を離れて…玲が以前好き好んで来ていた港のほうへ足を進めていた。

「どうしてもここに来ちまうな」

玲は自分で自分に苦笑いをしながら、いつもの場所へと向かう。

”レイ”となっていた時も暇があればいつも来ていた場所。

ちょうど月が海から沸き上がるように昇るのを見るのが、何よりも好きだった。

その光景を見るたびに、玲は何か胸の奥が満たされるような感覚を味わうのだ。…まるで、今まで胸の奥がぼっかりと空いてしまっていたかのように。

今日も月が綺麗だった。

「満月か…」

見惚れるように月を眺めていると、冷たい夜風が頬を撫でる。風になびくほどでもない髪が、ちらちらと首筋に当たり、少し痒かった。しばらくぼんやりとその場に立ち尽くしていたが、すでに月は見上げるほどの高さまで昇っていた。

携帯を取り出すと、メールが十件きていた。全て彩香だった。

「なんだ？」

電話をしてみると彩香はすぐに出た。

『ちよつと玲！！メール何回送っても返事なしてどづいづいとよ
！！！！』

キーンと耳鳴りがして、慌てて携帯を耳から離す。

「わり、少し外出てた」

『でしょうね！あんたの家に行っても誰もいないみたいだったし！』

「わざわざ家まで来たのか。どうしたんだよ？」

『別に！ただ、お母さんが夕飯作りすぎたから一緒にどうかなって思ったの！』

「マジか。それは惜しいことしたな……。彩香の母さんの手料理うまいし」

調理師免許をもつ彩香の母親はとても料理がうまい。家でプロ並みの料理が味わえるのだから、これほど喜ばしいことはない、と玲は常々思っている。

本気で残念がる玲に、電話越しで彩香がクスクスと微笑む。

『ちゃんとあなたの分残してるわよ』

「マジでか!!すぐそっちに行くよ」

『お待ちしておりますわ』

ふざけて上品ぶる彩香に、玲がああと笑って応える。

途切れた携帯をお尻についたポケットに突っ込んでから、玲はもう一度月を見上げる。

それから帰ろうと踵を返した玲は、ふと違和感を感じて振り返る。変哲もない、真っ黒に染まる海が広がっている。

そして、その真っ黒な水面にただ一つ丸い月が映っていた。

「何もないよな？」

首を傾げて顔を前に戻そうとして……玲は見た。

水面に映る月が揺らぎ、その表明が淡く光っているのを。

「え…光ってる…?」

玲は海にギリギリまで近付いて、それを眺める。海の中にもうひと

つの月があるかのように、それは確かに発光していた。

「何で……………って、うわー!!」

いきなり、身体の重心がぐらついた。

「ちょ…っ…!!」

玲はそのまま目の前に迫る淡い月に向かって……………落ちていった。

—————

「……………で、これだよ」

水面に映る月に落ちた玲は気づけば命綱なしのスカイダイビングをしていた…というわけだ。

ぐんぐん速度を上げて落下していく自分は、なんて無力なんだろう

か。

すでに自分の目の前の地形は目に焼き付いてしまっている。

「つーか、海に落ちたはずなんだけどな」

何でいきなり空がある？

「まあ、考える前にこのままだと死ぬけどな」

自分の言葉すら空気抵抗で聞こえない。さらに、地面はどんどん近づいていて…このままだとすぐに地面に着地…ではなく激突するだろう。

冷や汗が流れるが、無情にもこの状況は回避できそうにない。

あー…彩香の母さんのご飯食べたかったなあ。

しみじみと残念に思っていたその時だった。

「……………うおっ!？」

いきなり落下が止まり、ガクンと反動で身体が跳ねる。
玲は、宙ぶらりんのまま眼下に広がる景色を見つめる。

「……………助か…った？」

何やら…助かっていないような気がしないでもない。

良からぬ予感に、頬をひくつかせて玲はそつと後ろを見上げる。

目の前にあるのは…オレンジ。

鮮やかなオレンジのふさふさした毛…いや、胸毛。そして…真っ黒
いかぎ爪が光っている。

「ギエエエエ!！」

「う……そ」

玲は、馬鹿でかい鳥に服を捕まっていた。

「……助かってねえええええ!!」

4・ありえない

不安定な体勢のせいか、身体がゆらゆらと風に揺れる。正直、落下してる時より怖いかも…と、玲は頬を引くつかせながら眼下を見遣る。

ぷらーん、と宙に放り出された足元に広がるのは

森森森

「確実に死んでたな、これ」

だが、今の状況が決して安全とはいえない。なぜなら…

「ギエエエ!!!」

玲を引つ掛けた巨大な鳥は耳障りな鳴き声は発しながら、バサバサと羽を飛ばたかせている。この羽による風で玲の身体はさらに頼りなく揺れる。

「きもちわりいい…」

あまりの揺れに吐き気を催し、玲は慌てて口を抑える。

空からゲロが落ちてくるなんて…悪夢以下だ。

巨大鳥は、どこか…多分自分の巣を目指しているのだろうか。真っ直ぐと迷いなく玲を運んだまま、飛んでいた。

っーか…

何で俺捕まってたんだ…？

まさか…と、ある予感が頭をよぎる。

「俺…もしかして…餌、か？」

サーッと血の気が引いた。引くもんじゃない、完全に爪先を下って外に流れ出た。

餌……！！！！

餌だと……っ！！！？

一応、全国No.1にまで族をまとめ上げた俺が…!?!
まだ、彩香の母さんの飯食ってねーのに!?

「…チツ、冗談じゃねえ」

鳥の足に一発喰らわせてやるうかと拳を握りしめたところで、自分の状況を思い出す。
今、鳥の足に一発ぶちこめば、きっと玲はまた空中落下を味わうことになるだろう。

「くそっ」

舌打ちをしてから、拳をとく。そして頭の中で念入りにシュミレーションを繰り返すことにする。

とりあえず鳥の巣まで行って、無事に下りたら鳥の羽に2発喰らわせてから…ダッシュ。

それか、巣に行く前に落ちてても大丈夫なぐらいの距離になった瞬間、空中ダイブをすれば…

ぶつぶつと何パターンかの状況とそれに応じた対応を考えていたのだが……予想外なことが起きた。

「ギイイイイ!!」

前方から同じ種類の巨大鳥が突っ込んできたのだ。

「な…っ!!?」

ガクン、と身体が揺れた拍子にビリッと背中の中で不吉な音がした。

「ま、まさか…」

攻撃してきた鳥は……どうやら俺を狙っているらしい。そして俺を捕まえている鳥は、獲物を取られないようにと応戦し始める。

「お、おい!!あんま派手に動くなよ!!背中がなんかやべえ気がする……!!」

玲は自分を捕まえている鳥に向かって必死に言うが、鳥は聞いちゃいない。
というか、言葉が通じるはずがない。

「ギエエエ!!」

「ギイイイ!!」

戦いの狼煙のように声を張り上げ…両者の鳥は激突した。

「やめろって!!…!!」

ピリッと、またあの音が耳に届く。しかし、二匹の鳥は互いを攻撃しあつのに夢中らしく、玲の存在は忘れさられていた。
細長い嘴で互いに致命傷を与えようと、両者譲らず激しい動きを続ける。

ピリッ、ピリリッ…ッ

「や、やべえ！ー！やめろつての、てめーらああ！ー！喧嘩は巢に帰つてからやれえええ！ー！」

しかし…玲の叫びは虚しく空気を響かせるだけに終わった。
そして、玲を捕まえていた鳥が相手の突き出した嘴を避けようと体勢を崩した瞬間…

ビリッ

鳥が引つつかんでいた玲のコートが破けた。

玲の身体は、そのまま空中へと身体を放り出され……すぐさま下へと落ちて行く。

「こんの……馬鹿鳥がああああ！ー！次会ったら丸焼きにして食つてやつからなあああ！ー！」

た。

「体勢を変えねーと…っ」

しかし、落下スピードは徐々に高まり、思うように身体を動かせない。

「くうっっ…っ」

せめて腹からの着地だけは勘弁してくれ!!!

しかし、あれこれする間もなくしだいに景色が鮮明に見えてきた。どうやら、あの青く光っていたのは湖らしい。普段なら綺麗だと見惚れそうになるが、今はそんなこと一ミリも考えられなかった。

「や、やべえ!…!」

もう体勢を変えるのに、間に合わねえ！！！！

来たるべき衝撃に備えて、ぐっと目を閉じた……が、

ぼよよん

「……………は？」

…身体が、跳ねた。いや、馬鹿な。水に飛び込んで身体が跳ねるわけがあるか。

しかし…また身体が落下したかと思うと

ぼよよん

やっぱり跳ねた……何かに当たって。まるでトランポリンみたいな。

玲は閉じていた目をそつと開けて……絶句した。

「……………ネ、ネ、ネッシー？」

玲の目の前には……いつか日本にいるかいないか騒がれた、あのネッシーがいた。

ネッシーは長い首を左右に降りながら、ゆつたりと湖で泳いでいた。玲はちょうどネッシーの胴体に落ちたらしい。

ネッシーの身体って……トランポリンみたいにボヨボヨしてんだな……。

ぼんやりとネッシー後ろ頭を見ていたら、不意にネッシーが長い首をこちらに向けた。

「……………げっ」

ネツシーは、丸い黒い目で後ろを見、そして…自分の身体にいる見知らぬ奴を見て首を傾げる。

玲は、動くことができないままネツシーの黒い瞳と見つめあう。

ネツシーとなんて、どうコンタクトとればいいんだよ…！

何もできないまま数分…もしくは、数秒が立ち、ネツシーは長い首を利用して顔を玲に近づける。

「う……っ」

ネツシーの鼻息がかかり、玲の前髪が後ろに流れる。ネツシーはひとしきり玲に鼻を近づけてフンフンと臭いをかぐ。

ネツシーに臭いかがれてる…。

明らかに”ありえない”光景に戸惑っている玲とは裏腹に、ネツシーは玲を気に入っただのか…キュ〜と鳴いて頬を擦り寄せる。少しぬめつとした肌触りに、ぞわわ…と身体が震えた。

と、とりあえずは餌としては見られなかった…のか？

ふうつと安堵してから、玲は自分に頬を押し付けてくるネツシーの鼻…と思われる部分を撫でた。ネツシーは、嬉しそうに目を細める。ネツシーを撫でながら、湖と陸までの距離を測るが…結構ある。湖に何がいるか分からないから安易に泳ぐこともできないな…と、玲が顎に手を当てたところで…玲はネツシーと目が合った。

もしかして…ネツシーに頼めば陸地まで泳いでくれるかも。

そんな馬鹿な…と心の中では自分の考えを否定しながら、玲は恐る恐る口を開く。

「あのさ、ネツシー…」

「キユ？」

「俺を…その、あそこまで届けてくれねーかなあ…？」

岸のほうを指差すと、ネツシーは何回か玲と玲が指す方向に視線を滑らせてから、こくりと頷き、岸に向かってゆったりと泳ぎ始めた。

「通じた…」

ネツシーって頭いいんだな、と思いつつ、よくよく冷静になってみれば

俺って本当に生きてんだろうか、と疑問に思った。

海に落ちて、いきなりスカイダイビング、そして日本では絶つっ対に見られない巨大鳥にネツシー…。

今起きているのは本当に現実の出来事か？

もしかして…俺、本当は海に落ちて死んで…ここは死者がくる冥界とか…。

見る限り、地獄ではなさそうだが…。

地球温暖化、環境破壊などと騒がれていることなどないくらい、澄んだ空気と目に余るほどある森林。

排気ガスが立ち込めたことなどなさそうな程、どこまで青い空。

一見すれば、楽園のような場所だ。

「…人っっていんのかなあ」

スカイダイビングをしていた時にだいたいの地形は見たが、ほとんど山や森でうめつくされていた。街がどこにも見当たらなかったのは覚えていた。

これからどうすっかな…

グーッと腹の虫が鳴る。

「そっいやご飯まだだっけ…」

まずは食糧集めでもしとくか。

これだけ自然が溢れてんだから、何か食えるもんくらいあるだろ。

そっこう考えている間に、ネッシーはもう岸に目と鼻先の距離まで来ていた。

「ここからなら平気だな。ネツシー、さんきゅな」

ネツシーの背中の端に立ち、助走体勢をとる。そして、一気にネツシーの身体を駆けて… ジャンプした。走り高跳びの要領で。

ギリギリ岸くらいまでかなあ、と思っていたのだが…なぜか岸から何メートルか離れた地面に着地した。

「あれ？」

自分が跳んだ距離を目測し、首を傾げる。

俺、こんなに跳べたっけ？

「キユ」

ネツシーが寂しそうに玲を見る。玲は小さく笑ってから手を振った。

「さんきゅ、ネツシー。お前は俺の恩人だ！また顔見せにくるよ」

ネツシーは、キュ〜と甲高い声を上げてから、ゆったりとまた湖の中心へ泳いでいく。
それをしばし見送ってから、玲は森のほうに身体をむける。

「…行くか」

玲は、そのまま単身で森の中に入って行った。

「……………で、これ食えるのかったのが問題だよ」

森の中を探索してみた結果、食べられそうな木の实があるにはあった……………が、どれも見たことがない種類のうえに、毒々しい色あいが危なそうで…食べるのを躊躇ってしまっていた。

「このグルグルとぐる巻いたのは何だよ……………」

とぐるを赤紫と水色で交互に色塗りしてあり、芸術的な何かはあり
そうだが…食べ物として見ると、いかにも毒入ってます、という感
じだった。

「食つべき…？」

誰に聞くわけでもなく声に出した疑問に答えたのは…自分の腹の虫
だけだった。

「…少しだけ食えば大丈夫だよ、な」

顔を引き攣らせて、玲はそのとぐるをじっくりと眺めてから意を決
して口に運んだ。

シヤリという音と共に、意外とあっさりした味わいが舌に広がる。
水分を含んでいて、喉の渇きも潤った。

「…うまい」

あとは夢中で、この奇怪な果実をほつばる。2〜3個食べれば大分腹も膨れることができた。

「うー…腹いっぱいだあ」

腹も膨れれば寝たくなるというのが常というものが……
玲は近くの木に寄り掛かりながら目を閉じる。

色々あったし、少しくらい休んでもバチは当たらねーだろ…

スー……ツと寝入りそうになった瞬間、玲はただならぬ気配を察して身を起こす。総長をやっていたせいかな、玲は気配には敏感だった。

どこだ…？

何か来る……

すぐに攻撃できるように構えをとったまま気配がする方向に身体を向ける。

張り詰めた空気が辺りに満ちる……。

ガサツガサガサ

………来るっ!!!

「………つて、え？」

草むらを掻き分けて現れたのは、動物園に行けば見れるクマ………ではなく、

「………何だあの素敵筋肉は」

目の前にいるクマはふさふさというよりはチクチクしそうな毛をもち、二足歩行で筋骨隆々で鉞まさかりを担いでいた。もちろん、顔はあのテレビでよく見るクマだが。

二足歩行で……鉞担いだ……クマ！？着ぐるみきた人間じゃねーよな……
???

何回か瞬きをして見直すが……あの筋肉は本物っぽいし、何より開いた口から見える牙がギラリと光った。

クマは啞然としている玲を一瞥すると、鉞を近くに生えた木の根本におく。

そして、1、2歩、玲に近づくとペコッと頭を下げた。

「……は!？」

クマの頭につむじなんてあったんだ……という考えが頭をよぎるが、すぐに我に返ってこの”異常さ”に目を丸くした。

「何で俺クマに頭下げられてんだ!？」

クマは今だに頭を下げ続けている。玲は、えーと……っと少し考えた末に自分もクマに向かって頭を下げた。正直馬鹿馬鹿しかったのだが、日本人の性だろうか。相手が頭を下げていたら、クマだろうが何だろうがとにかく頭を下げてしまふ。

…しかし、これが間違이었다。

クマは玲が頭を下げているのを見た瞬間、フンツと鼻息を荒くし…
いきなり玲に襲いかかってきた。

「はい!!?」

咄嗟に避けたものの、クマの拳は玲の後ろにあった木にぶちあたり…
木が折れた。

「なっ…、はぁ!?!おい、いきなり何すんだよ!!!」

玲の言葉を見無視し、クマはさらに玲に向けて拳や蹴りを突き出して
いく。クマのくせに、そのパワーやスピードは申し分なく強かった。

いきなりどろして……

ふと、玲の頭にある仮定が浮かんだ。

「まさかさっき、頭下げたのって…」

柔道とか空手とかで、相手と試合する前にやるアレか！！？

何でクマが…！！
ってか、このクマ何者だよ！？

なおも続くクマの攻撃に、さすがの玲もこのままだと体力的に不利だと悟る。

しゃあねえ…。
クマなんて相手にしたことねーけど……

「俺様をなめんなよっ！！！」

グツと右足に力を入れ、クマの脇腹に蹴りを入れる。
固い筋肉の感触とともに、クマはそのまま横に薙ぎ倒される。

「どんなもんだ、クマ公!!」

しかし、クマはゆっくりと起き上がり…ぺっと唾を吐き出した。そして、また一気に玲に向かって襲いかかる。

玲はクマの動きを冷静に見ていた。さっきまでは交わすだけだったが、こちらからも攻撃するとなれば話は違う。

頭の芯が冷えると同時に、この緊張感が身体に馴染む。

懐かしい感覚に、思わず口角を上げた。

一ヶ月前、引退する前は日常茶飯事で味わってきたこの感覚は、玲の血をたぎらせる。

今まで血が流れていなかったのかと思えるほど、脈と熱を一気に感じた。

この、感覚だ……

クマが拳を玲目掛けて突き出したと同時に……、跳躍した。

「う、わ!?!」

少し跳ねただけなのに、なぜか玲の身体は重量を感じていないかの
ように、クマの頭を軽く越えた部分まで浮き上がった。

「まったく、訳わかんねーことばっかだが…とりあえず、クマ公覚悟
！」

同時に落とされた渾身のかかとおとしに、クマ公はズシャっという
音と共に地面に倒れた。
多分死んではないだろう。

「ふー…」

玲はトンツと地面に降り立って、地面にめり込んでしまったクマ公
を見つめた。

「なんか…俺の力強くなってる？」

一体、自分はどこに来てしまったんだろうか。

5・肉食獣

――あれから、二週間が立った。

俺は二週間目にして、やっと認めることにした。

俺は異世界という奴に飛ばされたのではないか……と。

正直、夢を見ているような気分だったからすぐに目が覚めて気づけば病院でした、とかいうオチだろうと思っていた。

なのに、二週間。

一ヶ月の半分近くが経っていた。これはもう、夢、なんて言葉では片付かない。

俺は今、異世界にいる。

「クマ公、俺、いつまでいればいいのかなあ……」

「ガウツ」

クマ公は、元気出せ、というように俺の肩を叩いた。

このクマ公は、二週間前に拳を交えてから、なぜか俺を気に入ったらしい。行くあてがない、とクマ公に呟いてみせたら、なんとクマ公は自分の家に玲を招待してくれた。

森のクマさん様様だ。

木で組み立てられた素朴な一軒家にクマ公は住んでいて、さらにクマ公には家族までいた。

俺はクマ公の奥さんをマダムって呼び、二人の子グマには、上からロビン、プーと名付けた。マダムの料理はなかなか旨いし、二人の子グマたちは俺を兄貴として慕ってくれていて…可愛い奴らだ。

名前がどこかで聞いたことあるって？

それは……、まあ、あれだ。インスピレーションで名付けたらそれだったただけだ。決して、めんどくさかったわけではない。断じて違う。

あのクマ公だが、どうやら格闘マニアなようで（家に多種多様な武器があった）、いつも鬨に闘志を燃やしているらしい。

俺はクマ公の家に居候させてもらう代わりに、一日に何回かクマ公

の相手をしていた。おかげで俺も筋肉隆々になりそう…かも。

さらに発見したことだが俺の力は、ここでは格段にレベルアップしていた。

自分の背丈ほどの岩を片手で投げれるし、木の枝から枝へジャンプすることもできた。

加えて、クマ公から色んな武器を試しに使わせてもらったりして…

…多分、今の俺は軍隊に入れるくらい、武器の扱いが得意だと思う。まあ、軍人になるつもりはねーけどさ。

あと、この森はあのクマ公を初め、かなりへんてこな生き物ばかりだ。日本で見るとような動物もいるにはいる。だが、狐が二足歩行で歩き、ロングスカートを上手に着込むことなんて…ありえるだろうか？

あとはケンタウロスとか、ペガサスとか。日本では架空とされていく生き物のもいる。

気のいいペガサスがいて（そいつには、ハクと名付けた）背中に乗せてもらった時は、さすがに感激して夜はなかなか眠れなかった。

あと、あの巨大鳥…

湖でネツシーとロビンとプーと遊んでいたら、また来やがった。

…もちろん、返り討ちにしたが。

フライドチキンにしてやるーか！と、羽根を縛り上げたところでクマ公に止められた。ああいうのには関わらないほうがいいらしい。仕方ないから、散々脅して解放してやった。

あれ以来、巨大鳥は俺に刃向かってこない。

むしろ、貢ぎ物として色々な食べ物や服を持ってきてくれる。

…どっから取ってきた？と聞きたいところだが。

…まあ、色々と驚くことはあつたが、1番驚くべきは俺には意外と順応力があるらしいことだ。

普通信じられなくねーか？

森の動物たち（しかも一風変わった）と暮らしてる、なんてさ。言っておくが、俺は ツゴロウさんじゃねーぞ、おい。

そりゃ森には危険な動物たちもいる。だから、決して安全で平和な暮らしとはいえない。

…でも、俺は意外とこの暮らしを気に入っていた。
のんびりとしていて、ただ”生きる”ために生きるのが楽しかった。

…だけど、いつの間にか転機というのは訪れる。

それが、どれだけ厄介なものかを俺はまだ知る由もなかった…

—————

「……………ん？」

もはや恒例となった、子グマのお守り+ネッシーとの戯れに興じていた時だった。

何やら森のほうに妙にざわめいている気がした。

玲が森のほうに顔を向けたまま押し黙っていると、ネッシーが不安そうに瞳を潤ませて頬を擦り寄せてくる。

足元で喧嘩という名のじゃれあいをしていたロビンやプーも不思議そうな顔で玲と森を交互に視線を巡らせる。

それに気づいて、玲は安心させるようににっこりと笑った。

「心配すんな、どんな奴でも襲ってきたら、お前らは俺が守ってやるからな」

ネッシーはそれを聞くと嬉しそうに、きゅ〜と声を張り上げて玲の頬をすりすりする。ネッシーの頭を撫でてやると、甘えたがりのプーも、玲の足に擦り寄ってきた。

プーを抱き上げて、よしよし、と撫でてやると気持ちよさそうに目を細める。プーの身体は、さすがクマだけあってモコモコしていて気持ちいい。

「ほら、ロビンもおいで」

ロビンはプーほど甘えてはこない…が、実はプーよりも甘えっ子なのを玲は知っていた。

ロビンはおずおずと近づいてから、ぎゅっと玲にしがみつく。その姿に思わず胸がぎゅーっと締め付けられほど…萌えた。

「可愛い奴らよ…」

クククつと笑っていたら、空からハクが飛んできた。

「ハク」

ロビンとプーを腕から下ろして近づく。だが、ハクの様子がいつもと違っていているようで玲は眉根を寄せた。

「ハク、どうしたんだ？」

ハクは慌てているようで、玲の服の裾をぐいぐいと引っ張る。その様子に、玲は先程感じた違和感と関係があるのかも…と検討をつけ

た。

「俺をどこかに連れて行きたいのか？」

ハクはコクンと頷く。

ここに住む動物たちは俺の言葉がわかるほど頭が良い。俺も、分かった、と頷くとハクはすぐに背を見せる。

乗れ、ということだ。

ハクの背中に乗ろうとして…振り向く。ロビンやプー、ネッシーがこちらを見ていた。

何があるかわかんないのに、こいつらだけ残すのは心許ないな…

玲はハクに、ちょっと待ってて、と言うと手を口に持って行き……
ピーっと鳴らした。

その音が鳴って、数分もたたないうちに今度は巨大なオレンジ色の羽根を羽ばたかせた鳥が降りてくる。

「よく来たな、ボウ」

ボウと名付けたのは、あの巨大鳥だ。つい先日、怪我してるのを助けた結果、懐かれてしまったのだ。

ボウは、ギエツと鳴くと玲のほうにボテボテと近付いてくる。

空を飛ぶ姿は圧巻だが、歩きかたはヒヨコみたいで可愛い、と最近玲は思っている。

「ボウ、俺はちょっとハクと森のほうへ行ってくる。お前は、こいつらと一緒にここにいて欲しいんだ。いいか？」

ボウは、了解、というように小さく鳴く。

「ちんちん」

ボウのふさふさした胸毛を撫でてから、今か今かと待っていたハクのもとへと急ぐ。

ハクの背中に玲が乗ると、すぐさまハクは白い羽根を羽ばたかせたて飛び上がったー…

「ハク、一体何があつたんだ？」

ハクは、ふるふると首を振ってから羽ばたき続ける。そして、森と、それを取り囲む山々の中間あたりに向かっていく。

「あそこは…」

この森は、山々に囲まれてほとんど山の向こうにある外界とは隔離されている。しかも、人などいない、動物たちの楽園みたいなところだ。

始めは、この世界に人間はいないのかと危ぶんだが、よく巨大鳥たちが玲に貢ぎ物をしてくる時に、服や食べ物、剣などもあって、この世界には人間もいることは分かった。

だが、人間の姿は見たことがない。

それは何故かと、何気にクマ公に問い掛けた時だ。

クマ公に連れられて、森の端…つまり山の近くまで行ったのだがそこで…理由が分かった。

そこには人の骨だらけだった。

あの、ホラー映画とかで出てくるような本物の骸骨。あまりに荒んだ光景に息を飲んでしまい、さらには吐き気まで催した。

どうやら森に入るための山の付近には、獰猛な肉食獣がいるらしい。そいつら、時折ここに近寄る人間たちをあらかじめ襲い、食っているのだ。

じゃ、森の中の動物たちに被害はないのか？とクマ公に聞くと、木々につけられたある印を見せてくれた。

どうやら、それはその獣たちとの協定線らしい。

森の動物たちは、彼らのやっている行為に口は出さない

代わりに、彼らは森の動物たちには手を出さない…というわけだ。

もちろん、線を越えてしまったら…その協定はないことになるのだが。

「ハク、まさか俺らが向かってるのって…」

ハクは何も応えない。だが、こんなに焦るハクは見たことはない…
ということだ。

「ハク、急ごう」

玲が声をかけると、ハクも頷く。ハクは急降下に近い形で、森と山の間付近へと急いだ。

ハクは急降下にも関わらず、優雅とも言えるほど安全に着地した。玲は、ハクの背中から下りて辺りを見回すが、ここの空気は寒々しくて好きではなかった。

血の臭いがする…

玲はぐつと眉間にシワを寄せて、ハクの案内のもと歩き出す。ハクも緊張しているのか慎重に足を踏み出している。それもそうだろう、ここは肉食獣たちとの境界にかなり近い。下手をしてその境界を過ぎれば、すぐさま餌食とされてしまう。

ハクは、歩む速度を緩めないまま暗い森の中を辿っていく。玲も黙ってあとを続くが、ふと何か音が聞こえた。

立ち止まり、耳を澄ます玲に、ハクは服を引っ張って先を促す。

「分かったって、ハク。……ん、やっぱり音がする。これは…」

玲は、音のする方向がハクの行く方向だと気づいた。そして、玲もハクと同様に歩む速度を上げて進み始める。

「ハク、もしかしてこれ…」

言い紡ごうとした玲だが、すぐに口を閉ざした。そして身を屈めてゆっくりと…音が強くなる方向へと進む。

キン、カキン、カキン

これは……金属がぶつかりあう音だ…。

玲はさらに耳を澄ませて近付いていく。…そして、目の前にある光景が見えてきた。

「…あ
」

そこにいたのは、一人の若者だった。古びたマントに身を纏い、右手に剣を構えて目の前にいる怪物を睨みつけている。

「あれは…」

若者の目の前にいる怪物は…なんとも怪物っぽかった。トカゲのような身体に、チロチロと舌を突き出し、手足には獲物を引き裂くための鋭い爪がついている。しっぽにも三つ又の小さい槍みたいなのががついていて、先程響いていた金属音は、しっぽの槍と若者の剣がぶつかりあう音だったらしい。

若者は背中に何かを庇っている。それは……ペガサスの子どもだった。

「ハク…あの子ども…」

ハクに顔を向けると、彼は若者の後ろで奮えている子どもに釘付けだった。

玲は、ようやくハクが玲をここに連れてきた理由を悟った。

あの子どもは、ハクの子どもだ。

若者は力強く怪物と応戦しているが、多勢に無勢。おまけに彼は疲労が溜まってきているのか徐々に動きが鈍くなっている。

「あのままじゃ、やべーな…」

だが、下手に出ていっても危険なだけ。しかも、玲は鬱蒼と生い茂る木々を見上げ眉を潜めた。

この場所だと、地の利があるあの怪物のほつが有利だろう…

相手のほうに利がある場所で戦うのは得策とはいえない。玲はどうしようか…と考え込んでからハクの耳元に唇を寄せた。

それからハクが心得たように、頷くのを見て玲は口の端を上げる。

「行くぞ、ハク」

玲は近くに落ちてる石と木の枝をコートのポケットに入れる。

そして、怪物から死角にある木に登った。

身体能力が格段に上がった今だと木の枝にはジャンプすれば手が届く。だが万が一折れて、音を立てるかもしれない。

危ない橋を渡りたくない玲は、ただ黙ってスイスイと木の上へ上へと登って行く。

程よい太い枝に、腰を落ち着けて眼下の様子を伺う。

やはり、あの男は体力が落ちはじめていた。いつ、あの鋭い爪にかかってもおかしくはない。

玲は男の上空にいるハクに手を振った。
そうするうちに、男の剣が弾き返され男の態勢が崩れた。好機！とばかりに、怪物が鞭を奮うように尻尾を振り上げた。

ビュンッ

風を切る音と共に、石が怪物の頭にゴンッと当たる。
怪物たちは突然降ってきた石に、首を左右に降る。
だが、すぐに石の雨が再び怪物を襲っていく。

男は目の前の光景にポカンとしていたが、その瞬間目の前にハクが降り立つ。

「お前！！早く子供と一緒にそいつの背中に乗れ！！」

玲が声を出すと、怪物も男も玲のほうを見る。

玲は、新たな標的に舌なめずりをする怪物に再び石を投げつけ、男に怒鳴った。

「早く乗れ!!!」

男はハツとしたように、ペガサスの子を抱えてハクの背中に飛び乗った。

気づいた怪物たちがハクを襲おうとするが、間一髪のところでは怪物たちの手の届かない上空にまで昇っていた。

「よし、後は…だ」

獲物を逃がした怪物たちは、完全に玲に狙いを定めていた。

玲は、ふつと息を吐いてから近くの木の枝に飛び移る。

もちろん怪物たちも諦めるわけがなく、玲のあとはカサカサと腹ばいになりながら追いかける。

「結構はえーじゃん」

玲は怪物にピユウツと口笛を吹いて、移動スピードを速めた。

そして、先程ハクが降り立った開けた位置に來ると、その場に飛び降りた。

怪物たちは、すぐに玲を取り囲むように円陣を作る。

統制された動きに感心しながら玲は怪物たちに素早く視線を巡らせた。

…なんとかなるな。

怪物たちは、玲をすでに狩ったと思いきや喜びのおたけびを上げていたが……すぐにそれは恐怖の叫びに変わる。

玲は怪物たちの目では追えないほどのスピードで、次々と蹴り上げていく。

その動きは、（見えていたのだが）惚れ惚れするほど美しい。

先程の獲物よりも、明らかにレベルが違うことに怪物たちは気づいたらしい。

我先に逃げようとするが、一匹、さらに一匹と倒れていく。

最後の一匹……多分、このグループのリーダーは、訳の分からない恐怖に身をすくめ……獲物だと思っていた何かを見た。

玲は、ゆっくりと怯える怪物に近付いてー…微笑む。

「自分が相手を狩る時は、自分も狩られる側にもなることを覚えておくんだな」

その言葉を最後に、玲の上段回し蹴りをくらい、怪物は意識を遠退かせた…。

6 迷い人

――

「ありがとうございます!!」

地べたに頭を擦りつけんばかりに、男は手足を地面につけて頭を下げる――つまり、土下座だ。

「いって。俺はハクに連れて来られただけだし」

男…名をザイアスと名乗っていた…が、とんでもない!とばかりに首を左右に振った。

「貴方は私の命の恩人です!もちろん、あの…ハク?でしたよね、ハクにも助けられましたし…」

ハクはというと、ペガサスの子を群れに連れていくために早々と立ち去っていた。

だから、玲は今、このザイアスと二人きりだった。

「もう駄目か…！と思っていた矢先に現れた貴方はまさしく僕の救世主なんです…！」

「救世主ってお前な…」

大袈裟に言い過ぎじゃないか、と玲は思うがザイアスは一人で盛り上がっていて、玲を尊敬と憧憬の眼差しで見つめる。

「玲さんの動きを上空から見せていただきました。もう、僕はあれほど大胆かつ繊細な動きを見たことはありません…！かの神速の剣技の使い手でもある、クルセラーデ公爵に負けずとも劣らない素早さ…！素晴らしすぎますよ！」

興奮覚めやらぬ口調でザイアスが語るのを、玲は苦笑だけで応える。

こういう目は久しぶりに見るなあ…。

たった一ヶ月近く前だが、懐かしい思い出の中で笑う彼らを思い出

して玲は我知らず笑みを漏らす。
それをポーツとした表情でガイアスが見ているのに気づいて首を傾げた。

「どっした？」

「い、いえ。何でもございませぬ、ええ、何でもないんです」

何でもない、と何回か繰り返すガイアスに玲は何回言ってるんだよ、と心の中で呆れた。

それから玲は、気になっていたことをガイアスに問うた。

「お前、何であそこにいたんだ？あそこは肉食獣のたまり場で人がいたら、すぐにミンチにされちまうぞ」

そもそも、玲は初めてこの世界に来て動物以外と会ったのだ。なんとなく彼のことをジロジロと眺め回してしまう。

ガイアスは、玲の言葉にうう…と呟きながら下を向く。そして顔を上げた時は…顔が涙で濡れていた。

「お、おい！？」

泣いてる！？

さすがに、いきなり泣くとは思わなかったので玲はギョツとザイアスに目を向けた。

ザイアスは、スン、スンと鼻を擦ってから流れる涙をどこからか取り出したハンカチで拭いた。
花の刺繍がついた白いハンカチだ。

おいおいおい…

呆れ顔でザイアスがハンカチを目に押し当てるのを見て数分、彼はようやく目からハンカチを外すとボソボソと呟いた。

「私、カルディエ公爵に仕えているのですが…実は、人探しをしています」

「人探し？」

「はい、誰を…というのは内密なことなので言えないのですが、私を含めた騎士一同でこの近辺を搜索していたのです」

そしてザイアスは、一人だけ逸れ、あの森に足を踏み入れてしまったらしい。

玲は、へえー、と聞きながら近くに落ちていた木の実を拾っていた。マザーにこれでお菓子でも作ってもらおう、と思うと自然と涎が出てきてしまう。

「あの一…」

「なんだよ？」

「何もないんですか？」

「何がだよ」

「いや、あの。それは大変だったな、とか…そういうの」

「あ？慰めて欲しいっていうのか？」

玲が眉を潜めると、ザイアスは、そういうわけではないですが…と口ごもる。

玲はそんなザイアスを吊り上げた目で見ながら言い放つ。

「だいたいなあ。俺からしたら、森に迷い込んだのも逸れたのも不運じゃなくて、お前の過失だろうが。迷ったらまずその場で待機してんのが常識だろうよ」

ザイアスはまた潤み出した瞳をハンカチで抑えながら訴える。

「ズビツ…でも、右も左も分からないし、暗くなったら怖いし、とりあえず歩いていけば皆に会えるかもしれないって思ったんですう」

チーンと盛大に鼻をかむザイアスに、玲は、はああ…と溜息をついた。

だめだコイツ。

典型的な迷子タイプだ。

とりあえず集めた果物たちをコートに包んでいると、ザイアスが赤くなつた目でじつとこつたを伺っていた。

「何だよ」

「あ、いや。あの、何してるんですか…?」

気遣うように声をかけられ、玲は心の中で思う。

お前のが年上なのに、何でそんなにビクビクしてんだよ…

だがこれ以上言って、また泣かれると面倒だと思い口をつぐむ。

「あの…?」

「今日の晩飯の用意だよ。マダムに作ってもらったんだ」

「マダム…?」

「俺の下宿先のおかみ。じゃあ、俺はそろそろ行くから」

歩こうとした途端、服の裾を捕まれた。

「あの、僕も一緒に行つていいですか…?」

「着いて来たければ構わねーよ。ただ、自分の食糧は自分で調達しろ」

「ええ!?!」

「当たり前だろ。働かざる者食うべからず。自分の食べる分は自分で取れ」

半ベソになるガイアスを置いて、玲はそのまま歩いて行く。

「待つてください」

ガイアスは、白いハンカチを握りしめて玲の後ろ姿を追っていく。

「でも、この森の食べ物って何があるか分からないし…」

玲がちらつとザイアスに視線を向けると、ザイアスはすみませんっ
！！と頭を下げる。

それからしばらく歩いて、玲は木のツタに絡みついている丸みを帯
びた黄色い実を指さした。

「あれは甘くておいしいし、日持ちもする。マダムはあの実が大好
きだ」

「え!？」

ザイアスは玲と黄色い実を見比べる。玲は戸惑うザイアスに、顔を
しかめた。

「お前が取らないのなら俺が取るが…?」

「あ、取ります!取ります!!!」

ザイアスは慎重に実を2〜3個とって腕に抱えた。

「あの、玲さん…」

「行くぞ」

再び歩き出す玲に、ザイアスは潤んだ瞳で微笑んだ。

「はい、玲さん!!」

—————

異世界に来たというのに、夜に浮かぶ月だけは変わらず空に昇っている。

自分がいつも見ていた月があると思えば、とても心が安らいだ。

「今日も綺麗だな…」

一体自分は どうしてこんなところに来てしまったんだろうか。

ただ、月見をしていただけだったのに…

おまけに、海に映しだされた月を通してここまで来たのだと思うと、
どうやって自分は帰ればいいのかだろう…

「彩香…」

いつも眉間にシワを寄せながら玲を心配してくれた親友
彼女は、自分がいなくなっただけ心配してるだろう

「早く帰りかたを探さねーと…」

不意に気配を感じて、玲は振り向いた。
そこにいたのは、案の定というかザイアスだった。

「玲さん、まだ寝てないんですか」

「ああ。今日は目が覚めちまってな。お前は寝てなくていいのか
よ、まだ体調が戻ってねーんだろ」

「だいぶ良くなりました。マダムを作る料理は美味しいですし」

微笑むザイアスは、そのまま玲の近くに寄ってくる。

「いい、座つてもいいですか」

玲は答える代わりに、自分の身体を横へずらす。

ありがとうございます、と言いながらザイアスは玲の隣に腰かけた。

「不思議な森ですね、ここは」

「まあな。時々、本当に動物なのかと疑いたくなる」

それに対してザイアスは、ハハハと笑った。

「まさかクマに勝負を挑まれるとは思いませんでしたよ」

「あー、確かに。俺も初めて挑まれた時は驚いた」

玲がザイアスを連れて帰ると、クマ公は新しい挑戦者だと意気込んで、戦いを挑もうとしたのだ。さすがにザイアスは疲れているから、と玲がクマ公を宥めて事なきをえた。

「玲さんは、ずっとこの森に住んでいるんですか」

「いや、俺は…鳥に運ばれてさ」

「鳥にですか!？」

仰天!とばかりに目を見張るザイアスに、玲も苦笑するしかない。

「それで、…この森に？」

「おう。行くあてもなかったし、とりあえずはって思ってな」

「でも、早く帰らないと玲さんのご家族が心配するんじゃない？」

「…まあ、な」

口ごもる玲に、ザイアスは聞いてはいけないことだったのかと思いきり、慌てて頭を下げる。

「すみません…立ち入ったことを聞いてしまって」

「ああ、んな気にしなくていい。ただ…俺の住んだところはここか

ら随分遠いから…帰れるか分かんねーんだ」

玲の横顔をザイアスは黙って見つめる。何か言おうと口を開くものの、すぐに閉じて目を伏せる。

それに気付いて、玲は小さく笑ってからザイアスの頭にぱんつと軽く手をおいた。

「俺は帰るの諦めてるわけじゃねーんだ。だから、お前がそんな顔しなくていい。気にすんな」

「玲さん…」

「うりゅ〜…と、また目に涙を溜めるザイアスに玲は今度は声に出して笑った。

「お前、泣いてばっかだな。男ならしゃきつとしろよ」

「うう……すみません。いつも泣いてばかりでよく皆にも言われるんです。…玲さんみたいな強い男になりたいですよ」

「いや、俺、男じゃないけど…」

案の定、男だと勘違いされていたが玲は、その言葉が克也たちによく言われていた言葉と似ていて悪い気はしなかった。

「ばーか。なりたい、じゃなくて、そういう時は”なる”って言うんだよ。それにお前、あの肉食獣相手に八クの子を守ってたじゃん。普通、あんな状態だと自分一人だけ逃げようとする奴もいるんだぜ。あん時のお前、なかなか根性あつたと思うよ」

後半は照れ臭くなって、そっぽを向きながらまくし立てたがザイアスは感動したように目から大量の涙を流していた。そして、ガシツと玲の手を握って言った。

「玲さん…っ！！僕、僕…絶対に強くなります！！玲さんは私の師匠です！！人生の憧れです！！」

「いや、俺はお前の師匠じゃねーし。人生の憧れにされるほどでもねーから」

だがザイアスは玲の言葉が聞こえていないのか、鼻水を垂らしながらキラキラと尊敬の眼差しで玲を見ていた。

「一生着いていきたいです!!師匠!!」

「だから師匠じゃねえって!!つか、一生とか重い!!やめれ!!」

「嫌です!!師匠、僕、師匠と出会えて嬉しいです!!」

そうして、ザイアスは怪我が治る数日間ずっと、玲が諦めるまで師匠と呼び続けたのであったー…

7 森を出よう

「師匠！」

「……………なんだよ」

ザイアスと出会い早三日。

彼の体調はだいぶ快方へと向かい、今じゃもうクマ公と渡り合えるまでに回復していた。

さすがどこかに仕えている騎士だけあって、剣の使い方はしなやかで上手い。

素手での戦いが主に、な玲にザイアスは快く剣の使い方を教えてくれた。

おかげで玲もいっぱしの騎士並みにはなれている……らしい。

「見て下さいよ……これ……！」

ザイアスが袖をまくってみせると、そこには鳥の足跡がくっきりと残っている。

「お前ら、また喧嘩したのか」

「また、じゃないですよ！！あいつがいつつも攻撃してくるんです」

あいつ、というのはボウのことだ。

実は先日、玲がボウに子守りのお礼をしたところへザイアスがやってきて、ボウに切り掛かろうとしたのだ。

それは、玲が襲われている！とザイアスが勝手に勘違いしてやってしまったのだが、そのおかげでボウはザイアスを嫌っている。

…まあ、自分を切り掛かろうとしたのだから嫌いになるのは仕方ないことだが。

「仕方ねーだろ、それは」

「それはそうかもですけど……いきなり空から掴みかかろうとしたんですよ……？」

「まー、無事だったんだしいいだろ」

真剣に取り合わない玲に、ザイアスはめげたのかガクツと肩を落とす。

「師匠、ひどいですー」

とか言いながら、何で嬉しそうなんだよ、お前は。

ニコニコと引っ付いてくるザイアスは、どこか憎めない。

玲は小さく溜め息をつくと、後でボウにザイアスを襲うのはほどほどにしておけて言っておくか…と心の中で思った。

「ところでザイアス、お前、もう身体のほうは大丈夫なのか」

「はい！！全然調子がいいです！もう、あの怪物たちが襲ってきても大丈夫なくらいですよ！」

いや、襲ってこられたら困るんだが…。

「じゃあ、そろそろ仲間を探しに行ったほうがいいんじゃないか。探さなきゃならねー奴もいるんだろ？」

「…」

返事がないのを不審に思って振り返ると…ザイアスは恨めしげに玲を見つめていた。

「…何だよ」

「師匠と離れたくないんですよ、僕は…！」

駄々っ子のように宣言された言葉に、玲は呆れて額を手で押さえる。

「お前なあ…」

「師匠の男気を僕、受け継ぎたいんです…！だから師匠、一緒に行きましょーよー！」

「やだ」

「何ですかあああ…！」

「めんどくさい。つーか、何でわざわざお前と行かなきゃならねーんだよ」

「いいじゃないっすかぁ！！師匠、お願いしますよぉ！！」

土下座をしようとするザイアスを察して、玲は逃げるようにその場を立ち去る。

何なんだ、あいつは…

はあ、と玲な今度こそ大きく溜め息をついた。

このやり取りは、昨日からずっと続いている。
ザイアスと一緒に森を出るか否か…

玲はまだ森を出る決心がつかないでいた。
動物たちや森での生活に慣れてしまい、離れがたいのもあるが正直不安だった。

もし、森を出て、帰り方を探すとして……帰り方が見つからなかつ

たらどうしよう…」と。

森にいたら、またひょっこり帰れるかもしれない、という曖昧な希望はただの自分の逃げだと自覚している。

だが、もし…の事実が突き付けられたら自分は一体どうしたらいいのか。

その不安が頭から離れないのだ。

「我ながら女々しいなあ…」

ぼんやりと空を見上げる。

少し夕暮れがかった、赤とオレンジ、時々紫の混じったグラデーシオンにはうつつとりと見惚れてしまう。

「そろそろ…決心しねえとな」

それから一日たち、ザイアスが森を出ると宣言した。

どつやら、何かしら仲間からの合図があったらしい。

「師匠！一緒に行きましょうよー！」

相変わらずザイアスに一日中付き纏われたが、玲は返事をしなかった。

ただ、決心をつけようにもどうしたらいいか分からなかった。

「……………はあ」

ザイアスを撒まいて、ようやく一息つけたのは、もうすでに月が空に昇り始めたころだった。

今頃、ザイアスはロビンとプーにいいように遊ばれているに違いない。

ネツシーのいる湖の近くに立つ木の枝に腰掛けながら、玲はひっそりと月見をしていた。

月を見ていれば、このむしゃくしゃした気持ちも少しは落ち着くよくな気がする。

ネッシーは湖の中でお眠り中だ。
散々昼間に遊んでやったから疲れたらしい。

サワサワと夜風に揺れる葉音に耳を澄ませながら玲は、ただじつと
星空に浮かぶ丸い月を眺めていた。

しかし、不意に視界に黒い影がよぎる。

「…ハク」

月に映るペガサスの影は間違いようもなく、玲の友達であるハクだ
った。

ハクは優雅に翼を音もなく羽ばたかせながら、玲の座っている木の
根元に降り立った。

月のような金の瞳を玲に向け、じつとその場に立っている。
玲は、微笑むと枝から飛び降りる。もちろん、ハクに負けじと音も
なく、だ。

「ハク」

名前を呼び、その白い首筋に手を伸ばす。ハクは目を優しく細めて
玲の手にされるがままでいた。

「なあ、ハク。俺、どうしたらいいのかな」

ハクは小首を傾げながら、フンフンと鼻を鳴らして玲の頬に顔を寄せる。

「俺、森を出たほうがいいのかな、ハク…。でも、森に出て…本当に帰るやり方が見つからなかったら…どうしよう…」

弱気な自分は嫌いだった。

だが、誰もいない湖畔ではついつい心の声が漏れてしまう。ずっと…ここに来てからある不安。

胸に秘めていた弱音をハクはただ黙って聞いていた。

「ハク、俺…。本当は分かってたんだ。ザイアスがここに来たのは偶然だけど…偶然じゃねーって。ザイアスは俺の転機なんだよな…森を出て、また新しい道を見つげるための」

ぽつぽつと紡ぐ言葉は夜の闇の中にひっそりと溶け込んでいく。ハクの滑らかな毛並みは、とても心地よかった。

「でも…不安なんだよ、ハク。俺、もし…もし、”もし”が現実

なったら……って」

ハクの金の瞳には弱々しく笑う自分の姿が映っていた。

それを恥ずかしいと思う反面、いつも見慣れた自分にホッと息をつく。

ハクはただじつと玲を見つめていたがおもむろに、玲に背中を見せた。

これは、乗れ、という合図だと玲にはもう分かっている。

玲がおとなしく背中に乗ると、ハクはそのまま静かに羽ばたき夜の空へと上昇していく。

冷たい風が玲の頬を撫でるが、そんなのは気にならなかった。

ゆっくりと空の散歩を始めるハクにつられて、玲は眼下に広がる森を眺める。

昼間は緑や青でキラキラと輝く姿は、今やすっかり真っ黒に染まっている。

底無しの闇色のようで、玲は少しだけ身震いをした。

ハクは森の上をしばし遊泳していたが、すぐにまた上昇し今度は森を囲む山のほうへと向かっていく。

「おお…」

山の頂きをも越える上空までハクは昇っていく。
上空は冷たいというよりは寒いがそれでも玲は徐々に見えてきた光景に目を奪われた。

「綺麗だ…」

今まで見たことがなかった山の向こう側。
そこには遠くにだが、点々と輝く小さな光が見えていた。

「あれは…町、か？」

暗闇に浮かぶ光は、地上の星のように美しい。
玲はその光景を目に焼き付ける。
どんなに暗くても宿る小さな光。それが、こんなにも綺麗で…温かいものだと、どうして忘れていたんだろう。

総長として、辛いこと、悲しいことがたくさんあった。

そのたびに、皆で見に行つたのだ。
丘の上の秘密の場所で、自分達の街に宿る光を。

「ハク…俺、頑張るよ。…どんな結果が待っているとしても、今はただ…帰るかたを探す。絶対に」

それからしばし玲とハクは暗闇に光る小さな明かりを、黙って見続けた…

「本当ですか、師匠!!」

「ああ。さっさと行くぞ」

感激!!とばかりに目を潤ませるザイアスに、玲はそっぽを向きながら手早く旅の準備をする。
とはいっても、準備するほどのものはなかった。

玲が着ているのはここに着いた時と同じようなものだし、ほとんど持ち物などない。

「クマ公、マダム……」

さらに驚いたのは、クマ公とマダムが旅用の飲み水や果物を用意してくれていたことだった。おまけにクマ公から短剣と弓矢までも手渡された。

玲が森を出るというのを告げると、待つてましたとばかりに机の上に置かれた。

彼らは玲がザイアスと森にでるだろうと分かっていたらしい。

「ありがとう、クマ公、マダム」

クマのくせに……なんなんだよ……。

ザイアスの手前、涙は流さなかったが胸の奥がジーンと疼いた。思わず抱き着くと、筋肉がゴツゴツしていたが温かい腕に抱きかえられて……照れ臭かった。

「ロビン、プー、またな」

順々に頭を撫でてやると、二人とも玲の足にぎゅっとへばり付いて、クマ公が無理矢理引きはがすまで離れなかった。

ネツシーやボウ、ハク…その他仲良くなった動物たちにも声をかけると、皆玲を温かく見送ってくれた。

「師匠、人気ですね」

「すごいです！と勢いづくザイアスに、玲はふっ、と微笑んだ。

「ちげーよ。こいつらが、皆いい奴らなだけだ」

そうして、玲はザイアスと共に森から旅立った。

8 騎士団

「もう少しです」

ザイアスと共に森を出て一週間がたった。

あれから森を出て山を越えるまでにあつた数々の苦闘…

語るのは疲れるが、とにかく今の玲とザイアスはほとんどボロボロになっていた。

「もう少しって言って三日たってんじゃねーか、おい」

憎まれ口を叩きながらもザイアスを先頭に、二人は足場の悪い砂利道を必死で歩く。

森を囲んでいた山の中で一番急斜面で、一番獰猛な猛禽類たちが住まうところを抜けてきたのだから心身共に疲弊していれのは当たり前だった。

ザイアスの耳についている小さいピアスは、仲間との交信手段であるらしくてそのピアスでザイアスは仲間と連絡を取り合っている。だが、電波が悪いのかは知らないがほとんど連絡など取れていない状態で、とにかく仲間が近くにいる山を抜けをようということにしたのだ。

「食糧もだいぶ底をついてきたな…」

クマ公たちが持たせてくれた森の果物に加え、時折狩りをして得た肉もあつたのだが山を抜ければほとんど動物の姿はなく、食糧確保には望めなくなっていた。

「もう少しなんですよ、本当に！！さつきから、ピアスから聞こえる声はつきりとしてきて…」

はあはあと息を乱しながら歩くザイアスに、玲も続く。だが、やはりこの世界だと玲の身体は飛躍的に能力アップをしているようで息を乱すことはなかった。

それに対してザイアスは「さすが師匠です！」と目を輝かせてくるのだが、玲としてはこれは有り難いのかどうなのか、どうでもよかった。

今嬉しいのは、一週間水浴びも何もしていない身体でいるのに髪がベタつきもなければ変な匂いもしないことだ。

いやあ、楽ちん、楽ちん。

さすがに二人で水浴びなどできないし、かといって身体が汚いのは嫌だった。

だが、一週間放置したままの身体は汚いどころか一週間前と比べると変りない清潔さを保っているのだ。

これが喜ばずにおくべきだろうか？（いや、おくべきではない）

一人勝手にウンウン頷くと、ザイアスは不思議そうに首を傾げて尋ねてきたので、適当にごまかした。

それからはひたすらザイアスのピアス頼りに歩いた。

ただ歩くだけではなく、近くに食べ物や水がないかを探るように視線を巡らせる。

しかし、そんなのは見当たらず、とにかく早く合流しなければ餓死してしまう可能性がある……！と二人は先程よりも限界近くまでペースを上げた。

それから数時間ほど歩き、太陽がそろそろ山の中に隠れてしまう頃になった時だ。

「……………あー！」

ザイアスが突然声を上げて立ち止まる。
あやうく彼の背に鼻をぶつけそうになって、玲も慌てて歩みを止めた。

「あつぶねーな。何だよ」

「仲間が…仲間が近くにいます…！」

ザイアスは興奮したように叫ぶと、辺りに視線をさ迷わせる。倣うように玲も辺りに視線を向け…遠くに黒い…柱のようなものが見えた。

「おい、あれ…」

玲がザイアスに告げると、ザイアスはそちらに目を向けてから、ああ！…と叫んだ。

「師匠！！あれです、あれ！！僕の仲間です…！」

ザイアスは頬を染めて、やったやった！！とその場でピョンピョン跳ね回る。
無駄に体力を使うな、と一喝するとザイアスはすぐに跳ね回るのを止めた。

「距離は…少し遠いな」

「でも、そろそろ暗くなりますから早く行きましょう！少しペースを上げれば大丈夫です！」

「…そうだな」

玲が頷くのを確認してから、ザイアスはまた歩き始める。しかし、先程よりも足元はだいぶしっかりしていて力強い。

やはり、仲間が近くにいると分かるとさっきまで感じていた疲れなどは感じなくなるんだろうか。と玲はひそかに思って、微笑んだ。

……この世界に来て、ザイアス以外に初めて会う奴らだな。

妙に緊張を抱く自分を叱り付け、玲もザイアスと同じようにしっかりとした足取りで前へ踏み出していった。

歩き始めて数時間。

日もだいぶ落ちはじめた頃に、だんだんと前方にいる”人たちが見えてきた。”

一人や二人なんてものではない。何十人もその集団の気配に玲は改めて気持ちを引き締めた。

「よかつた…」

ザイアスは徐々に見えてきた仲間の姿にホッと安堵の息を漏らす。見えてきた集団のほうからも、歩いてくる二人組が見えてきたらしい。

ざわざわと騒ぐ人の声や、敵か味方かを判断するために場に張り巡らされた緊張感がピリピリと感じて、玲の顔には知らず知らずのうちには笑みが浮かぶ。

総長として、時に敵のアジトに乗り込んでいったものだが、これ以上の緊張感や日常ではなかなか味わえない。あのスリリングな日々は玲の日常に日常ではないものを常に与えてきたのだ。

懐かしいなあ…

集団のほうに、ザイアスが手を振りピアスに触れた。
ピアスから人の声が出てザイアスが応えると、すぐに集団からの殺
気が消えた。

「師匠、あれが僕の仲間ですよ!!」

「すげー人数だな」

「はい、30人くらいいますよ！」

「たかが人探しに多過ぎねーか？」

玲が聞くと、ザイアスは曖昧な笑顔を浮かべた。

「まあ…はい。人が人ですし…あの中には守らなきゃならない人も
いるんで」

「ふうん」

玲が興味なさげに呟くのにザイアスはホツとしたような、少し残念
なような顔をした。

近づいていくと集団の輪郭もだいたいわかってきた。皆、ザイアスのように古びたマントを身体に巻き付け、腰には無駄な装飾を省いた剣が下げられている。

遠くからでも分かる身のこなしは、ザイアスと同じ”騎士”なのだろう。

騎士って…

マジで俺、どんな世界に来ちゃったわけ？

まさか過去に飛ばされたとかないよな？と思いつつ、玲はザイアスと共に騎士たちのもとへ歩みを進める。

騎士たちも自分たちと同じような格好をしたザイアスを認めると、気さくに手を振るが、すぐに横にいる見知らぬ奴…玲に目をやると驚いたように目を見張った。

騎士たちと、互いに姿確認ができるようにまでなると、その中から一人の壮年の男性が進み出てきた。

「ザイアス・リード！！よくぞ無事に戻ってきた…っ」

鍛えぬかれた筋肉質な身体と、その纏う雰囲気から相当な手だれで

あることは察せられた。古びたマントの下にはザイアスの着ているものとは同じ作りだが少し豪華な感じの衣服をまとっている。なんでも、騎士の正装というらしい。豪快な仕草でザイアスの肩を叩くが、その目はうっすらと涙が受かんでいる。

「オルギード隊長……!!」

ザイアスも男を潤んだ目で見つめる。それに壮年の男…オルギードは懐から出したレースの白いハンカチを手渡した。嬉しそうにザイアスはそのハンカチを受け取る。その二人の様子に、周りの騎士たちも何かを感化されたのか皆、自分の懐からハンカチを取り出して目にあてた。

え!!?」

皆で常備してんのかよ、そのハンカチ!!」

中にはヤーさんのようなごつい顔をした奴もいて、そいつが目にはリースのハンカチを当てている姿は異様を通り越して不気味だった。一人、場違いな雰囲気を抱きながら横に突っ立っているとオルギードがザイアスの横にたつ玲に目を向けた。

「ザイアス。この少年は……?」

「あ、はい。彼はレイという名前の少年で僕の命の恩人兼師匠なんです!」

ザイアスが玲に助けられたことから森での生活、今までの旅を話すのをオルギードも周りの騎士たちも興味津々で聞いていた。やや誇張された面もあるが、玲の腕が素晴らしいものだと言アスが喜々として話すと、周りの騎士たちはそわそわしながら玲を見遣る。

…嫌な予感

案の定、ザイアスが話終わると周りの騎士たちは我先にと玲に近寄り、手合いの申し込みをしてくる。騎士というものは、クマ公と同じように格闘マニアでもあるらしい。

一気に男たちに囲まれた玲をザイアスは救い出そうとするが、男の壁にふさがれてそれにはできない。

どうしたものか、と考えたところで地を震わせるほどの力強い声が響いた。

「こら！お前たち！いきなりそうがっつくんじゃない！」

オルギードの一喝に、騎士たちは渋々玲から離れる。

ほっと息をつく玲にオルギードは、でかい身体を揺らしながら近づいて頭を下げた。

「私の名前はオルギード・ダイアル。公爵家の騎士団長を勤めています。ザイアス・リードは私の部下です…：こたびはザイアスを救い、ここまで送り届けていただき感謝します」

あまりに丁寧な口調に、玲は思わずビックリしながらも慌てて自分の頭を下げる。

「いえ、ご丁寧ありがとうございます。俺の名前は玲と言います」

互いに頭を下げて数秒、同時に頭を上げるとオルギードはにこやかに微笑んだ。

人の良さそうな笑みに、玲はこのオルギードに好感がもてそうだった。

人に好かれそうだな、ことういう人。

オルギードは玲を上から下まで見てから、不意に玲の腕を触り始めてから首を傾げた。

「素晴らしく引き締まっではいるが…これは」

オルギードが続けようとした言葉は、不意に割り込んできた第三者の声で掻き消された。

「オルギード隊長！！何をしているんですか！！」

「お、アルカートじゃないか。どうしたんだ、そんな顔して」

陽気に応えるオルギードに、近づいてきた男…アルカートは眼鏡越しの切れ長の瞳で睨みつけた。

「貴方がちんたら自己紹介をしているから、ディアル様がイライラし始めてるんですよ」

「イライラってなあ…」

ぼりぼり頬をかくオルギードに、アリカートは眼鏡を人差し指で押し上げながらきつく眦を吊り上げた。

「あの人の短気な性格を知っているでしょう！！さっさとザイアスとその…名前は何ですか？」

「玲です」

「失礼。ザイアスと玲さんを連れて行って下さい」

「一体何の話だ？」

と玲はザイアスを見上げるが、彼はアルカートとオルギードを交互に見遣っていた。

どうやら彼も状況を飲み込めていないらしい。

「つか、ディアル様って誰だよ。」

「ザイアスに問い掛けようとしたが、オルギードの馬鹿でかい声で掻き消されてしまった。」

「いよおーし！！分かった！今からディアル様んとこ行けばいいんだろ、行けば」

「そうですそうです」

コクコク頷くアルカートに、オルギードは満面の笑みで頷き返した。

「そうだな。だから、アルカート、今からこの玲と戦ってみて」

「は！！？」

玲、アルカート、ザイアスが同じように口を開けてオルギードを見遣る。

だが彼はそんな視線をものもしないで、ひたすらニコニコと微笑んでいる。

「いいじゃん。第一、ディアル様のもとに連れてくならそれなりに
”相手”を知っていたほうがいいし」

「ですがオルギード隊長！師匠は怪しい人物ではないし、ましてデ
イアル様に害をなすような人では…」

言い募るザイアスをオルギードを節くれだった大きな手の平で制す。

「まあまあ、ザイアス。お前の気持ちも分かるが一応やっとなかない
といかないんだわ。だから玲にも悪いが、アルカートと一戦やっ
てみてくれないか」

「はあ…」

ディアル様つつー、お偉い様に会う前にまずは俺の力量を確かめる
ってわけか。

”もしも”の対応をするために。

オルギードは申し訳なさそうに聞くが、別段玲は気にしていなかつ
た。

ま、これくらい警戒されて当然だ。と、むしろオルギードの考えに
同調していた。

「いっすよ」

気軽に頷くと、オルギードはほっとした顔をした。

「いやあ、すまんね。ありがとう」

アハハと笑って肩をばしばしと叩かれる。

そのせいでヒリヒリする肩を押さえていたら、ザイアスが耳元でいいんですか？と聞いてくる。

「ん、別に。ただあの眼鏡とやればいいだけの話だろ」

「あの眼鏡って…アルカートさんは副隊長で…、ああ見えてものすごく強いんですよ!？」

「へー、副隊長か」

あまり気にならない口調で言う玲に、ザイアスは本当に大丈夫か！？と顔を青ざめさせる。

当のアルカートと言えば、眼鏡を押さえながら、はああと溜め息をついていた。

だが眼鏡越しの瞳はすでに玲を捕らえていて、その視線の強さに玲はぶるつと身震いした。

おもしろー！！

にやっと玲が笑うのを見て、アルカートもオルギードも少しだけ目を見張った。

「これはまた…面白いことになりそうだな」

クククと喉を鳴らしてオルギードは、近くにいた騎士から練習用と思われる木剣を用意させる。

「玲は剣を使えるか？」

「少し…」

どちらかというところというより、完全に素手のほうが戦いやすいのだが、剣もザイアスとの打ち合いでそれなりにはできるようになっていた。玲は頷いた。

それにオルギードは満足げに頷くと、一つの剣をアルカートに、も

うひとつを玲に渡す。

「どちらかが相手の剣を弾けば終了だ。健闘を祈る」

すでに玲とアルカートの周りは騎士たちというギャラリイに円上に囲まれていた。

皆、玲がアルカートとどこまで打ち合えるか興味津々らしい。

「仕方ありませんね。手加減は一切しません、よろしいですか」

「上等」

玲が頷くと、アルカートはそつと眼鏡を押し上げてから剣を前に構える。

玲も同様に構えると、しばしの緊張感が辺りに満ちた。

玲もアルカートがかなり出来るのは雰囲気で察していた。

剣の扱いに関してはアルカートのほうが確実に上だろう。

普通にやったら負けるな…。

ふむ…と考えながら、アルカートの動きに全神経を集中させる。
数秒、互いに無音の時間が過ぎる。

――…動き出したのは玲からだった。

大きく跳躍してアルカートの背後に回る。

玲の人間離れさえする跳躍に、アルカートも周りで見ていた騎士たちも思わず目を丸くしていた。

ただオルギードだけは、ピュウと口笛を鳴らして面白そうに玲を見つめる。

スタツと音もなく後ろに降り立ち、剣を横に構えてアルカートに切り掛かる。

アルカートは寸でのところで避けると、すぐに態勢を立て直して攻撃にうつる。

カン、カン、カン、

金属ではない木剣が交わる音はどこことなく情けない。

しかし、二人から発する殺気にそんなのは気にならないほど、周りは瞬きも許さないくらいに目を見開いて二人の動きを追った。

一撃、二撃と互いの剣を打ち合う音が続く中、玲は知らず知らずのうちに関心を漏らしていた。

見ると、アルカートもどことなく微笑んでいて互いに真剣さながらも楽しんでいるような気分になる。

しかし、そろそろ打ち合いも頃合いだった。

玲が横に薙ぎ払った剣を、アルカートは手首を捻ることで向きを変ええる。

「うおー！」

そのまま器用に突き出された剣に玲は思わず後ろに下がるが、一瞬態勢を崩してしまふ。

その隙をアルカートは見逃さずに、そのまま下段から玲の剣を打ち上げる。

カーンという音と共に打ち上げられた剣を、皆してポカンと見つめる。

カン、カン、と地面にバウンドする剣を見つめ、しばしの沈黙が降り立つ。

「す、すげ…」

誰かが呟いたのを皮切りに、口々に叫ぶ声が聞こえる。しだいにそれは大きくなり、一層激しく高鳴った。

「すげえ!!!」

「アルカート副隊長にあそこまでやれるなんて!!!」

「つーか、やっぱりアルカート副隊長すげーよ!!!」

わいわい騒ぐ騎士たちを尻目にアルカートは息を乱しながら玲が落とした剣を拾い、それを玲に渡す。玲はそれを受け取りながら悔しげに顔を歪めながらも晴れ晴れとした口調で告げた。

「すげーな。あんだ、さすがに強いよ」

「…君にはハンデがありましたから」

小さく呟いてから、アルカートはその口元を上げて微笑んだ。その様子に周りにいた人らは、目を大きく見開いた。そ

「…笑った」

誰かの呟きに皆して一様に頷き物珍しげにアルカートを見遣る。
一心に集まる視線を、眼鏡越しに睨みつけると騎士たちは慌てて視線を逸らせた。

パチパチパチパチ

軽快な音が辺りに響く。見ると、オルギードが手を叩きながら二人に近づいてきた。

「いい試合だったな、二人とも！俺も久々に腕を奮いたくなった」

ぐるんぐるん肩を回すオルギードは、歳を感じさせないほど若々しい。近くにいた騎士たちは苦笑いしながらオルギードを見ていた。

「玲には、ぜひうちの騎士団にも入ってもらいたいくらいだ」

ニコニコと告げるオルギードに、後ろにいたザイアスが「本当ですか、隊長！！」と嬉しそうな声をあげた。

「まあ、とりあえず…先にディアル様のもとへ行かんな」

「そのディアル様って誰なんすか」

騎士たちの中の一人が手渡してくれたタオルで流れ出た汗を拭いながら聞くと、オルギードはきよとんとした顔で玲を見た。

「何だ、ディアル様を知らんのか」

「そんなに有名な人なんすか」

「有名も何も…この、カルディエ地方を治める公爵家の跡継ぎ様だろっ」

公爵の跡継ぎ様…

「へえ」

「…反応薄いな！」

ザイアスによく言われるようなツッコミをされてしまった。

だつてさ…

公爵とか、そんなもん今まで身近にいなかったし
つか、ジャパニーズで貴族って言ったら公爵とかじゃなくて、大名とか殿様だしさ。

「とにかくだ。ディアル様がザイアスと君に会いたがつてるらしい。
ま、あの人の場合は好奇心が強すぎるのがあれなんだが」

「はあ…」

「ほれ、そろそろ行くぞ。アルカート、あとのことは頼む」

アルカートはすでに息を整えており、オルギードの言葉に、はつ！
と応えて敬礼の仕草をとる。

ザイアスと玲はディアル様がいるというテントまで、オルギードに
連行されることになった…

9・変人若様と捜し人

「こつちだ、こつち」

オルギードの案内で連れられたのは、数人の騎士たちに囲まれた小さなテントだった。

跡継ぎ様なのに、ちっせーテントだな

キャンプ時に使うようなものとは少し趣が違うが、ほぼ似たり寄りたりだった。

ジロジロ眺めていると、横にいるザイアスのスーハーと息を大きく吸う音が聞こえる。

「ザイアス、うるさい」

「す、すみません。でも、ディアル様にお目通りできるなんて夢みたいで…！」

顔をほんのり赤らめる姿は、まるで恋する乙女のような。
げんなりとした気持ちでザイアスを見るが、彼はしきりに自分のマ
ントの汚れを払っている。

そんなに嬉しいことかねー…公爵様の跡継ぎ様とやらに会うのは。

理解できない、と心の中で呟く。先頭に立ったオルギードがテント
前に居並ぶ騎士に声をかけると、騎士の一人が敬礼をし、それから
テント内に入っていく。ものの数秒も立たないうちに、騎士が出て
きて「どうぞお入り下さい」と身振りで示す。

オルギードもザイアスも騎士たちに敬礼をしながらテントに入って
いく。玲は騎士でないからと適当に頭を下げるだけにして後から続
いた。

テント内は、さすが公爵と呼ばれるだけはある（とはいっても、公
爵がどれほど偉いか分からない）豪華な飾り付けがされていた。

テントの隅々で置かれている衣類入りのミニタンスや、飲み物、色
とりどりのお菓子らしきものが積み重なった小さなテーブル。何か
の毛皮で作られた絨毯の上には、触り心地がよさそうなどでかいク
ッション。

そこには、一人の青年が優雅に背を傾けていた。

「やあ、オルギード。やっと連れてきてくれたんだ」

朗らかに笑う青年は、顔も声もとにかく爽やかだった。

金と銀を織り交ぜたような髪をゆるやかに後ろで縛り、前を開けたシャツから覗く肌は、白く滑らかだ。

繊細さと優美さを合わせた雰囲気的美青年は、優雅に微笑んでいた。

ザイアスは、うわーうわーと小声で感嘆の吐息を漏らす。

玲はというと、青年の繊細な手を凝視していた。

この坊ちゃん、意外とできるな。あの手に剣ダコらしきものが見える…。

ジロジロと違う意味で観察する二人の視線を、青年…ディアルは悠々と受け止める。

「ディアル様。こちらが無事帰還を果たしたザイアス・リードと、ザイアスを助けた恩人だという玲です」

丁寧に二人を示しながら頭を下げるオルギードは、先程の無骨な感

じは一切しない。

ザイアスが騎士の礼として頭を下げる横で玲も同じように頭を下げてみる。

「頭を上げなさい。…ザイアス・リード、あの場所は、獰猛な生物たちが多くいるとのこと、我々は捜し切れずにいたのだ、すまない。だがよくぞ自ら帰還を果たしたな」

自身も頭を下げるディアルに、ザイアスはさっきまでほてっていた顔を青ざめさせながら、慌てて両手を胸の前で振った。

「めめめっそうもございません、ディアル様！！ば、僕が勝手に迷子になってしまっただけですから、自分で帰ってくるのは当たり前前です！！！」

その言葉に、そうか？とディアルは首を傾げてからゆっくりと首を振った。

「いや、だが探すべきではあった。なにせ、我々の友である君がいなくなってしまうのは非常に悲しいことになる」

「ディアル様…」

「…そして、待ち受ける未知との遭遇！！それを華麗に、鮮やかに、美しく、立ち回り我が花道にまた更なる未知の花を加えるのも一興」

あれ？

なんか、さっきより鼻息荒くなってね？

瞳を煌めかせ、握り拳を振るう様は妙に熱が入っているように見えた。

一人身体を震わせ、何やら美しさだの未知とはいかなる美味であるかを語る姿は…ぶっちゃんけ暑苦しいし変態っぽかった。

ちらりと見ると、オルギードは慣れた様子で笑っていて、ザイアスは目を丸くしてディアルを見ている。

「ああ！！代われるものなら私が代わってみたかった！！死と生の狭間の中で得られる高揚感！それがさらに内に私を煌めかせ、新たな美と知をこの身に宿らせられるのだ…！！」

あーあ…ナルシストだ。

こいつ絶対ナルシスト。

身体を引かないように気を配るが冷めた視線はどうにもならなかった。

誰だよ、こいつが公爵家のボンボンだったの。
ん？いや、待てよ…ボンボンだから変人なのか？

ひとしきり悦に入ってから、ディアルはゴホンとわざとらしく咳をしてから再びクッションに寄り掛かった。

「…して、ザイアスを助けた恩人である…玲、と言ったかな」

「ああ…はい、そうです」

敬語使ったほうがいいのかな、とも思ったが、どうにも敬語は苦手です。いついこんな口調になってしまう。

「あのような場所に一人でいたのか？」

「はあ、まあ」

曖昧に頷くと、ディアルの紫色に光る瞳と目が合う。
その時、妙な既視感が生まれた。

んー…？

なんか、どっかで見たことある…？

なぜかディアルも、まじまじと玲の顔を見つめていた。
しばし二人の視線が互いと互いにぶつかりあう…

瞬間…

「フィアネリーナ！！！！」

ディアルが叫び、いきなり玲に駆け寄ると玲をガバツと抱きしめた。

「……………はぁ！？」

あまりにいきなりすぎる奇行に、玲はポカンと固まってしまふ。ザイアスもオルギードも同様だった。当の変人：ディアルは、玲を抱きしめたまま何かに取り憑かれたように何かを口走っている。

「フィアネリーナ！！会いたかったぞ、ずっと…！！！！」

「いいから離せよ！！」

ボンボンがどうか関係ねーや、と力を入れてディアルを突き飛ばす。

ディアルは少しよろけて、玲を離す。その目は驚きというより、嬉しさに輝いている。

マジでこいつ、何…？

警戒しながら身体を引かせると、ディアルは潤んだ瞳で玲を見つめていた。その目線さえウザいというか気持ち悪い。

「フィアネリーナ…」

だから誰だよ、それは！！！！

助けを求めるようにオルギードとザイアスを見ると、なぜか彼らも玲を見つめていた。

信じられない…というような感じで玲も訳が分からずに眉を潜めた。

何だこの雰囲気…

この異様な雰囲気を作りあげた変人ディアルは、玲以外に目に入らないといった様子で全くと言っていい程、この雰囲気に無頓着だ。しかも隙あらばまた抱き着いてきそうだった。

「フィアネリーナ…こんなに大きくなって」

「フィアネリーナって誰だよ。つか、俺は玲だったの」

「違う、違うよ。君はフィアネリーナだ。その面立ちや雰囲気はまさに私と瓜二つ…いや、それ以上だよ！！」

「ちげーよ。頭大丈夫か」

「ああ、フィアネリーナ。君に会えないかと、もう帰らなくてはと諦めていたというのに…こんな間近で会えて話せるなんて…私は、私はなんて幸せなんだろう!」

だめだこいつ。

人の話を全然聞きやしねーし。

ザイアスにも言ってもらおうと、顔を向けたら、すごい目を見開いていたので思わずビクッとなってしまった。

「な、何だよ…」

「まさか、まさか師匠が本当にフィアネリーナ様なんですか…いや、でも師匠は男だし…」

ぶつぶつと呟いてる言葉に、そっぴや訂正してなかったな、と思いつつ至る。

だけど…今訂正するのやだな。

黙っていようかと思っただが、思わぬところで訂正が入った。

「ザイアス、気づいてないのか？玲は女性だぞ」

幾分か落ち着きを取り戻したオルギードが言うのを、ザイアスも玲もびっくりして見た。

「気づいてたのか」

「おー、筋肉のつきかたが違ってたからな」

だからあの時、変な顔をしてたのか…
やっぱり隊長というだけあるか…

「し、師匠…女の子だったんですか。それに、本当にフィアネリーナ様…？」

「…女なのは否定しねーが、そのフィアネなんだかではねーよ」

「何を言うんだ！！フィアネリーナ！！君は私が捜し求めていたフ

「イアネリーナなんだ!!」

「勘違いだ!! 訳わかんねーこと言っんじゃねえよ!!」

泣く子はさらに泣き出すと言われた睨みを効かせる。…が、ディアルはというと涙で目が潤んでるのか、ビビるどころか嬉しそうだ。

……っせえ。

「…俺、もう行くわ」

テントから出て行くこととしたら、ディアルが耳につくような叫びを上げてすっ飛んでくる。

「いやああああ!!!! ファイアネリーナ!! 行くな、行かないでえ!!!!」

「っげい!!!! 引っ付くな!!!! つか、ファイアネなんとかじゃないっての!!!!」

違う！誤解だ！と交互に言い合う二人に、オルギードがまあまあと割って入る。

「落ち着いて下さい、ディアル様。…えーと、玲、お前さんも」

「オルギード！！だが…」

「いきなり言っても分からないんでしょ、彼女は。とりあえず連れて行ったほうがよろしいかと」

「は！？」

玲がオルギードを見遣ると、彼はニコツと白い歯を見せて笑う。

「今は玲と呼ばせてもらうが…とりあえず来てもらいますよ」

「いや、意味わかんないんですけど。つか、フィアネなんとかってなんだよ」

「フィアネリーナ様。ディアル様の妹君。カルディエ家の姫様です」

は………

「はあああああ！…！？」

10・カルディエ公爵家

「フィアネリーナ！お腹はすいたかい？飲み物はいるかい？寒いなら温かい特上のひざかけを用意させようか？」

「…いらねえ」

ここは馬車の中。

うんざりするほど、はしゃぎ纏わり付くディアルに玲は怒鳴るのすら疲れて、頬杖をつきながら小さい窓から見える景色を見ていた。見ていたといっても、ほとんど景色は頭に入ってこない。

ただ流れるように目の前の景色がくるくると変わっていった。

…最悪だー、マジ。

今だ話しかけてくるディアルを無視して、玲は大きいため息をついた。

公爵家の姫君だか何だか知らないが、ディアルの強い要望（というか駄々をこねて）により玲は公爵家の馬車に乗せられている。ふかふかの座席に、小さなクッションまである豪華な六頭立ての馬

車。

見た目は黒一色に金細工で丁寧に装飾が施されていて、見た目からして金持ちの匂いがプンプンする。

「俺も馬に乗りたかったな」

ちらちらと窓に映るのは景色だけではなく、馬車を守るように囲んでいる騎士たちも見える。

馬にゆらゆらと揺れているその姿は、とても面白そうだ。

「だめだ！！だめ！！ファイアネリーナに馬は危ないから！」

「だーかーらー、ファイアネなんとかじゃねえって言うてんだろ！！」

俺の名前は香坂 玲だ！」

「コウサカレイ？ そんな気品のない名前であるはずがない。君は私の大切な愛しい妹だ！」

「人違いだっつの！！つか、人の名前に気品だのなんだの文句つけるんじゃないねえ！ぶん殴るぞ！」

拳を固めて脅すが、ディアルはというとヨロヨロと力無く座席に身を委ねる。

「ああ…ファイアネリーナ…君がそんな言葉遣いをするなんて…。君の可憐な唇に、そんな汚らわしい言葉は似合わないよ…いだっ」

ほぼ反射的に、ディアルのおでこにデコピンを喰らわせていた。

可憐な唇とかキモ…！

鳥肌が立ってきたんだけど！？

ぞわわ、と言いようもない悪寒が腕に走る。

ひいひい…！と、腕をさするが当分…というか、この変態若様から離れなければおさまりようがない。

ディアルは、デコピンされたところを手でさすってはいるが、なぜか嬉しそうに頬を染めている。

デコピンの威力はおさえたが、それでも赤くはなっている。なのに、嬉しそうに微笑むディアルの姿に玲の背中にうすら寒いものが走る。

あーっ…！…！

マジでここから抜け出してえ…！

「いっそ馬車から飛び降りてやるのか…と考えるが、四方八方を堅めつくす護衛たちがいるとなると万が一飛び降りに成功しても、馬に轢かれるか、すぐに馬車に押し込まれるか…になってしまう可能性が高い。」

「ちくしょう…」

「ちくしょう!? フィアネリーナ、君はもう少し姫君としての品位と可憐さを兼ね備えた言葉を…」

「黙れ!! 変態野郎!!」

「変態? 変態とは一体何という意味だ?」

真顔で返されて、玲は一瞬言葉につまる。

「心底分らない、というふうに首を傾げるディアルは本当にお坊ちゃんなのだな…と改めて思う。」

「あー、なんつーか…変わり者って意味だな。俺としては、あまり近寄りたくない…」

「ち、近寄りたくない!? フィアネリーナ!! 君は兄である私に近寄りたくないと…近寄り…ぐぼっ!」

ディアルは感情が高ぶりすぎたのか、いきなり何かに殴られたかのように身体を折り曲げて咳込んだ。

あまりの勢いに玲のほうは心配を通り越してドン引きしてしまう。

「うう… フィアネリーナ…私のフィアネリーナが…」

さめざめと泣き始めたディアルに、玲はもう声をかけまい、と決心して窓から流れ映る景色に目を向ける。

あのまま森にいたほうが良かったかも…

玲は、はあ、と何度目になるか分からない溜め息をついた。

「ディアル様、玲、着きましたよ」

馬車の外からオルギードの声がした。

ディアルはさめざめと泣いていた時に使ったハンカチを丁寧に折りたたみ、懐にしまう。

「分かった。父様と母様、それからアルティスに伝えてくれ」

「承知しました。…ノイドグレイア様とイアンリーデ様には？」

「あいつらには教えるな。うるさいからな」

忌まましく言い捨てるディアルに、オルギードの押し殺した笑い声がする。

それから「承知しました」と告げると、オルギードの気配が離れて行ってしまった。

ディアルは、ほくほくと顔を上気させながら玲に微笑みを向ける。変態ではあるが、もともと美形なだけあってそれは見る者を惑わせるほどの魅力があった……とはいえ、玲には何も感じなかったが。

「さあ、フィアネリーナ。君と私の愛しい家族だよ」

俺の家族は、ただ一人だけだったの。
いや…あと、三人いるか。

いつも世界を飛び回るハイテンションな母と、いつも玲を心配して
くれる彩香や、彩香の母、父が頭に浮かぶ。

間違っても、こんな訳分からん外国系の奴が俺の家族なわけねえ！！
つか、認めん。

鋭く細めた眼光で、ディアルを睨むが彼はそんなことに気づいてい
ないのかニコニコと笑っていた。

馬車の外がしだいに騒がしくなる。人の気配が増えているのを玲は
感じた。

何の気なしに窓の外に視線を走らせ……絶句した。

何だあの大御殿は！！！！

窓で見た限りでは収まりきらないほどの、大きい建物。
かの○ルサイユ宮殿もかくやと言わんばかりの絢爛豪華な造りをし
たそれがそびえ立っている。

外から見ただけでも分かるほどの間取りの広さと、それぞれにバル

コニーがついた部屋の数はホテルよりも多い気がする。外観は白を貴重にしているが、その豪華さを見るものを圧倒させるほどの存在感。

シンメトリリーの建物と、家の前にある並木道と、庭らしきものが言いようもない”美”を携えていた。

「すげえ…」

心の中で呟いたはずの言葉は、いつの間にか口から飛び出していた。

ディアルは、それを聞いて嬉しそうに目を細める。

「気に入ってもらえると嬉しいよ、フィアネリーナ。あれは我がカ
ルディエ家の誇りある家だよ。」

「は!!!?あれで家か!どんだけの金かけてんだよ、もったいねえ
な!!!!」

微妙にナマ臭い感想を漏らしながら、玲はポカンと口を開いて窓の
外に映る宮殿を見遣る。

「君の部屋も用意しているからね、フィアネリーナ。私が選りすぐ
った素晴らしい調度品やドレスがたくさんあるよ」

「……………は？俺、ここに居座る気ねーし。ドレスとか何？仮装大会でも開くのか、てめーは」

「仮装大会？ああ、素晴らしいね！！愛しい妹が我が家に戻ってきたのを皆に知らせるために舞踏会を開こう！！」

ねえ、こいつ異世界人だから話通じねーの？

頭ん中に何詰まってるの？

頭ぶん殴って揺らせば、リンリン音でも出すんじゃねーの？

何も言うまい、とは思っても（話が通じないから）さすがに理性の限界が近かった。

今までの玲なら、即上段回し蹴りを決めてから肘鉄を鳩尾に叩き込んでいる。

だが、さすがに見知らぬ他人だから、一応お偉いさんみたいだから、…と我慢に我慢を重ねていたのだが…

落ち着け、俺。

落ち着くんだ、俺。

さくさく誤解を解いて、こんな馬鹿とはおさらばしないと。

そして、家に帰るんだー…絶対。

ぐっ、と膝に置いていた手を握りしめ、決意を新たに
する。そこで馬車の僅かな揺れが止まった。
それから、控え目に馬車の入口がノックされる。

「お開けして宜しいですか」

「ああ」

ディアルが鷹揚に頷くと、入口がゆっくりと開けられる。

「どうぞ…」

開けられた戸口の横には口髭を蓄えた慇懃な感じの老人が立っ
ていた。

黒い燕尾服を着込み、丸眼鏡をかけたいかにもな老紳士だ。

ディアルは老紳士に頷くと、ゆったりとした動作で馬車から降り立
つ。

玲も続こうとしたが、なぜかディアルがこちらに手を差し出して

た。怪訝な顔をしてディアルの顔と差し出された手を交互に見遣る。

「手、邪魔なんだけど」

「お手を、我が姫」

「うざいことすんな、馬鹿」

ば、馬鹿：口でもごもご言いながらディアルは打ち萎れるようにその場に立ち尽くす。

意地なのか、差し出した手はそのままだった。

玲はあっさりとそれを無視して、ひょいっと馬車から降り立つ。視線を感じると、老紳士が太い片眉を吊り上げて玲を見ていた。冷たく光る瞳を玲も挑むように見つめる。

「…んだよ」

「差し出された殿方の手を取り、しとやかに馬車から降り立つのが淑女というものです」

「あ、そう。俺は別に淑女じゃねーから関係ねーよ」

俺発言をする玲に、古めかしい老紳士は目を剥いた。

「お、俺などと…そのような下々が使うようなお言葉を使うとは…」

「俺は昔から、ずっと俺のことを俺って呼んでんだよ。下々がなんだとか知らないっつもの」

「…ディアル様、誠にこのかたが敬愛すべきフィアネリーナ様なのですか」

「当たり前だろう…!!どこからどう見ても私のフィアネリーナだ!!」

「お前のじゃねーよ!!てか、フィアネなんたらでもねーし!!」

「フィアネリーナ。これはセバスチャンという。我が家の有能な執事だ」

「し、執事…!?!」

さらりとディアルは玲の言葉を丸無視して、勝手に横に立つ老紳士

の自己紹介をし始める。
むかつくことこの上ないが、玲はびっくりしてセバスチャンと自己紹介された老紳士……いや、老執事を振り仰ぐ。
セバスチャンは玲の視線に応えるように一分の隙のなく丁寧に腰を折る。

「初にお目にかかります、フィアネリーナ様。私、当カルディエ家の執事しておりますセバスチャン・ダクトウエイルと申します」

執事でセバスチャン!!!?

……ぷーっ!!!

めっちゃ似合う!!! すごい!!! モノホン執事だつ。

笑いを押し殺しながら、玲もとりあえず頭を下げる。

「あー、香坂 玲つす。名前は玲だから。ちなみに、俺はフィアネなんだかじゃないんで」

「……と、申しておりますが、ディアル様」

セバスチャンは玲ではなく、隣に立つディアルに向かって坦々とした口調で尋ねる。

「うーん、それが幾ら言い聞かせてもフィアネリーナだと信じてくれないんだ。全く、この頑固さは父様譲りだと思っただよ、セバスチャン」

「…左様ですね。しかし、容姿は大奥様の血を色濃く受け継いでいるようで」

「だよ、私もお祖母様の写真を拝顔していなければ分からなかったかもしれないよ」

「…おい、さつきから人を無視して何くつちやべってんだよ」

玲が口を挟むが、セバスチャンとディアルの会話は続いて行く。

「しかしディアル様。あまりに品位のなさすぎる言動は私の目に余ります。早急に、家庭教師をつけるべきかと」

「ま、それはおいおい。今は父様と母様とアルティスに合わせてあげよう。彼らは待ちくたびれているだろうし」

「では、先に屋敷に戻っておりますゆえ」

「ああ、分かった」

セバスチャンは、それから玲とディアルに礼をすると屋敷に去っていく。その鮮やかなほど無駄のない動きは、老いなどまるで感じさせなかった。

ディアルは、突っ立たままの玲に微笑んだ。

「さあ、行こうか」

「さあ、行こうか…じゃ、ねーよ！！俺のこと無視して話を進めんな！」

「フィアネリーナ…私とセバスチャンが話しているから寂しかったんだね！？ああ、ごめんよ、フィアネリーナ。次は三人で仲良く話そう」

「もういい。てめーと話すと、俺の血管がプチ切れそうだ」

改めて辺りを見回し、そこにザイアスたちの姿が見えないことに気づいた。

「なあ、そこの変態…じゃねえ、若様」

「若様って呼び方は何だい。私のことはお兄様、もしくはディアル兄様と呼ぶんだ」

「ザイアスたちは？」

兄様と呼ばれるのを心待ちにしていたディアルの心を打ち砕きつつ、玲はザイアスたちの姿を探す。

「妹につれなくされる…これもまた兄ゆえの試練なのだな…」

訳の分からないことを口にしながらもディアルは、ザイアスたちがすでに騎士の厩舎に向かってしまったと教えてくれた。

ザイアスには、きちんと女であること言っておけば良かったな…

あれよあれよと言う間に、馬車に乗せられてしまい、ザイアスの衝撃から立ち直らないまま別れてしまった。

あのショックぶりには、正直申し訳ないような気さえしていた。

「…後で会いに行ってみようか…」

ぼそつと呟いたところで、ぐいっと手を引っ張られた。

「さあ、愛しい妹よ！我が家へ帰ろう！！」

「誰が愛しい妹だ、誰が！！つか、手を離しやがれ！！！」

有無を言わず連行されるように玲は、公爵家と名をもつカルディ工家に足を踏み出すことになった。

――――

「お姉様あああ！！！！」

「うおっ！！！！」

無駄にでかい扉を開けた瞬間、何か弾丸のように飛び出してきた。持ち前の反射神経で避けると、それは運悪くディアルに激突してしまった。

「ディアル様！！アルティス様！！！」

近くにいた侍従、侍女らしき面々が慌てて床に伸びた二人を抱き起こす。

うーん、と目を回して倒れる二人を玲はまじまじと見ていた。

ディアルにしがみついて目を回しているのは、綺麗な金色の髪と赤いドレスを着た少女だった。

これがさっきの弾丸…？

少女は、ディアルより先に調子を戻したのか自分の下敷きになっているディアルを見て叫び出す。

「ぎよわああああ！！？姉様が兄様に！？え！？姉様ってディアル兄様にすっごくそっくりなのね！」

見目に反する叫びをあげ、ディアルを、姉様、姉様と揺らす少女に玲はまさか…と、ある予想が組み立てられていく。

この子、この変態の妹？
つまり…令嬢ってやつだ。

ふわふわに巻かれた天然ものの金髪は、テレビで見た外国人のそれよりもはつきりした色合いで美しい。濃い藍色の瞳がその金髪をさらに鮮やかに引き立てていた。目鼻立ちもくつきりしていて、美女といった申し分ない。

すっげー可愛い子だなあ

可愛い女の子に目がないのは自分でもよく分かっている。思わずジロジロ眺めていると、少女が不意にディアルから視線を外して玲を見る。

数秒、少女は黙りこみディアルと玲に何回か視線を走らせてから近くにいた侍女を呼び寄せ何かを耳打ちする。

侍女が頷くと、少女は頬をぽつと赤くし、勢いよくディアルを投げ捨てると立ち上がった。

投げ捨てられたディアルは、近くにいた侍従に介抱されている。

少女はシワにならないよう赤いドレスを伸ばし、パンパンと埃を払うといそいそと玲に近づく。

そして、うつとりとした表情で玲を見上げ、その可愛い唇をそっと開いた。

「あの…もしかして、フィアネリーナ姉様？」

小鳥のような愛らしい声に、玲は微笑んでしまいそうになったが慌てて顔を引き締めた。

「違う。俺の名前は玲だ」

「玲？それが姉様の”あっち”でのお名前だったのね。素敵だわ」

”あっち”という言葉に、引つ掛かりを覚え、玲は眉根を寄せて少女を見る。

「あっちって？」

「姉様が今までいらしたところのことですわ。私はアルティス・リン・カルディエと申します」

優雅、とはまさしく彼女の立ち振る舞いをいうのだろう。

その完璧な礼に、思わず見惚れてしまいそうになる。

「俺は香坂 礼。残念ながら俺はフィアナなんかではないから、君の姉じゃないんだ」

アルティスの”あっち”が気になるが、どう考えても自分はフィ

アネなんたらではない、と玲は自信をもって言える。
だから、アルティスのキラキラした期待に満ちた眼差しには悪いが
訂正を加える。

しかし、アルティスはゆるゆると首を振った。

「いいえ、姉様はフィアナリーナ姉様に間違いないですわ!!」

「何で？」

「姉様の美しい黒髪と、その灰紫の瞳が好みですの。あとは、……
……女の堪ですわ!!」

……あの兄にしてこの妹ありか。

露骨にうんざり顔はしないものの、思いつきり溜め息をつきたい気分
だった。

金持ちって、こんなんばつかなのか……？

しきりに姉様、姉様と微笑むアルティスは可愛いが、だからといって
自分が”姉”だと認めるわけにはいかない。

どうしたものか、と頭を悩ませたところで先程の老執事…セバスチヤンがコツコツと規則正しい靴音を鳴らして歩いてきた。

「旦那様と奥様がお呼びでございます」

セバスチヤンの案内のもと、玄関というかロビーにある螺旋階段を上り、公爵家の”旦那様”と”奥様”がいる部屋へと向かう。

外観も素晴らしかったが、内装も凝りすぎず質素すぎずという安定さで美しさを保っていた。

大理石の床に、赤い絨毯が敷き詰められ、ところどころの壁には模様らしきものが描かれたり、絵画が飾られたり、はたまた甲冑の騎士が置いてあった。

ヨーロッパ貴族に憧れていたとしたら、この家はまさにその想像をさらに上塗りして素晴らしく整えたものになるだろう。

家に美意識などない玲でさえ、この家は何から何まで美しいと思わざるをえなかった。

さすがだなあ、公爵って。

つか公爵ってどんだけ偉いんだ？

玲が知るお偉い人のイメージは、”王様 ” ” 貴族 ” という二種類しかない。

だから公爵と言われて、貴族だとは理解できるものの、貴族の中でどれだけ高い地位にいるかは分からない。

まあ、これだけの素晴らしさをもつのなら、なんとなく高い地位にいそうなものだが…

「こちらです」

セバスチャンが扉の前に立ち、三度ノックする。

「どうぞ」

低い男の声がして、セバスチャンがゆっくりと扉を開ける。

丁寧な仕草で促し、ディアル、アルティス、そして玲が中へと入る。ぱたん、と背後で扉が閉じられる音がした。

部屋は、案外広くてこの場でキャッチボールすらできそうな感じだった。（天井にぶら下がってるシャンデリアにぶち当たりそうで怖い）中央にはソファと、人数分の紅茶が用意されたテーブルがあった。

ソファーにはすでに先客がいて、くすんだ金茶の男と見事な銀の髪をもつ女がいた。

うわー…すっげえ美形。つか、もしかしなくてもこの二人が…

歳の頃は、三十代後半だろうが全くもって若々しささえ感じるくらい絵になる二人だった。

金茶の男は、180センチ以上はあるだろう背を折り曲げることなくただして、立ち上がる。それに続いてほっそりとした水色のドレスを身に纏った銀髪の女が優雅に立つ。

二人の顔は、玲の前にいる二人の兄妹に似通っていて、血の繋がりを確かに感じさせていた。

男はディアル、アルティスと見て玲に目を向けるとその紫がかった灰色の瞳を大きく見開いた。

小さく口で何か呟いてから、横に立つ女を見る。

彼女は潤んだ蒼い瞳で男の視線に応えた。

二人は頷き合うと、ゆっくりとこちらに向かってきた。

「父様、母様。ご機嫌麗わしゅう。ディアル、ただいま帰還いたしました」

ディアルが近づいてきた二人に丁寧に頭を下げる。

父、母、と呼ばれた二人…カルディエ公爵夫妻は頷いてディアルに帰還の喜びを告げる。

その親子なのに格式ばった仕草は、玲の背中をむず痒くさせた。

お貴族様ってのは、こうなのかー？
つたく、俺は庶民でマジ良かったわ

それからアルティスに二人が向かうと、アルティスはドレスをつまみ優雅に礼をする。

それを公爵夫妻は、困ったような顔で微笑みあってから…玲に顔を向けた。

しばし沈黙した後、先に口を開いたのは公爵だった。

「私がカルディエ家当主、プレシナス・カール・カルディエだ。よく…来たね」

続いて、銀髪の公爵夫人も瞳を玲に固定したまま微笑んだ。

「私が妻の、メイベラーデ・ユアン・カルディエですわ」

「香坂 玲…です。お招きありがとうございます?。」

なんとなく半疑問形で言いながら頭を下げる。

その姿をブレシアスもメイベラーデも、瞳を潤ませたまま嬉しそうに見つめていた。

どちらかは分からない、もしくはどっちもかも知れないが玲の耳に「フィアネリーナ…」と呟く声が聞こえたような気がした。

それからブレシアスの勧めで三人はソファアに座った。お尻にこれ以上ないほどふかふかした感覚を与えるソファアにくつろぐと、ブレシアスとメイベラーデがその向かいに座った。

「やあ…」

ブレシアスがディアルを見てから玲を見る。

「ディアル、この子が…フィアネリーナ…だね」

「はい、父様。私のこの何もかも見通す目に間違いありません。彼女こそ、私たちが探し求めていたフィアネリーナです」

「だから、それは人違いだって言ってるんだろ！」

さっきまでは公爵夫妻というのに遠慮していたが、ついついつもの調子でディアルの言葉を否定する。
セバスチャンが眉を潜めたこの口調に、公爵夫妻は驚いたような顔をしたが眉を潜めたりはしなかった。

「あら。私もフィアネリーナ姉様だと思いますわ。だって、父様の瞳と同じ灰紫の瞳ですもの」

確かにプレシアスの瞳は、灰紫だが…こんな色取りどりの髪色や目をした人らがいる世界なら、他にも灰紫の瞳をもつ奴がいるだろうと玲は指摘する。

「もう、姉様ったら頑固すぎますわ」

「俺は玲だ。姉様でもなんでもないんだから、否定すんのは当たり前だろう」

「しかしね、フィアネリーナ。私は君が妹であるという気持ちしか持てないんだよ」

「じゃあ、五十字以内にその正当かつ明確な根拠を言ってみろよ」

「仕方ない妹だな。いいだろう…まず私の麗しい瞳が」

「却下」

胸に手をあて、語り出すディアルをすぐさま玲が冷たく切り捨てる。そうやって、やんややんやと三人で言い募っていくと、今まで黙っていたブレシアスがゆっくりと口を開いた。

「少し落ち着きなさい、三人とも」

低い声は、穏やかながら有無を言わせぬ響きがあり玲も思わず口をつぐむ。

三人が黙ったのを確認するとブレシアスは頷いた。

「とりあえず…私からの意見では香坂 玲といったね。君は間違いなく私たちの娘…フィアネリーナだよ」

「そんなの、どうして分かるんだよ」

「まずは君の容姿が私の母にうりふたつであること、それと…その金のネックレスだ」

玲は自分の首にかかっているネックレスを手で触れた。
ずっと前に母がくれた大切なネックレス。玲はこれを好み、事ある
ことにつけていた。

「これは俺の母からもらったもんだ。悪いがあんたたちとは関係ない」

「あるんだ。そのネックレスに…小さく鷹の紋章が刻まれているだろっ？」

はっ、と玲がするのをブレスシアスは落ち着いた瞳で見ている。

「何でそれを…」

「それは私たちが生まれたばかりの君にと用意したネックレスだからね。鷹は私たち…カルディエ家の紋章なんだ」

「だけど、単なる偶然だ…そんなの。第一俺は…っ、あんたたちには信じられないかもしれないが…俺は、この世界から来ていない。異世界から来たんだ」

馬鹿馬鹿しいと笑われるかもしれないが、玲はこれを譲るつもりはなかった。

でないと、本当に自分はこの家の”娘”として扱われてしまう。

…だが、プレシアスたちの反応は玲が予期していたものを裏切るものだった。

「良かった、君は間違いなく私たちの…娘だ」

嘆息し、プレシアスは喜びに満ちた瞳を玲に向けた。

メイベラーデは、取り出したハンカチで涙を拭いている。

「…どういうことだよ。俺は異世界から…」

「異世界から来たのだろうか？ならば、私たちの娘なんだよ、君は」

「意味わかんねーよ！！異世界からきたら、何であんたたちの娘になるんだー！！」

激昂し、立ち上がる玲をプレシアスは深い紫色に光る瞳を見つめて言った。

「君は異世界に来たというが…本当は、君が今までいた世界が異世界で、ここが君の本当の世界なんだよ…フィアネリーナ」

11・公爵家の居候

「フィアネリーナ姉様あ。どこにいらっしやるのお？」

ピンクとシフォンを合わせたふわふわのドレスを器用に掴んで小走りになりながら、アルティスは左右を見渡す。

「もう、お姉様つたらまたあそこにいるのかしら…」

可愛らしい小さな唇を尖らせて、アルティスは再び長い廊下を走り出す。

「アルティス様、そのように廊下を走るものではありませんぞ」

「あら、セバスチャン。ごきげんよう」

カルディエ家の先代当主から仕えているセバスチャンは、この家の古株であり、屈指の執事だ。口うるさいセバスチャンは、アルティスにとつても姉にとつても目の上のたんこぶ的存在だ。

だが、そんなことはおくびにも出さず、アルティスは優雅に礼をす

る。

「セバスチャン、お姉様をお見かけしなかった？」

いつも無表情のセバスチャンの眉がピクリと動く。

「フィアネリーナ様ですか。…多分またあそこにいらっしやるのか」と

「そう、分かったわ。ありがとう、セバスチャン」

アルティスが小走りにならない程度に立ち去るのを、セバスチャンは溜め息とともに見つめた。

「全く…カルディエ家の姫である自覚があるのだろうか、あの方は…」

敬愛し、心から仕えている当主夫妻を頭に思い浮かべながらセバスチャンは物憂げに窓の外を眺めた。

カルデイエ公爵家は、先代、先々代、さらに前の代から続いており、カルデイエ公爵の家紋である”鷹”を見せると、そこらへんの一貴族は真つ青になってしまいうくらいの大貴族だ。国王からの覚えもめでたく、王家の血筋を引くクルセラーデ公爵にも次ぐくらいの力をもつ、屈指の有力中の有力貴族なのだ。

カルデイエ公爵領地といえば、美しい山々に囲まれた緑豊かな土地が多く、そのため国の農産物の大部分はカルデイエ公爵領地から産出されている。

重い税を課すこともなく、時に領民に混じり畑作をする姿は公爵という地位にある大貴族であることは感じられず、珍しいほど領民には親しまれている。

それも全ては公爵の温かい人柄のおかげだ、と口々に人は言う。

カルデイエ公爵は愛妻家でも有名で、彼には愛した妻の間に三人の息子と一人の娘がいる。

長男であり跡継ぎである

ディアル・フォリアス・カルデイエ

金と銀を織り交ぜた髪に、紫がかった瞳をもつ美貌の公爵Jr.として、今、若い娘の中で結婚したい人上位にランクインしている。

次男である

ノイドグレイア・ユシィ・カルディエ

王国騎士の副隊長を務め、剣よりも槍を使うのが得意だという兄弟の中でもその身体能力は非常に高い。

三男である

イアンリーデ・ユグノ・カルディエ

次男のノイドグレイアの双子の弟で、王立研究所に所属するカルディエ家きつての天才だ。

そして、

アルティス・リイン・カルディエ

その愛らしさは、カルディエ家の宝玉であると言われる姫君。
ダンスをすれば野風のように軽やかに、歌をうたえば小鳥のように美しい。

カルディエ家は仕える者、治められる者、全てにとっては自慢できる”主”だった。

だが、最近ではある噂が流れている。

実はアルティス姫の上にはもうひとり姫がいて、かの姫は非常に身体が弱く、今までずっと一目知れずに療養していたのだ…と。

しかし、今だ誰も…

カルデイ工家に仕えている者以外は”深窓の姫君”を知る者は誰もいなかった…。

「…っていう噂が流れているらしいのよ、お姉様」

「…へえ、」

とっておきの話がある！と勇んでやってきたアルティスに、噂の”本人”は、なんとも味気ない反応しかなかった。

「お姉様は深窓の姫君なのですって！！そして、世にも稀な美貌をしているらしいわ」

「馬鹿馬鹿しい」

玲は、近くにいた騎士から手渡されたタオルで流れ出る汗を拭いながら吐き捨てる。

「師匠が深窓の姫君ですかあ。ははは、またすごい噂ですね」

「まあ、ザイアス！あなた、お姉様を馬鹿にしていらっしやるの！」

アルティスが綺麗に揃えられた眉を上げると、ザイアスは慌てて首を左右に振った。

「め、めめ滅多ありません！師匠を馬鹿にするなんて、できませんよー！」

ちぎれんばかりに首をふるから、ささやかな風が玲に当たる。

「あ、ちょっと気持ちいいな」

「ほら、ザイアス！！もつと姉様のために風を送りなさい！」

「えー!?は、はい……」

持っていたタオルをバサバサと揺らすザイアスに、アルティスももつと！もつと！と声をかける。

あほか…

「もういいから」

それを聞くとザイアスは、ぜえっぜえっと思しく肩で息をする。

先程の稽古でも息があがってたのに、本当によくやるな…と玲は憐れみにも似た気持ちでザイアスを見遣る。

ザイアスは、玲が実は女で…しかも公爵令嬢（一応）であることにひどく狼狽し、つい先日、数々の無礼をお許し下さい！…と泣きながら土下座をしてきた。

令嬢であることは、とりあえず置いておいて女であることを黙っていたのは俺だから…ということまで土下座はやめさせた。

それならば姫とお呼びしたほうが！…とか言いはじめる始末で、師匠が玲って呼ばないと許さん、と言いつ聞かせ（脅し）、今まで通り師匠と呼ぶことにしたらしい。

「騒々しいですよ、ザイアス、玲」

「あ、すみません！アルカート副隊長！」

アルカートは、不機嫌そうに眼鏡を押し上げ、玲とザイアス、アルティスにまで睨みをきかせる。

「アルカート、な、何ですの。私は別に騒々しくなど…」

「アルティス様がいらしてから、三割増し騒がしくなりました」

「さ、三割増し!?!」

令嬢であるアルティスに、こういう軽口を叩けるのはオルギードとアルカートくらいだ。

特に、彼にいたっては”例え仕える主君だろうが自分のテリトリー内は私がルールです”ということらしい。

一部非難を浴びてはいるが、玲はアルカートのそういうゴイニングマイウエイな性格は結構好きだった。

「アルカート、悪いな」

「全くです。玲、ディアル様がお呼びしているようですよ」

「げ…」

あからさまに顔をしかめる玲に、周りも思わず苦笑し、ひっそりとディアルに声援を送る。

「お姉様、そんな顔してたらディアル兄様が拗ねちゃいますよ」

「あんな変態、勝手に拗ねてればいいだろ。毎夜毎夜、部屋に押しかけてきやがんだから」

「まあ！お兄様つたらずるすぎますわ！私も今夜参りますね」

「来んでいい！」

「照れなくてもよろしいのに」

誰が照れてんだよ、誰が。

見た目は違えど、そっくり兄妹に玲は大きく息を吐く。

「じゃ俺行くわ。アルカート副隊長、ザイアス、それから皆、ありがと」

何人かは、じゃあな〜と気軽に手を振ってくれるが、他からは「フイアネリーナ様、お気をつけて」と律儀に臣下の礼をされる。

普通に玲でいいって言ってんのに…

公爵令嬢という肩書きがなかなか拭えないことに、玲は知らず顔を曇らせる。

あれから五日か…

「は…？ぶじいじいことだよ、おい…！」

目の前に座っているカルディエ公爵に掴みかからんばかりの勢いで、玲は声を荒げる。

「愛しいフィアネリーナ、落ち着いて」

「うるせえ！！これが落ち着いてられるか！こっちが俺の本当の世界とか：何言いやがんだよ！！」

しかし声を荒げる玲とは違い、カルディエ公爵は至って落ち着いていた。

「言葉通りの意味だよ。君は私たちの娘で…ここが君の本当の…在るべき世界なんだ」

「ふざけんな！！俺にはちゃんと母親がいるんだ！」

いつも世界を飛び回る、ハイテンションな人だけどいつも玲を気にかけてくれていた…母親

「だから、俺があんたたちの娘つてのは人違いだ！！」

「じゃあ、そのネックレスのことはどう言っただ？」

憎たらしいほど落ち着いた瞳でカルディエ公爵は玲を見つめる。同

じ紫がかった瞳だが、公爵の瞳は深い水底を思わせるほどで……見
つめ返したら深く引き込まれそんな不思議な感覚になる。

「…っ、それは、たまたまで…」

「偶然などこの世にはない。君がこの世界に戻ったのは全て必然な
んだよ」

「必然も何もあるか!!…一万歩譲って、俺がこの世界の住人だっ
たとして…、何で俺はあっちにいた!？」

「…時の通い日のせいだ」

「時の通い日…?」

何を言い出すんだよ、と顔をしかめる玲に公爵は至極当然のように
語る。

「君もわかると思うが…私たちの世界の他にも色々な世界がある。
そして、それは個別に存在するわけではなく…どの世界の点や線で
繋がっている。普段は繋がっていたとしても、決して互いに影響が
当たらないようにしているが、何十年かに【時の通い日】という日
ができる。その日は、世界と世界の繋がりが弱まり、別の世界へ行

く扉が生まれる。フィアネリーナ、君は16年前にできたその扉から落ちてしまったんだよ」

「そんな目茶苦茶なこと…」

「信じられないことだとしても、真実なんだ。君は誤って時の通い日にできた扉をくぐり…別の世界に行ってしまった」

公爵の隣に座る公爵夫人が、堪えきれなくなったのか嗚咽を漏らす。震える夫人の肩を公爵はそっと抱く。

「フィアネリーナ…私たちのフィアネリーナが戻ってきてくれて、私たちはとても嬉しいんだ。君は私たちの大切な家族だから…」

「だけど俺は…」

何か言い募ろうとしながら、何も口に出せなかった。言い返したいのに、何で何も言えない…？

ぐっ、と拳を握り、玲はただ自分の膝を見つめた。

「お姉様…」

そっとアルティスに手を握られるが思わずその手を振り払った。

「あ…わりい」

アルティスは、驚いた目をしていたがすぐに首を左右に振った。

「俺は、香坂 玲…だ。例え、それが本当だとしても…俺にとってはあっちが本当の世界だ…」

ようやく絞り出した言葉は、少し弱々しかった。
新しく突き付けられた”事実”を馬鹿馬鹿しいと思いつつも、どこか心の中では否定しきれないというのがあった。

初めて会った人たちなのに…
何で懐かしい感じるんだろ…

戸惑いと、それを受け入れたくない葛藤に玲は歯を食いしばる。

「フィアネリーナ…君がすぐに受け入れられない気持ちは分かるよ。だが、帰るとしても次に扉が開くのはいつになるか分からない。だから、今は私たちと一緒にいてくれないか。そして、君があっちに行くか、私たちといてくれるか…決めて欲しい」

「…え」

玲の葛藤を分かっていたかのように、カルディエ公爵は緩やかに笑う。

「父様！何を馬鹿な…、フィアネリーナは私たちの大切な妹でしょう。ずっと私たちといるべきです！」

ディアルが憤然と言い放つが、それをアルティスがぴしゃりと言いつ返す。

「兄様！！姉様のお気持ちも考えなさい。いきなりそんなこと言われて受け入れられるはずないですわ」

「アルティス…」

「姉様、姉様は姉様です。でも、姉様がどちらを選ぶかは自由ですわ」

「…ありがとう」

初めてふつと微笑むと、アルティスもキラキラとした目で笑う。

「アルティスの言う通りだよ、ディアル。私たちのことばかり押し付けてはいけない。とりあえずは、私たちの屋敷にいなさい。いいかな」

「…分かりました」

「…ああ…いや、…はい」

頷く二人に、公爵夫妻もにこりと笑う。

それから玲は、カルディエ公爵の居候となることになった…

12・双子登場

コンコンコン

ディアルが待っているという部屋のドアを嫌々ながらも三度ノックする。

すると、一分もたたないうちにすぐさまドアが開けられた。

「「ファイアネリーナ! !」」

二つのよく似通った男の声と共に、玲はむぎゅっと左右から抱きしめられる。

「な、なん…うおおっ! !?」

「うわあああ! ! 本当にファイアネリーナがいるうっうっ」

「……可愛い」

叫びなど無視されて、リアルサンドイッチのよつこぎゅこぎゅこつと両側から押し潰される。

窒息死という最悪の事態が頭によぎったが、すぐに誰かに腕を捕ま

れて救出された。

「フィアネリーナ、大丈夫か！」

目の前は見飽きるほど見たディアルの顔。ディアルなんぞに救出されたというのは腑に落ちないが、とりあえず窒息死にだけはならなかったことにほっとした。

「お姉様、大丈夫？」

部屋に入り駆け寄ってきたアルティスも心配そうに玲の顔を覗き込む。

「なんとか大丈夫……」

「良かった。……もう……！お兄様たち、あやうくお姉様が窒息してしまっただけでしたわ！」

お兄様たち……！！！？

バツと振り返ると、そこには着る物こそ違つが同じような顔をした

二人の男が立っていた。

まさか、こいつら…

「貴女の兄君であられるノイドグレイア様とイアンリード様です」

「おおっ！！！？いつの間に！」

まるで影のように横に立っていたのはこの家を仕切るセバスチャンだった。

この爺さん、神出鬼没すぎだろ！！こえー…。
てか、何で俺の心の声に答えてんのよ。

「私ほどの有能な執事であれば、造作もないことです」

有能な執事って自分で言いきった！！

っ！か、また俺の心の声に反応しやがった！！

この爺さん侮れねえ…

自称有能な執事セバスチャンが言うには、二人の兄たちは王宮で騎士、または研究者として仕えており、今回は【妹】が16年ぶりに帰還したということですから、すぐ休暇届けを出して家に帰ってきたい。

「会いたかったよお、フィアネリーナ」

人好きのする顔をして微笑み、蜂蜜色の髪をふわふわさせているのがディアルのすぐ下の弟であるノイドグレイア。
細っこい身体を纏う赤銅色の甲冑が目を引きいた。

王国騎士の証である、二匹の獅子が描かれた紋章を胸につけている。

見た目はかわそつだが、どんな武器でもこなす強者らしい。騎士では副隊長を勤めているほどの実力者だという。

「……俺も」

ぽつと頬を染めてはにかみ、銀のサラサラした髪を腰まで伸ばしているのはイアンリード。

ノイドグレイアの双子の弟であり、天才と称され、王立研究院で日夜さまざまな研究をしているらしい。

さまざまな研究ってというのがどんな研究なのかは分からないが、ノイドグレイアと似たような顔立ちだが、色素が薄いせいかなノイドグレイアよりもさらに細く、女っぽくみえる。

だぼだぼの白衣を着ているからなおさら、細さが際立っている。

二人とも長身で、おまけに言わずもなだが美形の部類に入るだろ

う。

異世界って美形多いな…!!

という感想を抱きたいが、これが自分の家族だと思つとどこかやる
せなかつた。

「フィアネリーナがこんなに可愛いなんて…想像してた以上だよ！
ねえ、イアン」

「……うん、可愛い」

いや、可愛いって言葉はむしろあんたたちに似合つんだが…。

「フィアネリーナ、僕のことにはノイド兄って呼んでね」

「……イアン兄……」

「あ、ああ……。でも、一つ言っておくが俺はフィアネリーナって言われるのは慣れてない。つか、まだ認め切れてねーんだ。だから、玲って呼んでくれるといいんだが……」

「フィ、フィアネリーナ……が、そんな”俺”って……認めてないって……」

「……………」

よろつとよろめくノイドグレイアを、イアンリードが後ろからそつと支える。イアンリードの目も幾分が見開いている。

皆……ついつい反応なんだよな……

公爵から公爵家に直に仕える家人たちにだけ玲の存在を発表した時も、だいたいこんな反応をされていた。

まず”俺”って言うってることと、玲自身が自分を”フィアネリーナ”だと認めてない部分で。

でも、玲自身もそこは譲れない。

もし自分がフィアネリーナだと名乗ることを認めてしまえば、……も

うあつちに戻れないような気がしたから。

だから、フィアネリーナだと自分は認めていないとあえて言っている。

それでも周りがフィアネリーナだと呼ぶなら、呼ぶで構わなかった。

自分が自分を”香坂 玲”だとずっと思っているのだから、周りがなんと言おうとどうでも良かったのだ。

「フィアネリーナ…君は、君は…」

ぶつぶつと呟くノイドグレイアの姿は、ディアルに少し似ていた。

「君は…なんて、なんて…」

面白いんだ！……！……！

「………は？」

面白い？

今、面白いって言った？この人。

啞然とする玲などお構いなしに、ノイドグレイアはキラキラした蒼い瞳で玲を見る。

同様にイアンリードもうつすらと頬を染めてこちらを見ていた。

「ファイアネリーナ！！そんつつなに可愛い顔して、俺！！しかもその、少し思いつめた表情が最高！！最高すぎるうう！！」

身もだえるように自身の身体を抱きしめる姿に、玲はなんとなく危険を感じて一歩下がった。

「玲っていうのが、君のあっちでの名前なんだね！！あーっ！！いい！！玲って響きがいい！！ファイアネリーナって呼びたいけど、玲つてのも捨て難いよ！ねえ、イアン！」

「……………うん、どっちも呼びたい……………」

「それならさ！ファイアネリーナつてのを、フィーネって呼ぶのもい

いよねえー!!」

「…ファイもいい」

「どうせなら、玲とファイアネリーナをくっつけて、レフィって呼ぶのはどうかなあー!!」

「……………レフィ、いいかも」

何なんだ、この双子は…。

レフィって何!?

もう何が原形なのか分かんねーよ、その呼び方!!

今だ呼び方の議論を続ける双子を呆れた目で見てみると、横にいるディアルがもぞもぞと動き出した。

振り仰ぐと、その顔の横に（怒）マークがうつすら見えた。

「おのれえ…双子め。…私だって、私だって!!!ファイアネリーナを特別な呼び方で呼びたいいいいい!!」

叫ぶなり、ディアルは二人の議論に無理矢理割り込んでいった。

おまけに議論の内容が、玲の呼び方ではなく、玲にどう自分たちの名前を呼ばせるかに変わっていた。

「お姉様」

「……………何」

「私も参加して来ていいかしら。楽しそうだわ」

見ると、アルティスもワクワクした瞳で三人の男たちを見ていた。

「……………やめとけ。馬鹿らしいから」

公爵家って…変態ばっか。

これが自分のこっちでの”家族”かと思うと、頭を抱えたくないのは…当然だと思いたい。

「セバスチャン、俺、部屋に帰っていいかな」

「…あと三分お待ち下さい」

三分後、三人が結局話がまとまらなくなるまで、玲とアルティスはセバスチャンに煎れてもらった紅茶を飲みながら、手製のクッキーを食べて時間を過ごした。

見えた目違えど、根本的に似たり寄ったりな兄妹たちを見ると自分もまさかそんな感じなのかと思えて…ひそかに玲は落ち込んだ。

「まあ、今はとりあえずフィアネリーナって呼ぶことにするよお」

「……………フィアネリーナ……………」

「分かったよ」

玲が渋々頷くと、ノイドグレイアは満面の笑顔でイアンリードはほんわか笑顔で頷いた。

「改めてよろしくね、フィアネリーナ」

「……よろしく」

「よろしく」

二人から差し出された手を見て、一瞬躊躇してから握り返した。ノイドグレイアの手は意外とゴツゴツしていたし、イアンリードの手はところどころに薬品焼けのような跡があった。

「ごめんね、フィアネリーナ。あんまり僕たちの手は綺麗じゃなくて」

「……フィアネリーナ、手、綺麗」

玲は自分の手を裏返したりしながら見るが、別に綺麗というわけではない。

爪は面倒だからとギリギリ深爪になるくらいまで短くしているし、手も女には大きい。

アルティスや彩香の手に比べれば、自分の手は節くれだっているよ

うにも思えた。

「綺麗じゃねーよ、俺の手なんて。だいたい、あんたたちの手は働く奴の手なんだから綺麗じゃなくて当たり前だろ」

「フィアネリーナあああ！！なんていい子なんだあ！」

「……………いい子だ」

「どさくさ紛れに抱き着くんじゃねえ！！」

ポカッポカッ

二人の頭を殴ると、二人とも目をパチパチさせて互いの顔を見つめた。

「何で僕たちは叩かれたんだろうっねえ」

「……………そめ」

「お前ら！！フィアネリーナに抱き着くな！！抱き着いていいのは

私だけだー!!」

「いやお前もだよ」

ディアルが高らかに宣言するように言うが、それはすぐさま玲によつて切り捨てられる。

ガン！という文字が浮かびそうなほどショックを受けた顔をしてディアルは頬に手を添えた。

そのポーズは○ンクの叫びにちょっと似ている。

「ディアル兄、可愛いそお！」

「……………ぷっ」

可愛いそおと言いながら、ノイドグレイアの表情は思いのほか明るい。
い。

イアンリードは横を向いて笑いを耐えるかのように震えていた。

「お前ら！何でそんなに嬉しそうなんだよ!？」

「嬉しいっていつかぁー…、何で僕たちにフィアネリーナが帰ってきたことを知らせてくれなかったのかなぁー…って」

人好きする顔にことさら笑顔を浮かべてノイドグレイアがディアルを見遣る。

心なしかその笑顔を見ると、冷や汗が流れ落ちた。

……………こわっ。

ディアルはというと、露骨に目を横にずらして視線を合わさないようにしている。

「ねえ…兄さん。どおーして、ファイアネリーナの帰還報告がこおーんなに遅かったのかなあ」

どおーして、こおーんなに、の部分に妙な刺を感じるのは気のせいだろうか…

「いや、その…ファイアネリーナ帰還っていつても慌ただしかったんだよ。だから二人への報告が遅れたんだ」

「ええ…？確かあ、ディアル兄さんはファイアネリーナ搜索のために、わざわざ騎士団に混じってたらしいよねえ。なあーんで、僕たちにそのこと知らせないのお？兄さんは一応跡取りなんだから、黙って家にいたら良かったでしょお」

噛み締めるように、ゆっくり一言一言話すのは、さながら窒息プレイだ。

ノイドグレイアの顔に笑みが広がれば広がるほど、ディアルの顔が徐々に強張っていく。

「ディアル兄様…ノイド兄様に知られたらこうなるって分かりそうなものを…」

はあ、と溜め息をつくアルティスは末っ子とは思えないほど落ち着いている。

「まあ、ディアル兄さんがフィアネリーナを直に迎えに行きたかったのも分かるよ？僕たちがいたら、僕たちが行きたかったし」

ノイドグレイアの横で黙って成り行きを静観していたイアンリードがコクリと頷く。

「だからってえ、ディアル兄さんが僕たちにいフィアネリーナのことを秘密にしようとしたのは、…ないよねえ」

「ひ、秘密になどしようとは…」「本当に？」

被せられた問いに、ディアルは一瞬答えをつまらせる。

…秘密にしようとしたのか、

素直すぎる反応に、玲は心の中でディアルにご愁傷さまでした、と告げる。

ディアルの目はすでにノイドグレイアとあわそうとしていない。ノイドグレイアの笑みはますますキラキラと輝き始める。

「ディアル兄さん、そうゆう独占欲は相変わらずだねえ。でもね、僕たちはそういうことされると、寂しいなあ？」

寂しいなあ、なんて可愛らしいもんじゃないだろ!!
笑顔からどす黒いものが見え隠れしてますよ!?

ディアルもそれを感じとったのか、慌てて取り繕うように言った。

「い、いやいや。確かに独占欲というか…いや、あの、お前たちは王宮に仕えている身だろ? わざわざ呼び寄せるのはお前たちも大変だろつと…」

「王宮と愛しい妹、どっちを取るかって言ったら妹に決まってるじやん。ねえ、イアン」

「……………当然」

おいおい、

王宮「王様」一番偉い人だろうに。

「だからさあ、ディアル兄さん。僕たちはディアル兄さんがあ、フイアンネリーナと僕たちがいない時間に過ごしてきたと思うとー腹立たしいのでえ、ていうかぶち殺したくなるのでえ、これから有給とりまくりでフイアンネリーナの傍にいるね？」

不穏な台詞を軽やかに吐きつつ、高らかに宣言する。

小首を傾げる仕草がとても可愛らしい。

イアンリードも横でしきりに頷いていた。

「あらー、兄様たちもいたら、いよいよ姉様争奪戦かしら」

のんきに言われた言葉に、玲はえ！？とアルティスを見る。

「何だそれ!!」

だんだん後半くらいから人事のように聞いていたが…俺、こいつらと関わっていかなきゃならねーの!!!?

「姉様をわたしだけのものにしたいけど…この二人も相手となると、本気を出さなきゃいけませんわねえ…」

ふふふ、とどこからともなく出した扇で口元を隠しつつ笑う。

それを見て、ノイドグレイアはキラキラした笑顔をアルティスに向ける。

「アルだろうが何だろうが…フィアネリーナとたっぷり過ごすのは僕たちだからね」

「……………そっだ」

バチバチと三人の間で火花が散る。

それに、ぐわつと目を見開いてディアルも参戦した。

「違う!!フィアネリーナは、私と共にずっとずっと過ごすんだ!!」

「僕たちだよお！」

「……………うん」

「私に決まってるわ!!！」

誰とも過ごすわけねーよ!!!!
勝手に決めるんじゃないやねえ!!!

玲の叫びも虚しく、それからますます重なる苦勞に、
ほとんど地球に帰りたいなくなっていった。

13・買い物に行こう

それは双子が帰ってきてきて数日が経った朝食の時だった。

カルディエ公爵家では、公爵家という大貴族にしては…というか、ただの貴族からしても不思議なことだが、毎朝毎夕は必ず家族全員で食事をするという決まりがあった。

たいていの貴族は昼まで寝て、あとは夜も舞踏会やサロンでの会合などがあり、滅多に家族で食事をとることなどない。

だが、カルディエ公爵家では、食事は家族団欒の場である、という方針のもと、またほとんどそういう娯楽を行わない非常に勤勉家であるから、滅多なことがない限りはほとんど家族と食事をすれのが常なのだ。

もちろん、今は玲もその団欒の場に加わっている。

目の前に広がる朝食とは思えないほど豪華なフルコースたちに舌鼓をうちつつ、横で交わされあう変態兄貴たちの言葉を無視して玲はもくもくとフォークとナイフを動かしていた。

「フィア、もう屋敷には慣れてきたかな」

「…ぼちぼち」

公爵は玲をフィアという愛称で呼ぶ。もちろん、公爵夫人も。それを指摘したことはないが、何かムズムズしたものが胸のうちを這い回る。

「そうか」

玲が頷いたのを見ると公爵と公爵夫人は互いに微笑む。その姿を見るにつけ、本当に仲の良いおしどり夫婦だと思う。

「フィア、着るものは足りていますか」

柔らかい声音の公爵夫人は、ふわふわとした綿毛みたいな優しいイメージを抱かせる人で、玲の”母”みたいに男も女も手玉に取ってしまうような女傑とは180度違う。

「足りてる…けど」

「けど?」

「…ドレスはいらない」

玲の今着ている服は、侍女に頼んで持ってきてもらった白いシャツと茶色のベスト、そして乗馬用と言われるパンツだ。というのも、なぜか用意された部屋には女物の服は服でも、ほとんどが目を覆いたくなるような派手なドレスたちばかりだったからだ。

「ドレスじゃなくて、侍従が着ているようなシンプルな服がいい」と言つと公爵夫人は、あらあら、と目を見開いた。

「フィアったら、全然ドレスを着ていないから気に入らないデザインなのかと思つていたけど…ドレス自体が嫌だったのねえ」

頷くと、隣で言い争いをしていたディアルと双子は玲を見遣る。

「何！！だからフィアネリーナは私の贈ったドレスを着てくれなかつたのか」

「僕たちが贈ったのもね」

「…うん」

じーっと視線を送られて、玲はムツと見返す。

「何だよ」

「フィアネリーナ、君は私に似た素敵な女の子なんだよ？女の子とは身を着飾ってこそだろう。いいから、早く私が贈ったドレスを着てみたまえ」

「嫌だよ。ふざけんな」

「ええ！？せっかくフィアネリーナのために特注したのに！」

「あんな無駄にキラキラに光ってるやつを着れるわけないだろ」

「ディアルが贈ってきたドレスは、ぎゅっと腰を絞るタイプのふんわりとさせたサテン付きのドレスだった。キラキラと宝石のようなものが散りばめられ、紅とピンクという色合いで構成された、まさしく“女の子”って感じで、見た瞬間に速攻クローゼットの奥の奥にしまいこんだ。」

「あんなの着れるか」

「じゃあ、僕たちが贈ったのは？」

「着れるわけねーだろ!？」

双子が贈ってきたのは、背中ラインががつりあいて、腰からヒップのラインまでピタリと身体の線に沿うように作られたマーメイドタイプのドレスだった。水色という色は好きだが、あの動きにくそうな露出過大はドレスはいかなものか、と玲はそれもクロゼットの奥の奥にしまいこんだ。

「絶対着ない」

「そんなあゝ…ちょっとだけならいいじゃん」

「やだ」

「……………ほんのちよつとだけでも…」

「断固お断りする」

ブーブーと大の男が三人ともブーイングをたれるが、玲は首を縦に振らずに、ふっくら膨らんだパンをちぎって食べた。

「お姉様の気持ち分かりますわ。この人たちのセンスは全くもって理解しがたいですもの」

丁寧につきんで唇をふきながらアルティスはにっこりと微笑む。

「どつという意味だい、それは」

同じくにごやかな笑顔を浮かべるノイドグレイアに、アルティスは「そのままの意味ですわ」と、さらりと答える。

ディアルが双子と言い争いをしているのは常だが、最近アルティスとノイドグレイアの間にもいささかピリピリした空気が立ち上る。

おまけに、二人ともその間は邪気のなさそうな笑顔を浮かべているのだから恐ろしい。

その時、公爵夫人がそうだわ！と声をあげる。

「どつしたんだい、メイベラーデ」

「ファイアが好きな服を着るのが一番ですもの。今日、町に行って服を買ってきたらどつかしら」

「あら、それはいい考えですわ。お母様」

アルティスはすぐに同意するが、ディアルは難色を示した。

「しかし母様、フィアネリーナを町に行かせて大丈夫ですか。皆に、まだフィアネリーナのことは伏せています。もし町で変な奴に付き纏われたらどうします？」

お前だって十分変だろうに…

玲はディアルを物いいたげに見つめるが、彼は全くその視線に気づかなかった。

「でも、フィアネリーナのことは町で噂になってるみたいだよ。僕たちも道中、小耳にはさんだりしたし」

「噂ってどんなのなんだ？」

「深窓の令嬢とか、どこかの落ちぶれ貴族の養女だとか不義の子だとか」

ディアルは淡々と告げるノイドグレイアに眉根を寄せた。

「そんな品のない噂まで出回っているのか。全く、フィアネリーナは私たちの真正正銘の妹だぞ！？その養女だとか不義だとか言った奴は誰だ！！その口を縫い上げてやる！！」

「ディアル兄がする必死ないよ。僕たちがしてきたし。もう二度とそんな安易で下品で馬鹿丸出しの噂を流すな、って木々に逆さ吊りして、考え直すまで反省させたら、泣きながら訂正しますって言ってくれたもん」

「……特製の薬、飲ませたら膿が身体中にできて…治す代わりにもう言わないって言った…」

何でもないことのように二人は話すが、食卓はしーんと静まり返ってしまった。

「……あ、オホン、ゴホン。ノイド、イアン、少しは手加減してあげるようにね」

公爵が苦笑すると、二人は「これ以上は手加減できないんだけどなー」と言いつつも頷いた。

「まあ、ディアルの心配ももっともだがメイベラーデの言う通りだ。フィアもずっと屋敷にいるよりは町に出るほうがいいだろう。フィア、町へ行くかい？」

どうしようかな…

町に行くってのは面倒だし、服も皆が使い古したシャツとかズボンで済まそうかと思ってたしなあ…

だが、玲は今まで森以外はこの屋敷とその周りくらいしか見たことがなかった。

屋敷にいてもやることは本を読んだり、騎士団に混じって稽古したり、やたら構ってくる兄妹？たちをまくくらいしかない。

町に出てみるか…

玲が頷くと、公爵はにっこりと微笑んだ。

「楽しんでおいで」

「……で、何でお前らまで来るんだよ」

玲は無理矢理乗せられた馬車の中でふて腐れた顔をしながら、目の

前に座る二人の男たちを見据えた。

「私は母様に新しく町に出たというお菓子を買つのを頼まれて…」

「僕は、新しい武器を調達しにね」

「……………薬草」

三人とも、決してフィアネリーナが心配だからじゃないよ!?という顔で口々に言い合う。

玲は、胡散臭げに三人を身ながら溜め息をついた。

「だからって、何で一緒に行かなきゃならねーんだよ……」

最近覚えたばかりの乗馬で出かけようとした矢先に、引つ張りこまれるように馬車に乗らされたのだ。

せつかくこの馬鹿たちから解放されると思ったのに、とんだ災難である。

「あら、皆で行くほうが楽しいじゃない」

アルティスはというと、ちゃっかり玲の横に座っている。

「アルティス、お前もか…」

「私は新作ドレスを見に來ただけですわ。お姉様も一緒にいかが？」

「遠慮する」

間髪入れずに答える玲に、アルティスはクスクス笑う。

「…にしてもアル、本当に新作ドレスとやらを買って着るつもりなのかい？」

「ええ、そのために一緒に行くんですもの。当たり前でしょう」

「……ディアル兄がアルティスに新作ドレスが出るたびに着せるかこうなっただよ」

ノイドグレイアは非難するようにディアルを見る。ディアルは、う…っと思を詰まらせて視線をあさっての方に向ける。

「…まったく。あ、ファイアネリーナ。これ、父様から」

ノイドグレイアが懐から一通の便箋っぽいのを出して玲に手渡す。それを裏表、ひっくり返しながから見遣って玲は眉を寄せた。

「何だ？これ」

「開けてみなよ」

ノイドグレイアに促されて、玲は便箋の封をきる。そこに入ったのは、銀色のカードだった。カードには”ファイアネリーナ10821**”と刻まれていた。

「これは…」

「それは、ファイアネリーナのカードだよ。それで買い物すればいいから」

「は！？」

「僕たち専用カードみたいなもの。それ使えば、たいていの店では

買い物や飲み食いはタダ同然だから」

「そんなの…使えねーよ。俺、金はちゃんと持ってきてるし」

玲はポケットから、数枚の金貨と銀貨を取り出した。

これは、玲が森にいた時にボウがどこからか持ってきて玲に賣いでいた時のものだ。

今は数枚持つてきていたが、部屋にはまだたくさんある。

ザイアスがいうに、この世界では金貨一枚が銀貨百枚に相当し、銀貨一枚が銅貨五十枚に相当するらしい。

だから、これだけあれば足りるだろう、と踏んで持つてきたのだ。

「それだけあれば買い物はできるけど、一応持つておきなよ。せっかく父様がファイアネリーナにつて作ったんだからね」

半ば押し付けるように手渡されて、玲は慚然としてカードを見つめた。カードには少ししゃれた斜め文字でファイアネリーナと描かれている。

……こんなカード使えるわけねーよ。

俺は自分をファイアネリーナと認めたわけではないんだから…。

玲はそれでも黙ってカードをポケットにしまい込んだ。
それを見て、兄妹たちはそれぞれホッと微笑む。

「さ、もう少しで我がカルディ工領の素晴らしい町”メルウェン”
に着くぞ！」

14・路地でお約束

しだいに馬車の窓から見えてきた景色に、玲は「おお……」と小さく感慨深く呟いた。

「これがメルウエン……」

居並ぶレンガ造りの建物の中心に、ドン！とそびえる時計台に玲は目を輝かせた。まるで某魔女っ娘アニメに登場する【海に見える町】だ。いや、今は遠くに目をこらせば、玲が今までいた森を囲んでいた山のうち一つが見えるので【山に見える町】だろうか。メルウエンは、カルデイ工家に1番近くある町だからか1番商業が盛んで王都から輸入してきたほとんどの物が揃っているという。ただ、他のカルデイ工領圏内で行われている農業にはあまり従事していないように、食べ物や物の価格は各地から取り寄せているせいも、少々高いらしい。また、質や町並みを考えればメルウエンはカルデイ工領にある町の中でもかなり良い部類ではあるが、その分、ごろつきや賊らしきものが後を絶たないのでら治安については、危ない面が多々あるという。

それは、カルデイ工公爵が目下心配している部分であり、ディアルたちは玲の買い物に付き合うという名目の上で、現状を確かめにくたらしい。

……まあ、彼らにとっては何が優先順位とされているかは怪しいところだが。

「フィアネリーナ、私が懇意にしている店を案内しよう。あそこは私の顔が効いているから好きなだけ買える」

「僕たちが店を案内してあげるよお。兄様の小洒落た趣味悪い店よ、色んな面白い店を紹介してあげるよ！」

「…（コクリ）」

「あらお姉様は、私がいつも注文をしているお店に行くの。それでね、新しく出来たお菓子の店があるんですって。姉様、一緒に食べませんか？」

狭い馬車の中で、「私と」「僕たちと」「私とですわ」と言い合う変人兄弟たちを尻目に玲は町の様子を観察していた。露店のようなものが居並び、さまざまなものが叩き売りをされている。日本の祭とは違う露店の様子に、玲はひそかに胸を踊らせた。

あ、あのおばさんが買ってるパンおいしそう。

あそこに売ってるのは…アクセサリーか？うわ…売ってるやつ顔、マジ悪人みてえ。ぼったくりじゃねえよな。

あのガキたち、何してんだ？……おお！！盗んだ！あいつら、もの盗んでった。…なかなかの手際の良さだな。

じーっと観察していると、皆が買い物したり往来を歩くのを止めて玲たちが乗っている馬車を指さしては、ヒソヒソと話し合っているのが見えた。

な、なんだ…？

すると、それは伝染病か何かのようにヒソヒソと伝えあう人たちは増えていき…玲はなんとなく嫌な予感がして窓から顔を離れた。

「フィアネリーナ、どうしたの？」

「いや…何でもない」

玲たちを乗せた馬車は、コトコトと時折振動が強なりながらも町の中心部にある噴水広場に到着した。

「や、出るぞ」

デアアルが率先して出ようとした途端、外から護衛として着いてきた騎士たちの「ま、待ってください！！」というような焦りを含んだ声が聞こえた。

さらにいうなら、玲の耳に誰かが騒いでる音…しかもかなりの人数

…が聞こえてきた。

まさか……

玲が眉をしかめたと同時に、騎士の誰かが馬車のドアを開いた。

「お、お早くお出になってくださいー！」

見るからにボロボロの騎士は、かなり切羽詰まっているようだ。ディアルたちも何事か、と顔をしかめる。

「何があった」

「…え、ええ…つと」

鋭い目で見つめる公爵家面々に、騎士は言い淀みながらゴクリと唾を飲み込んだ。

「じ、じつは…「きゃあああー！！ディアル様だわあー！！」

騎士の声を掻き消すように割り込んできた甲高い女の声。

ディアルたちはポカンとした表情で目の前に広がる光景を目にした。

玲は「やっぱりな…」と一人ごちた。

目の前に広がるのは人、人、人の群れだ。買い物カゴをぶら下げた人たちなども多いが、ほとんどが若い年頃の娘たち。ディアルたち、各々の名前を呼びながらきやあきやあと声を上げている。
芸能人^{アイドル}に出くわした野次馬の様子そのまんまだ。

「ディアル様、素敵ー！！」

「ノイド様あー！！」

「イアン様、こっち見てえー！！」

「アルテイス様、可愛いー！！」

にわかアイドルグループの誕生である。

玲は他人のふりしよう、と馬車の奥まった部分に身をよせて知らんぷりをした。

「こ、これは…」

「町の者たちに囲まれて…馬車もこれ以上は進めません…っ」

騎士が悲痛な顔をして、人の群れに目を向ける。

今にも飛び掛かってきそうな人たちを、騎士たち数人がなんとか押さえ込んでいる状況だ。

「……帰りたい」

ポツリ、とイアンが呟いた言葉に皆が皆同意した。
だが、人がいる分、馬車は動けないのだ。

「……出るぞ」

意を決したようにディアルが馬車から出る。すると、歓声がさらに高まった。続いて、ノイド、イアン、アルティスが出ていく。皆は強烈な歓声と熱視線に、片手をあげたりなどして優雅に応えている。どうやら腹をくくったようだ。

さすがお貴族様だな……
すげえ

玲はキラキラと後光でもさしてるつもりか？な美貌の兄弟たちを見ながら、こっそり苦笑いをした。

……さあて、と。

四人は歓声に応えていて気づかない。
玲がこっそりと馬車を降りて、人の群れに紛れ込んだことを。

書き置きはしてあるし、この分じゃあ、まだまだ動けないだろ。

玲はクククと人の悪い笑みを浮かべ、四人に背を向けた。

レツツ 探険!!

—————

見渡す限り、人人人、だ。
随分と活気のいい町らしい。

玲は近くで買った熱々のウィナー入りのパンを頬張りながら町を
探険していた。

露店の誇大広告ばりの宣伝を他の客と共に冷やかしたりした。

「いよつ、そこの男前の兄ちゃん!!この指輪で彼女を安心させち
やどつだい?」

指輪を持った親父と目があつ。左右を確認するが”男 ”はいない。
玲は親父の手の中にある指輪を見ながら問い掛けた。

「それは俺のことか?」

「当たり前よ!!兄ちゃん、あんたほどの男前は見たことねーよ!」

「男前とは…嬉しいお世辞だな」

にやり、と笑いながら親父が売ってるアクセサリー類を見ていく。着いている宝石は小さいが、刻まれた紋様などが精密で美しい。

「なかなか綺麗にできてるな」

「当然さ！俺は王都の職人と結構口利きがあつてな？王都の職人にかかれば、これだけの意匠も訳ねえのよ」

自分のことのように胸を張る親父に、玲は声をあげて笑った。

すると親父はマジマジと玲の顔を見て溜め息をついた。

「ほんと、綺麗な顔してるな。公爵家の若様たちに張れるくらいじゃねーのかい？」

「…あんな奴らに張れてもな」

中身変態だし。

だが、呟いた声は親父の耳には届かなかったようだ。

「ディアル様もノイド様もイアン様も、これでもか！っちゅーほど男前だしなあ。俺の息子もあれくらい整えてれば、嫁探しに苦労し

ねーんだが。まあ、アルティス様みたいなほどの可愛い娘でなくてもいいんだけどよ」

ハハハと豪快に笑いながら、親父がそういえば…と続ける。

「公爵家に新しい姫が来たんだってなあ。しかもアルティス様の姉ときたもんだ。うちの公爵様に限って、不貞をしたとは思えねーが、今まで知らされなかった分、すげえ深窓の令嬢だって噂なんだよな」

深窓の令嬢…

それがもし、目の前にいる自分だと知ったらこの親父はどう思うのだろうか

一人歩きする噂には気にも止めていなかったが、こつ、目の前で話されるとなんとなく気まずい。

玲は小さな紫の宝石がついた指輪を手にとる。

「これ、くれるか」

「お、まいどお」

なんとなく、目についた指輪だが指輪に二頭のペガサスが握られているのが気に入った。

…ハクたち、元気かな。

玲は親父に別れを告げると、そのままゆっくりと雑踏の中に身を投じた。

散々露店を冷やかして回ったが、肝心の服を売ってる店が見当たらなかった。

いや、何軒が見つけたには見つけたのだがどれも乙女チックなふりふりドレスらしきものしかなく、目当ての男物の服はなかった。

おまけに、玲を男だと思ってか何人かの女の子たちに声をかけられたりして時間を食ってしまった。

「裏道っぽいところならあるのか？」

露店を出してるのは、大通り。

さらに買い物客は女が多いためか、露店以外はほとんど女が目をつきそうなキラキラした装身具やドレスばかりなのだ。

玲は大通りの端にある一本の路地を選んで、そこをすいすいと通っていく。そして、だんだんと町の中心部から離れていった。

少しばかり進んで、大通りの騒がしい喧騒が背のだいぶ先に聞こえる程度になった辺りで、新しい音が聞こえた。

耳を澄ませてみると、内容こそは聞こえなかったが幾人かの人の声がした。

玲は、何の気なしに声のするほうへ足を進めていく。

以前、ザイアスが町には不当な金の請求を要求してくるごろつきや、金品を強盗しようとする輩までいると聞いていた。

その類は、容赦なく殺しにかかってくるからすぐに逃げる。と言われていた。

…だけどな、ザイアス。

女の子がそういう類っぽい奴に絡まれてるとなれば…、仕方ないだろう？

玲は、聞こえてきた内容に耳をそばだてながら歩みを早くする。ただの話し合いではない。女の抵抗するような声や、複数の男たちの野暮な野太い声が激しく辺りに響いていた。

足音をなるべくたてないように気をつけながら、玲はそつと建物の端に近づく。そして、そこから顔を少しだけ出した先には、玲よりも一つか二つ年下の女の子がむさ苦しいヒゲを生やした筋肉マッチョな男たち相手に怒鳴り散らす姿があった。

「あんたたちに渡す金は、1銅貨すらないわ!!」

「でもねえ、お嬢ちゃんがぶつかってきたせいで俺らのボスが足をくじいたみたいでさあ」

それを聞いてククク、と周りの男たちが笑う。

男たちの中に一人、筋肉マツチヨではない細っこい男がいて、その様子をにやにやと見つめていた。

立ち位置的には、その細っこい男がボスなのだろうか。一見するとひよろひよろのずる賢い顔をした悪徳商人。分かりやすくイメージをすれば、ゲゲゲの○太郎に出てくる【鼠男】が、けばけばしい成金趣味の衣装を無理して着込んでいるような感じだ。

玲からすれば、その鼠男と護衛らしき筋肉マツチヨたちの姿が絵に書いたような【小悪党】といった感じで、取るに足らないところだ。しかし、強気ぶりを見せている少女は明らかにこの【小悪党】たちに怯えており、それを彼らは楽しんでいた。

玲は頭をポリポリと搔いてから、辺りを見回して誰もいないことを確認する。

よし、誰もいねーな…

男たちは少女を壁に追い込むような形で、前と左右からゆっくりと近づく。下品な笑いを抑えきれないかのように口元がぐにやりと歪んでいる。

「この落とし前をつけてくれなくちゃなあ？お嬢ちゃん」

「わ、私がぶつかったんじゃないわ！！その人が私にぶつかったのよ！」

「この人は王室にも顔が効くお貴族様だぞ？一般平民のお嬢ちゃんが口答えするんじゃないよ。この人がぶつかったんじゃないよ。てめえが、この人に道を譲って差し上げなくちゃならねえんだよ」

男の一人が、なあ？と男たちに同意を求めると、皆が皆、同じように頷く。

その顔には、薄気味悪い笑みが張り付いていた。獲物を捕らえる前にいたぶろうとする野蛮な獣のような瞳だ。

鼠男はゆっくりと少女に近付き、じっくりと少女を値踏みするように視線を下から上に動かして…笑う。

「連れていけ」

その言葉を合図とばかりに、下卑た笑い声をあげながら男たちが少女を捕らえようと近づく。

「…い、いやっ」

少女が身体を震わせ、壁に背を押し付ける。だが少女に逃げ場はない。男たちは、クククと笑みを浮かべて少女に触れようと…手を伸ばした。

「気安く触るんじゃないよ」

突如沸いた第三者の声に、少女も男たちはピクツと肩をゆらす。

「小鳥を狩るだけなのに、随分と仰々しいんだな。かっこわりい」

ハツと鼻で嘲笑う声に、男たちは瞬時に眦を吊り上げて声の主を探るように辺りを見渡した。

「ここだよ、ここ」

声は上のほうからし、殺気だった男たちと突然の闖入者に驚く少女は顔を上げた。

店の広告看板に立つのは一人の…少年。

夜よりも澄んだ黒い髪をなびかせている姿と、逆光で顔が完全には分らないが思いの他、目につく顔立ちをしている。

少しよれたシャツに茶色のベスト、乗馬用らしきパンツではスラリとした身体つきは隠せようもない。

筋肉マツチヨたちは、一瞬目を見開いたがすぐにそれは侮りと嘲笑を含んだものへと変わっていった。

少女も、自分と同年代くらいの少年が助けの綱と知り少しばかり落胆した。

しかし、そんな視線にもとせす少年：玲は男たちを見下ろして告げる。

「貴族だか何だか知らないが、嘘を言ってまで女にちょっかいかけるなんて卑怯なんだよ。女ひっかけてーなら、正々堂々とてめえで声かけてみやがれっての」

「う、うるさいっ！！この私が卑怯だと！？平民のくせに無礼な！！こんな下賤の輩、さっさとやってしまえ！！」

鼠男はカツと顔を赤くすると、すぐに男たちに命じる。

男たちは、へい、と頷いて玲をニタリと笑いながら見つめる。

「さっさと降りてきな、クソガキ。でけえ口ばっか叩きやがるが、それで逃げるなんてことはねーよな」

ちらり、と筋肉マツチヨたちは壁際にいる少女に目を向ける。

「ガキのヒーロー気取りに付き合ってる暇はねーんだよ。俺らはこのお嬢ちゃんに落し前つけさせなきゃならないんでな」

「ほお… 落とし前、か。どうしてこの子がそんなもんつけなきゃならないんだ？」

「決まってるらあ。俺らのボスにぶつかって、怪我させたからだよ」

「怪我か。一体どこを怪我しているんだ？ 全く怪我してるようには見えねーぞ」

「うるせえ！！クソガキ。ぐだぐだ言ってるねえで、さっさと降りてこいよ！！」

男たちのうち一人が怒鳴ると、玲はふむ…と顎に手を当てて男たちと少女を交互に見遣る。

少女は、もしかしてこの少年は逃げ出す算段を考えているのかもしれない…と考えて、顔を青く染めた。

「じゃあ…」

玲はそう言つと、大きく看板からジャンプした。

その高さに男たちの目が、驚きに見開かれる。しかし、

ひゅるるる…

という落下音と共に玲はいきなり、男たちのうちの一人に目掛けてかかと落しを喰らわせた。

「が…っ…!」

ドガッ!と男がそのまま地面にめりこむように倒れ伏す。

玲は、目を丸くしたまま固まる面々などおかまいなしに、ポンポンと服の埃ほこりを払っていた。

あらわになつた少年の顔には、綺麗や可愛いというよりも…ただ惹かれるほどの魅力があった。誰しもの目をも惹きつける…フェロモンとでもいうべきか。男たちも少女も、しばしほうけたように少年を見つめた。

少年は地面に臥した男を見つめ呟く。

「まずは一人目…」

ぞくり、と背筋が奮えるくらい冷たい声。

玲はゆっくりと視線を男たちを辿り…最後にぼうつと顔を赤く染めた鼠男を見て微笑んだ。

「怪我をして金を払わないといけないなら、払おう。だけど俺にはお前たちが金をわざわざ払うほど怪我してるとは思えない。だから…お前たちが望む金を払うのに見合う分だけ、怪我させてやるよ」

それは悪魔の宣誓だった。

ギョツとする男たちを尻目に、玲は目にも止まらぬ早さで一人、また一人と地に沈めていく。それはまさに地獄絵図と言わんばかりの光景で、しばし数分間、男たちの阿鼻叫喚の嵐が吹き荒れた。

数分後、通報を受けた警察が見つけた時には、筋肉マッチョたちは全員壁やら地面やらに身体をめり込ませて倒れており、鼠男はぼこぼこに腫れた涙顔で、気絶していたという…

「もーっ！！信じられない！本当に信じられないわ！！」

ドスドスと年頃の女の子にはあるまじき足音を踏み鳴らしながら目の前に行く少女を玲は見つめた。

「信じられない！！あんっなに、あんっなにしちゃうなんて！」

あんっつなに！と強調しながら、少女はジロリと玲を睨みつける。玲はキョトンと見つめ返すだけで何も言わなかった。

じつと見つめあうこと数十秒、少女のほうが何かに耐え切れなくなつたのか、すぐさま顔を前に逸らして歩き出す。

彼女の耳が先程よりも赤くなっているのは玲の気のせいだろうか。

「何か気に入らないことでもあつたのか」

何の気なしに言った言葉に、少女は「はあ！？」と素っ頓狂な声をあげた。

「気に入らないも何も…っ、そりゃスッキリはしたんだけどさ。あんた、あれが誰か分かつてんの！？」

「あれって誰だ？」

問い返すと、少女は今度こそ顎が外れそうになるくらいポツカンと口を大きく開いた。

「あんた…あいつを知らないの？」

「知らない」

間髪入れずに言うと、少女はふらりと立ちくらみを起こす。

どこか具合でも悪くしたのかと、玲が支えようと手を伸ばしたら逆にその手を捕まれた。

「ん？」

「もうっ！！厄介なヒーローに助けられちゃったわ！！こっち来て！！」

厄介なヒーローって…もしかして俺のこと？

ぼんやりと疑問を抱いたところで、玲は少女に引っ張られるような形でぐねぐね曲がる裏道を駆け回る。

目の前にいる少女を見ながら、やっぱりここは日本じゃないんだなあ…とつくづく思う。

黒髪黒目が一応は基本であった日本とは違い、淡い天然ものの茶色の髪を緩やかに後ろで結んだ女の子。

中世ヨーロッパ風の、豪華ではない、ふんわりしたスカートを履いた女の子はまさしく”町娘” というような姿。

日本のひざ上何十？も出しているミニスカートを履き、胸元を見せて付けるようにシャツのボタンを開ける今ドキ女子高生とは全然違う。ぎゅっと玲の手を握った手には、アクセはもちろん、ネイルなんてものはしていない。

少しがさついた働く者の手を彼女はしていた。

ここでは…女は学校に行かないらしいからな…。

男であれば、近くにある教会の聖職者によってある程度の文字の書き方や計算を習ったりすることができる。

貴族の坊ちゃんたちはといえば、ほとんどが家で優秀な家庭教師を雇う。

あとは、ある年齢になれば貴族であれば金持ち専用の学校に行つて王の役人や研究生になったり、それなりの剣の実力さえあれば騎士団に入つて騎士になる道を選んだり…だ。

女は男同様に、家に来る家庭教師から勉学を教わるが、それはあくまで教養レベル。

あとはダンスやテーブルマナーなどといった淑女教育がほとんどらしい。

アルテイスにも家庭教師が時折来ていて、前に一度玲も受けるようにセバスチャンから言われたが、なんとか逃げる事ができた。

文字は何故か知らないが読めるし（図書室にある本が多種多様でなかなか面白いのだ）、淑女教育など冗談ではない。

公爵の計らいで、一応騎士団所属という扱いに玲はさせてもらっているのだ。

貴族でない娘は、ほとんどが結婚、もしくは家業の手伝いに身をこしていて勉学などを学ぶ機会やまして時間はない。

それを考えると、現代日本は何て自由なんだろう。と玲は考えざるを得なかった。

「どつしたのよ」

「いや…何でもない」

黙り込んだ玲が気になったのか、歩きながら少女が振り向いた。玲は慌てて首を振りながら、少女が挿んでいる手を離してその手に自分の手を重ねる。

「こっちのほうがいいだろ？」

「……………っ、」

少女は目をギョツと丸くして、握られた自分の手を見つめてから急激に顔を赤く染め上げる。

その変化を可愛いな、と思い、玲は思わず微笑む。

その顔をバツチリと少女は見えてしまい、ぎゃああああ！！と叫びたくなるのをなんとか飲み込んでから、顔を前に固定させる。

「あ、あなたね…！！その無自覚な色気はやめなさいよ…！」

「は？何だそれ」

無自覚な色気？

一体、この女は何を言っているのか。

「フェロモン垂れ流すなって言ってるの！！…あ、そっぴや名前をまだ言っってなかったわね。私はユシエリアよ。ユシイって呼んでね」

「ユシイか。俺は…」

一瞬、逡巡してから玲は己の名を口にした。

「俺は、レイ。レイって呼んでくれ」

「レイ…、レイね。レイ、あの…さっきはありがとね…！すっごく助かったわ」

朗らかに笑う彼女の顔が、大切な親友の笑顔と重なって見えた。

「…いいや、気にしないでくれ」

大切な、大切な親友。

彩香は今、元気でやっているのだろうか。

「彩香…」

玲は、そっと呟いた…

—————

「レイ！ここよ！」

ユシイに連れられて来たのは、町の中心からはかなり離れたところにある小さな飲み屋だった。中心から離れば離れるほど道幅は狭くなり、あまり人は通っていない。ただ、捨てられたゴミが散乱して…まるでスラム街のようにも見える。

「さあ、どうぞー！」

手を引かれながら飲み屋に入ると、そこには申し訳程度の客がちら

ほらと卓についていた。

カランと店のドアについていたベルが鳴ると、その目を一瞬だけレイたちに向けるがすぐにそれは逸らされる。

ユシイは客たちには一切目もくれずにカウンターにいる男に声をかけた。

上品にたくわえた口髭と、優しい目元をした30代後半くらいに思われる男は、ユシイとレイに見て目を丸くする。

「お父さん!」

なるほど、この男性はユシイの父親なのか。

どこに連れられるのかと思いきや、父親が働く飲み屋だったらしい。ユシイは父親に親愛の笑みを見せてながら、レイの手を引っ張って父親の前に出させる。

「この人は、レイっていうの!レイ、こっちは私のお父さん!」

勢いよく行われた自己紹介に、レイもユシイの父親も互いに目を合わせて「ど、どうも」と頭を下げる。

「レイ、ここに座って!何か飲む?」

「え?あ、ああ...えーと...」

「決まらない?じゃ、私が決めるわ。お父さん、アンズジュースちようだい!」

ハキハキと指示する娘に苦笑いしていた父は、はいはい、と頷きな

がら二つ分のコップに氷を入れて並々と赤い色をしたジュースをそそぐ。

「ア、アンズって杏のことじゃねーのか!?!
血みたいに真っ赤なんだが…」

目の前に置かれたコップをまじまじと見つめていると、ユシィが首を傾げて玲を見遣る。

「飲まないの?これ、すっごく美味しいのに」

「…いただきます」

一気にあおると、冷えた甘酸っぱさが程よく渴いた喉を潤していく。

「うまい」

そう言って飲み干してしまうと、ユシィが目を丸くして見ていた。

「一気に飲む人初めて見たわ。少しアルコール入ってるから、そんなふうには飲めないのに…」

「アルコール入りなのか、これ」

今気付きました、と玲が空になったコップを見つめるとユシィの父親も驚いたような顔をした。

「おや、アンズジュースは初めてかい」

「初めてだ…もう一杯もらえるか?」

「初心者があまり飲むと、後で具合が悪くなるぞ?」

「俺はザルだからな。少しぐらいのアルコールじゃ全然酔わねーから大丈夫さ」

にやっと笑うと、ユシイもユシイの父親も「ザルって何だ?」と首を傾げた。

「ザルっていうのはー…なんつーか、どんなに酒を飲んでも平気なことだ」

「へえ。レイって面白い言葉を知ってるのね」

まあ、異世界人だしなあ…

こここの言葉の意味は分かるけど、気をつけねーと、あっち独特の言葉があるみてえだし。

「ユシイと同じか少し上くらいだから、まだまだ少年だと思ってたのに…意外と飲めるんだな」

ユシイの父親は感心したように言うと、玲にもう一杯アンズジュースを注いでくれた。ただし、次のおかわりはダメだと言われてしまったが…。

カウンター席にはユシイと玲しか座っていない。

他の客は初めは、まるで場違いな年齢の二人を興味深げに観察して

いたが、すぐに興味を失ったのか各々で話し始めてしまい、二人に注目するような奴らはいなかった。

だから、今はユシイとユシイの父親を含めて三人で話をしていた。

「だから、レイが助けてくれたのよ、お父さん」

ユシイが話しているのは、先程彼女がぼんくらたちに絡まれていたところを偶然通りかかった玲が助けた…という話だ。

ユシイの父親はそれを聞きながら顔色を青くさせたり、安堵の表情を浮かべたりと忙しなかった。

だが、話を聞き終わるとユシイの父親はカウンターに頭をこすりつけんばかりに下げる。

「!？」

「本当にありがとう!!娘を助けてくれて…っ」

店のマスター（おそらく）であるユシイの父親が、玲に頭を下げるという珍妙な場面を、玲は誰かに見られてないか首を巡らせる。

しかし、運よく店にいる人たちは自分たちの話題にのめり込んで全然気づいていない。

それにホッと息をつきながら、玲はユシイの父親に頭を上げさせる。

以前、総長だった時も族の面々に会う度に頭を下げられてはいたが、今だにそれは慣れない。まして、歳の離れた父とも呼べるような男だとなおさらだ。

「顔を上げてくれよ。俺はたまたま通りかっただけだし、気にするな」

「だが、君がいなければ娘は今頃…あのドルフェ子爵に連れ去られていた」

苦虫をかみつぶしたような顔に、玲は思わず眉を上げた。

「ドルフェ子爵？」

誰だそれは…

あの【鼠男】のことだろうか。

「ドルフェ子爵を知らないのか？」

ユシイの父親は、玲が聞き返したことに驚いたのか、ユシイと玲を交互に眺めた。

「そうなのよ、お父さん。だから私ビックリして彼をここに連れてきたの」

ユシイが説明すると、ユシイの父親は最初は目を見開いていたがすぐに納得するように頷いた。

「そうだな、連れてきて良かったかもしれん」

「話がいまいち読めねえんだが」

互いに理解しあう親子に、玲が口を挟む。

するとユシイの父親は「本当にドルフェ子爵を知らないのかい？」と再度聞いてきた。

「あの子爵を知らない者はこの町にいないと思っていたのだが」

「あー、あー……俺、この町に来たの今日が初めてなんで……」

「そうなのかい？」

頷くと、ユシイもユシイの父親も「そうか……」と深刻そうな顔で頷いた。

「その、ドルフェ子爵っつーのは、そんなに有名なのか？」

あの姿じゃあ、影が薄すぎて有名になれそうもないと思うけどなあ……

「有名も有名よ。……最悪としてね」

ユシイが吐き捨てるように言うと、ユシイの父親も沈痛な面持ちで頷く。

「レイ君も、この町にこれからもいるなら知っておいたほうがいいかもしれないからね。……ドルフェ子爵というのは、今、この町にいる貴族だね。領地を持たない代わりに、この町を仕切っているんだ」

「へえ……」

まあ、この町を含めた領地を持つてるのはカルディエ家だしなあ。

「我がカルディエ地方は自給自足をおもとしていて、ほとんどが農地開墾などをしているがこの町は農地というよりも観光や交易での利益で成り立っていてね。それをドルフェ子爵というもとは貿易商から貴族にまで成り上がった彼らがカルディエ家の許可を得て、町

の運営を担っているんだが…」

ユシイの父親は顔をしかめながら、重苦しい息を吐いた。

「今のドルフェ子爵は金使いは荒いわ、権力を盾に、我々から税金を貪り喰らい、はたまた暴力団を雇って町で暴力を振るったり、年頃の娘を捕獲しては屋敷に連れ込んだりと…悪政が続けている」

ユシイは「私たちの税金で、あいつは娼館通いを繰り返したり、私たちの売上高を計算しては根こそぎ奪っていくのよ！」と憤慨する。相当、不平不満が溜まっているらしい。

「あの干物男！！たかだか貴族だからって言いように利用して！！今にカルディエ家の皆さんが成敗してくれるわ！！」

カルディエ家、とユシイが言うのを聞いて玲は飲んでいたアンズジュースを少し咽につまらせる。

「…ゲホツゲホツ。カルディエ家の皆さんが…って？」

「私たち、嘆願書を出したの。こうゆう貴族の悪政を裁くのは警察では役に立たないってのがよく分かる。だから、カルディエ家に直接談判したのよ」

いつ？と恐る恐る聞けば、二週間前くらいだという。

良かった、二週間前だとまだ玲はあの屋敷にいない。

となると、彼女たちに玲が屋敷の人間だとバレることはひとまずな

いだろつ。

「カルディエ家の公爵様は、とても美しく、凛々しく、お優しいと聞いた通りのかただったわ。彼の方なら、私たちの窮状に手を打って下さるわ」

まあ、公爵が良い人だというのは玲も認める。

…息子達はかなりの変人だが。

「それでね、今日、カルディエ家の方々が町に来たっていうのを聞いて、私は見に行ったのよ」

「げっ。あの盛大な”お出迎え”軍団にユシイは紛れこんでいたのか!？」

「…まあ、人がすごくて公爵家の方々は見れなかったんだけど」

残念、とうなだれるユシイに対して玲は良かったああ、と安堵する。

確かに見た目は良いがあいつらは変人だ。

ユシイが救世主としてカルディエ家が来たのを嬉しく思うのは分かる。分かるが…奴らに会えばその希望に感激するよりも幻滅してしまう確率が高い。

公爵…もう少しマシな人材を寄越してこいよ。

「その帰りに、あいつらに襲われて…本当に助かったわ、レイ」

「本当に通りかかって良かった。…ユシイが無事で嬉しい」

微笑めば、不自然にユシイが目を逸らしてしまった。

何故だろう？

しかもユシイの父親も、目玉を剥き出しにするくらいレイとユシイを見ていて、…気のせいか、その背後に何やら不穏な空気が渦巻いている。

「レ、レイ君。君、ユシイにまさか変な気を起こした…なーんて訳はないよね？」

「は？」

「レイ君、…ないよね？」

ガシツと肩を捕まれる。

おやっさん、肩の骨が微妙にミシミシしてんだけど。

「もう、お父さん！変な事言わないでよ！レイはそんな意味で言うてるわけ、じゃないわ…はあ」

そんな意味ってどんな意味だ。
つか、ユシィ。何で最後は溜め息をつくんだよ。

「しっかし…、そんな馬鹿がいるならユシィみたいな可愛い女の子、
放っておくわけにはいかねえな」

そう言うと、ユシィはみるみる顔を赤くし、ユシィの父親はみるみる顔を青ざめさせた。

「……………？」

二人とも、何で赤くなったり青くなったりしてんだ…？

首を傾げると、不意に視線らしきものを感じた。

視線の方向に顔を向けると、店の奥の小さなテーブルに、顔を隠すようにフードを被った二人組が座っていた。二人とも座っているから性別や身長は把握できないが、どちらもそれなりの武人であることは知れた。先程から玲たちに視線を巡らせていたのは間違いなく彼らだ。おまけに、周囲の喧騒とは自分たちを隔離させるようにうまく気配を消している。

明らかに、怪しい人物だった。

ここまであからさまに ” 怪しい ” 条件をもつ奴がいるとは驚きを通りこして珍しい。

こっちから近づくか、

それとも…あっちの動きまで待つか。

玲が二人に意識を集中させようとした矢先に、いきなり店のドアが開いた。
チリンチリンとベルが激しく鳴る。

「……み、見つけたあ……」

はあああ……と、店の注目を一身に集めながら床にへなへなと腰を下ろすのは、

「ザイアスじゃん」

カルディ工家の新米騎士であり、自称？玲の弟子であるザイアスその人だった。

16・俺は見習い騎士

はあ、はあ、と肩で息をしながらザイアスはじつと玲を見つめて来る。

その恨みがましい視線に玲は覚えがなくて、はて？と首を傾げた。ザイアスは何回か深呼吸を繰り返すと、ダダダと玲に駆け寄る。

「師匠！！こんなとこで何やってんですか！！？」

耳元で思いつきり叫ばれて、耳の奥がキーンとなった。

「いきなりいなくなったから、皆さんそれはもううとうつ心配してるですよ！！ディアル様は誘拐だとか叫んで、この町の家という家を一斉検挙するとか言いますし！！ノイド様は、なんか黒いオーラ撒き散らしながら近くににいる人たちから聞き込みという脅しをするし！！イアン様は、広場占拠しながら変な薬作っては住民が倒れるし！！アルティス様は、一人で探そうと馬に乗りながら暴走してるし！！…とにかく、大変なことになってるんですよ！！」

くだらだらと汗を流しながら語るザイアスに、冷は「ふーん」と答えるだけ。

「書き置きしてきたじゃん、俺」

「一人で行く。」だけでしょう！？あんな短くて、投げやりな書き置きありますか！」

「それ以外に何を書けと」

「書くよりなにより、なぜお一人で行動しようとするんですか!」

「あの騒ぎを待ってたら日が暮れちまうだろ」

「そこは、騎士である自分たちが追っ払いますよ!とにかく、皆さん心配してるんだから行きましよう!」

腕を捕まれ、問答無用で引っ張られる。

しかし、ガイアスに捕まれた腕とは逆の手をユシィに捕まれてしま

う。

「レイ!あなた、この騎士様とお知り合いなの!?!」

騎士様、という言葉に横目でガイアスを見る。

確かに彼は深緑色のマントを羽織り、よく剣道で使われる防具の籠手のようなものをつけ、カルディエ家の紋章がついた剣を腰に下げた”騎士”の出で立ちだ。

しかし……

「…騎士様ねえ」

ぷふっ、と吹き出したくなるのを堪えるように口元を手で覆った。

若干、肩が揺れてしまうのはご愛嬌だと思ってほしい。

「……師匠、こちらのかたは」

普段より声のトーンが低くなっていたようだが、それに気にする様子もなく玲は「そういえば」とガイアスにユシィを紹介することにした。

「この子はユシィ。この店の娘さん」

「本名はユシエリアです、騎士様。」

玲の紹介に上乘せするようにしてユシィはザイアスに丁寧に頭を下げる。

ザイアスも、礼として拳を胸に当てる。

「私は、ザイアスといます。カルディエ家の騎士であり、こちらの玲様の第一の弟子であります」

なぜ、第一の弟子という時に胸を張るんだ。お前は…

ユシィはというと、え！？と目を丸くしてザイアスと玲を交互に見遣る。

「ザイアス様はカルディエ家の騎士様で……レイの…弟子？」

ユシィは頭の中の混乱がおさまるように、ゆっくりと頭を振る。

「じゃあレイも…騎士様なの？」

う…っ、

確かに、騎士であるザイアスの師匠ということは玲は必然的に騎士という立場になってしまう。

余計な自己PRしてんじゃねえよ、タコ野郎！…！

ジロリとザイアスを睨むと、彼は生真面目な顔をしながら首を傾げた。

玲の睨みの意味を全然分かっていないらしい。

……………馬鹿

「レイモカルディ工家の騎士様なの！？ねえ？？」

ガクガクと揺らされながら、どうしようか…と頭で考える。

そういえば…と、元の世界にいた時のことを思い出す。

あの時、やたら口がペラペラと動く口先野郎がいて…いつも嘘か真実かを分らないように織り交ぜながら話をする奴がいた。その巧みな話術を駆使して、情報収集や交渉、はたまた女を口説くのも思いのままにやっていたのだ。そこで、

あまり、嘘と真実を交えて話すと何が真実で何が嘘か分からなくなるんじゃないか？

と、玲が一度問い掛けたことがある。

彼は玲が総長をしていた時の幹部をしており、彼とはたいてい暇な時は適当につまみながらよく会話に耽^{ひげ}っていたから、その会話中にふと浮かんだから聞いてみたのだ。

彼は、そうだねえ…と、普段は好青年と称される顔に笑みを浮かべながら答えた。

僕からしたら、それが嘘か真実かは気にしてないんだよ

どういうことだよ？

これが嘘で、あれが真実…なんて考えていたらいずれボロが出る。
二つは違うと意識が決定的に区別すると、それはもう混じり合わせることなんて無理なんだよ

じゃあ、お前は真実だろうか嘘だろうかなんて考えないで言っているのか

考えないことはないけどね。ただ、嘘を言う時はなるべく真実に寄り添いあわせるんだよ。そうすれば無意識に嘘を真実だと思いつくようになるんだ

へえ、俺にはまだまだ分からねー部分だな

玲君は、直球だもんね。こっちが清々しくて面白くて笑い出したくなるくらい

……馬鹿にしてねーよな

しないしない。玲君のその直球さは僕、結構好きだよ。だから、代わりに僕が嘘を真実に、真実を嘘にして言っただよ

…真実を嘘にはするなよ、

あはは、言葉の綾だよ。でも玲君、もし玲君が嘘をつく時があったら…試してみるといいよ

彼のいつもの嘘臭い笑顔が頭をよぎる。

…試してみるか

奴のように、偽スマイルはできないが玲は頭の中で情報を組み立てる。

一番知られたくないことは、分が公爵家に連なる者だということ、だ。

ならば、後は作り上げたストーリーを真実としてしまえばいい。

「実はな…俺は見習い騎士だ」

「見習い？」

「ああ、少し前にカルディエ家に拾われてな。そこから騎士見習いとして、鍛えさせてもらっている」

袖をくいくいと引かれているような気がしたが、とりあえず無視。

「まだ見習いだから、剣とかマントとかはまだまだもううごことはできてねーから、こんな格好してんだけどよ」

ユシイは玲の格好を見ながら、困ったように眉を下げる。

「でも、ザイアス様は騎士なんでしょう？なのに、レイはザイアスの師匠なの？」

「ああ、俺はカルディ工家に拾われる前にザイアスと出会ってな。こいつが獣に襲われているところをたまたま俺が助けて…師匠って呼ばれるようになったよ」

「やれやれ、というように肩をすくめる。我ながら素晴らしい演技だと自画自賛したくなる。

袖ではなく、背中を叩かれているようだがとりあえず無視。

「そうなんだ…、じゃあ玲はまだ見習い騎士だけど、ザイアス様からしたら師匠ってなるのね」

「そ。ややこしいけどね」

「師匠!!」

耐え切れなくなったのか、ザイアスが割り込んでくる。

おい、こらー!

せつっかくユシイが納得しかけてんに余計な口叩くんじゃねーぞ

！！！！

「師匠は師匠ですが、師匠は見習いなどでは……………っっ！！！」

ぎゅっっ、とさりげなく腕をつねる。

ザイアスはぐっと痛みをこらえるが、目の端から涙が出そうになる。

「ザイアス、俺は一応”師匠”って呼ばれてるけど、本来は”見習い騎士”なんだから……………なあ？」

最後のほうで、ザイアスを見つめながら少しだけ殺気を放つ。

部屋の温度がそれだけで二度〜三度下がったような気がザイアスにして、思わず首を縦に振った。

玲はそれに満足し、ユシイを見つめる。

「…と、いうわけだ。混乱させてわりいな」

「うっん、でもレイが見習いとはいえ騎士なのは納得だよ。だから、あんなに強かったんだね」

「そんなことねえよ、あいつらが弱すぎただけ」

「あいつら…とは誰ですか、師匠」

「ん？ああ…」

実はな…と、かいつまんで話そうとしたがほとんどユシイによってその時のことを話される。

三人でカウンターに座っていたが、だんだんと日が暮れるにつれて

店の中が騒がしくなっていた。

「…それで、レイに助けってもらってここに連れてきたの」

「そうですか…、師匠、ご無事で何よりです」

「たいしたことねーから。ただ、あいつらが気に入らなくてな」

「ドルフェ子爵ですか…」

思案にふけるザイアスを、レイはそつと耳元で問い掛ける。

「で、カルディエ家に嘆願書がきたらしいがそいつについてはどうなんだ」

「今、公爵様とディアル様がたで彼の悪行の証拠などを集めています。彼らが師匠の買い物に付き合ったのも、そういう調査の意味合いもありまして…」

「なるほど。だいた証拠は集まってきたか」

「そこまでは…、ただ奴は相当好き勝手をやっているらしいです。成り上がりの貴族ですから、貴族としての誇りも何もかも失っているとディアル様がお怒りになっていました」

「ディアル兄さんがねえ…」

意外と真面目に仕事しているらしい。

あんなに変態なのにな…と、心の中で付け加える。

「だから、ディアル様がたは師匠がドルフェ子爵の手のうちにかからないか不安でいらして…、彼は人を売り買いさせているとも聞きますから…」

あの鼠野郎…。

もう少し再起不能になるまで痛めつけてやったほうが良かっただろうか。

「早くそのゲスを捕まえらんねーのかよ」

「まだ、売り買いするためにさらわれた少女たちの居場所が分からなくて…」

チツ、と舌打ちしてカップの中の飲み物を一気に煽る。

その時、扉の開閉を知らせるベルが鳴った。

「ここに、茶髪の女と黒髪の男が来ていると聞いたのだが」

灰色の上着にズボンを履いた数人の男たちが店の中に入ってくる。しん…と静まり返る中で、男たちは店内を見回し…ユシイと玲に視線を固定させた。

「何だ？あいつら…」

「あの二人だ、連れていけ」

リーダー格であろう男が後ろに控えている男たちに命じる。

男たちはユシイと玲を取り押さえようとしたが、そこにザイアスが立ちはだかる。

深緑のマントはカルディエ家騎士の証でもあるのか、ザイアスが目の前に立った瞬間、男たちの中で「ひいつ」と引き攀ったような声が上がった。

「このお二方に、警備隊が何の用だろうか」

警備隊…？

おそらく警察みたいなものだろう、と玲は当たりをつける。

「我々は要請を受け、先程、路上で暴行を働いたという二人組を探している」

じっ、と仄暗い瞳を向けられ横にいるユシィが肩をピクンと揺らした。

「暴行を働いた二人組は、十代の茶髪の女と黒髪の男という連絡を受けている。そして、そこにいる二人は外見的特徴が一致する。我々は彼らを捕まえる義務がある」

「暴行とは物騒ですね。その二人組とやらは一体、どうして暴行を働いたのでしょうか」

丁寧に対応するザイアスの目には、ありありと警戒の色が浮かんでいた。

「金品を強奪されそうになったとのことだ。狙われたのは裕福な家庭のご子息。財布が一切見当たらなかった」

おかしい。

確かに”暴行”なるものは働いたが、金品は奪ったのではなく与えたはずだ。

もしかこれは……

「…子爵の仕業だな」

ぼつりと呟き、どうしようかと考える。

「だから、その二人組は我々で預からせてもらおう」

再び男たちが玲とユシイを取り押さえようとするが、ザイアスが立ち塞がったまま動かない。

「本当にこの二人が強奪したと思っているんですか」

「事実、財布は無くなった。それに…」

ちらつと横目でユシイと玲を見ると歪んだ笑みを見せた。

「随分とみすばらしい姿をした二人組だと通報を受けた。なるほど、どうして…裕福な子息を狙ったのか頷ける」

侮辱の言葉に、ザイアスの顔が怒りに染まる。

だが玲は、顔色を変えずに立ち上がりザイアスの横に並んだ。

「分かった。俺を連れていけ」

「!?!?」

ザイアスやユシイ、ユシイの父親など驚いている面々とは対称的に玲は警備隊の男を見上げた。

「言うておくが、俺は金品を強奪してはいない。だが、彼らに暴行したのは事実だ」

「ほう、暴行をしたのを認めるか」

「ああ、俺は非人道的な行為をする奴らを見ると虫ずが走るもんでな？」

ふっ、と挑戦的ともいえる笑みを浮かべる。

その笑顔は、目を見張るほど綺麗ではあるがどこか威圧的な雰囲気があり…それを見た者の背筋には思わず寒気が走った。

忌まましげに警備隊の男は舌打ちするが、首をくいつと玲に向けると近くの男が我に返ったようにして、玲に近づく。

それをザイアスが止めようとしたが、玲がザイアスを押し止める。

「師匠!？」

「おそらく、奴らは子爵の命で動いている。俺ならたいいのは自分で対処できるから安心しろ」

「しかし…っ!！」

「これはチャンスだ。あのゲス共を捕まえるんだろ？」

「師匠が囿にならなくても…っ、私が」

「俺をただの平民として侮っているはずだ。やるなら、俺が1番いい」

「でも、ディアル様たちに何と…」

「俺が売られる前に、見つけ出してくれよ…って伝えてくれ」

目を緩めて、ザイアスの腕をぽん、と叩く。

ザイアスはぐつと拳を握りしめてから、「分かりました」と頭を下げる。

「レ、レイ…」

「ユシイは気にすることはない。俺一人で十分だから」

顔を青ざめさせるユシイに、玲は安心するように微笑む。

玲を取り押さえた男たちがユシイに手を伸ばすのを、玲が止める。

「彼女は関係ない。俺を連れていけ」

「黙れ。茶髪の女も連れてこいと命令だ」

「だから、彼女は関係ないと言っている。この子はたまたまそこにいただけで、やったのは全て俺だ」

警備隊の男はそれでもユシイを捕まえようとしたが、それをザイアスが庇う。

「彼女は我がカルデイ工家の侍女だ。彼女を捕またいのならカルデイ工家の許可を取ってからにするんだな」

カルデイ工家という言葉に、男たちは怯んだように手を伸ばすのを止める。

リーダー格の男は不服そうに眉を潜めたが、何も言わなかった。

そして、そのまま背を向けて歩き出す。

玲を連れた男や、それ以外の男も後に続くようにして店を出ようとする。

扉をくぐる前に、玲は後ろを振り向いてザイアスとユシィに口パクで伝える。

” また後で

”

灰色軍団に連行されて行った玲はそのまま、麻の布袋に覆われて路地の片隅に配置されていた荷馬車に放り投げられた。したたか身体を打ち付けてしまいが、そのまま何人かが玲と同じ荷馬車に乗り込んでしまつて態勢を立て直すことができなかつた。

「…チツ」

気づかれないように舌打ちをしながら、玲は黙って荷馬車が発車するのを待っていた。

しかし、突如、誰かの足が玲の身体を踏み付けた。

「…ぐっ」

「おっと、失礼。床にはいつくばっているから見えなかつた」

みえみえの嘘を言いながらも、玲の身体を踏み付ける足はどかれなかつた。

このような屈辱は生まれて始めてで、ふつふつと怒りが沸き上がってくるが爆発するのを何とか抑える。

こいつら…

絶対に後で死刑にしてやる

心に固く誓いながら、ガタゴトと荷馬車が動き出したのを感じた。足場が悪いのか、ガタガタと異様に揺れては身体が跳ねる。もちろん、そのたびに足で踏み付けられたのだが…。

こいつらに後でどういった報復をしてやるうかと胸の内で、何パターンも考えている間にも馬車はどんどん進んでいく。ひどく揺れることや、妙に蛇行しながら進んでいるのを考慮してみるに、町の大通りとは違う細かな道を進んでいるらしい。

行き着く先が ” 当たり ” だといいんだけどな…。

こっそりと息を吐きだしながら、玲は再び報復パターン51を考えるためにじつと身を揺れにまかせていることにした。

「出る」

今まで米俵よろしく麻袋に入れられたまま担がれて運ばれていたが、突然床に下ろされる。

しかも、丁寧の下ろすわけでもなく、ほとんど落とすといった感じだ。

咄嗟に受け身をとりながら背中を床に打ってしまい、じわじわと痛みが押し寄せる。

もっと丁重に扱え!!!

おとなしくして油断をさせようとは思っていたが…正直かなり限界の域にまで達していた。

もともと、気は短いほうで、口よりも先にまず手がでるようなガキだった。

今はさすがに、少々の我慢などを覚えてすぐに手を出すようなことは極力避けていた(つもり)ではあるが…

殴り倒したい
殴り倒したい
殴り倒したい

頭の中で、まるで呪詛のように駆け巡る衝動を拳を握ることで抑止する。

せめて奴らに付き従うばかりではない、という意味を込めて、のそのそと亀のような鈍さで麻袋から出る。

頭上からイラついたような舌打ちが聞こえたような気がしたが、そんなのにビビるようなたまではないし、まして、本気を出せばこんな奴らは一撃で張り倒せるという自信があったから、気持ちには些か余裕をもてた。

殊更ゆっくりと袋から這い出て、立ち上がりながらパンパンと埃を払う。

目の前には重厚な扉があり、あからさまに”ボス ” がいそうな雰囲気だ。

「こちらに、お前を連れてこいと命じた方がいらっしやる」

やっぱりな!!!?

つか、ボスの登場早過ぎね？

ゲームだと中ボス、雑魚キャラがありとあらゆる手管でライフポイントを削ろうと襲ってくるのに…、いきなりボスなんて張り合いがねーよ!!!

まあ、時間短縮って意味なら大いに結構なだけだよ。

手を後ろに縛られて、ドンツと背中を押される。

たたらを踏みながら、なんとか扉に激突するのを防ぐ。耐え切れずに殺気を含んでジロリと睨む。後ろでにやついていた灰色の男たちは、その殺気に身を強張らせた。

ふん、これくらいで

ビビってんじゃねーよっ

青白い顔をする男たちに少しばかり気分を良くしながら、灰色軍団の（おそらく）リーダーが、扉をノックする横に立つ。

数分間返事は返ってこず、玲も男たちもただ黙って立ち尽くしていた。

この世界に来て格段にパワーアップした五感をもっていたためか、玲はうつすらと扉の中の様子が伺いしれた。

下品な笑いと、女のひどく甘い声がして、顔をしかめる。

「気持ちわり…」

灰色軍団のリーダーが横目で玲を見ていたが、玲は鼻を鳴らしただけで、それ以降はずっと黙っていた。

さらに時間が立ち、周りにいる男たちがイライラと足を踏み鳴らし始めた時に、おもむろに今まで閉じられていた扉が開いた。

「どおぞ、入って？」

つん、と匂い立つ香水の香りと艶めいた女の声に男たちは色めき立った。

玲は開かれた扉から、むんつと熱い空気が漏れだしたのを感じてこっそりと鼻をつまみながら、中の様子を伺った。

カールした髪を色つぼく肩から胸元に下ろしながら、しどけない姿をした女が「こっちよ」と言いながら、部屋の中央に置かれた馬鹿でかいベッドまで歩いていく。

背中を大きく開いた薄桃色のドレス…というか、ほとんど布を身体に巻き付けている状態だが…を着た女の白いうなじに、男たちがゴクンと生唾を飲み込む音が異様に響いた。

女の後を着いていくように、玲と男たちは今だ甘ったるい匂いをぷんぷんに満たせた部屋の中を歩いていく。

周りちらちらと伺うだけでも分かる、ごてごてとした飾りばかり目立つアンティークが所狭しと悩んでいた。

カルデイエ公爵家でも、名のある名画や品のよいアンティークが揃えられていたが、この部屋に比べれば、それは随分と楚々としたものだったと伺い知れた。

金を持っている、とあからさまにひけらかしているこの部屋。

どんなに高価なアンティークなどがあつたとしても、趣味が悪いようにすら思える。

見回すたびに、うんざりとした気分になってしまい玲は首を小さく振ってから、部屋の中央にあるベッドに目を向け……思いつきり眉間にシワを寄せた。

「それが、話に聞いた奴か？」

ただっ広いベッドの上で、身体の線もあらわな薄着をした女たちに囲まれた男が、のっそりと身を起こす。

玲たちを迎え入れた女も、男に手招きされてベッドの上にあがり、でっぷりと膨らんだ男の腹にそつと身体を寄せた。

見た目40代後半ほどで、オールバックにした髪は脂っこいのかテクレカと光っている。

ぷっくりと膨らんだ腹は、だらしないほど脂肪がつきまくっていて女たちがその腹を触るたびに、ぶにぶにと波打つ。白い肌なのが妙に目立っていたし、胸毛が縮れているのも見るに耐えなかった。

申し訳程度に腰に巻かれた布と、男を取り囲み、男に酌をしたり身体を触らせたりして尽くす女たちのおかげで、全てを直視することは避けられたが、すぐに回れ右をして出て行きたかった。

…もちろん、あの腹に一発蹴りを入れてから。

男は女たちの豊満な身体に目を奪われていて、玲には一瞬目を向けただけだった。

それにホツとしつつも、今だ玲の腕は拘束されたままだった。その間にも、横に立っていた灰色軍団たちは素早く膝をつきながら男に頭を下げた。

「はっ、子爵様。これが子爵様の大切なご子息様とその護衛に暴行を加えたということですよ」

「ほう、して、報告にはそれは男女の二人組だったと聞くが？」

玲には目もくれず、男…ドルフェ子爵は女の腰を抱きながら鷹揚に頷く。

「女のほうは…、暴行をしていないという供述もあり連れてこれませんでした」

「構わん。女を連れてこい、今すぐに」

女の甘い吐息が聞こえる。

それ以後ろで膝をついたまま頭を下げていた灰色の男たちが、肩を揺らすのを見て、玲は軽蔑を隠し切れずに男たちやドルフェ子爵を見遣った。

…しょうもねえ、子爵だな。

…つたく、ユシイを連れてこなくて本当に良かったぜ。

一応、囹、という役割を買って出たため、下手に暴れることはできないが、もしユシイがいたらと思うと…おそらく強行手段に出してしまっていたかもしれない、と思う。

しかし、まだこの状況で大人しくしていなければならないのだ。人身売買のために攫われたという少女や少年たちがどこにいるのか突き止めるためにも。

…とは言っても、あわよくば、自分でこの薄汚いゲス共に天誅を喰らわせてやりたいとも先程から沸々と考えてもいたが…とにかく、今はじっと耐え忍ぶしかなかった。

「しかし、女のほうはある御方の庇護を受けていたようで…」

「庇護だと？誰のだ」

「カルディエ家です」

瞬間、女たちの胸を自由に揉みしだいていた子爵がギョツと目を剥いた。

「カルディエ家…！？あいつらがどうして出てくる…！」

「はっ、それが女はカルディエ家の侍女らしく…！」

「ちっ、カルディエ家め…。王宮や王家と繋がりをもつあの家は、こちらも迂闊には手が出せんな…。」

なんて邪魔な存在なんだ、とイライラと爪を噛みながら子爵はブツブツと悪態をつく。

お前よか、あの変態たちのほうがマシだよ…！！

玲は、兄たちが聞いていたら憤慨しそうなことを心の中で叫びながらも、

やはりカルディエ家というのは貴族の中でもそれなりに上位にあり、他の貴族も迂闊に手を出せないほどの家格をもつのだと認識した。カルディエ家のもつ権威というのは、自分が考えていたものよりもっと重いのかもしれない…

玲は、カルディエ家の面々を思い出しながら苦笑した。

…にしては、変態で、頑固で、貴族らしく見えないけどな…外見は
すげえ貴族…ってか王族っぽいけど。

「カルディエ家め…、あいつらは今、儂たちが集めた”商品”にま
で目をつけ始めたというし…、それで…それはカルディエ家と関係
はないのか」

初めて子爵が玲に顔を向けた。

ぽってりした唇と、細っこい瞳のせいかな、目を合わせた途端に背中
にぞくりと悪寒が走った。

こっちに目を向けるなああ！！
きもっ！！マジきもい！！！！

ブルルと身体を震わせて、なるべく目を合わせないようにと顔を下
に向ける。

ここまで鳥肌が立ったのは、あちらの世界で、ホモっ気があると噂
された男から

「新しい扉を開いてみないかい？」と両手を握りしめられた時以来
だった。

ナムアマミダブツ！！

ぶわわわわ!!!と鳥肌が立つのを我慢していると、いつの間にか子爵が玲の目の前に立っていた。

ジロジロと不躰なほど上から下まで観察される。

居心地が悪い以前に、子爵が近づいたことで鼻に入ってくる各女たちが付けてる香水と汗ばんだツンとした臭いをブレンドした究極の臭いに、くらくらと目眩がしておまけに頭痛まで感じてしまった。

腕が拘束されているため、鼻をつまむこともできない。

玲は、この世界に来て随分と優れてしまった嗅覚を初めて煩わしいと思った。

くさっ!!!すっつげえくせーっ!

加齢臭も混じってるだろ、これ!!!鼻曲がる、鼻ああ!!!

このままいけば、リバーズという道もある。

人として、よりも玲としての尊厳でそれだけは避けたい。

…子爵をゲロまみれにするというのは、少し甘美な誘惑でもあるが。

子爵はまだ玲を眺めている。

時折、「ほう…」と感嘆の溜め息が聞こえるのは全力で気のせいだと思いたい。

そして、やっと子爵の視線から逃れたことで安堵の息をついていると、子爵がとんでもない爆弾を放ってくれた。

「決めた。これを儂の玩具とする」

玩具 玩具 玩具 玩具 玩具 …

お、…おもちゃあああ!!?」

「お、玩具ですか?」

さすがの灰色軍団のリーダーも驚いたらしい。
上げられた瞳は真ん丸に形作られていた。

「さよう。お前たち、新しい玩具に色々と教えてやれ」

子爵が言うと同時に、けだるげにベッドに寝転んでいた女たちが「
はあーい」と返事をする。

それを見ながら、玲は現状についていけなかった。

玩具?玩具って言ったよな、この肉まん。
肉まんの玩具?誰が?

………俺が?

「は、はああああ!!? ちょ…っ、玩具って何だよ、おい!!」

玲を取り抑えていた男たちが呆然としたままなのをいいことに、玲は掴みかからんばかりに子爵を睨みつけた。

「普段ならば、牢にでも入れて殺すか、はたまた売りにでも出すが… 儂はお前を気に入った。だから、儂の玩具にする」

「ざけんな!! それなら殺されたほうがまだマシだ!!」

「ほう、変わったことをいう。牢に入り殺されたいなどと… 酔狂な。儂の玩具になれば、何不自由なく暮らしをさせてやるというに…、その代わり、色々と儂に”奉仕”をしてもらわねばならんがなあ」

にやり、と笑みを浮かべた男の瞳に、玲は初めて恐怖を感じた。

こいつ………っ!!!

どんより曇った… だけど、熱い欲情を宿した瞳。
吐き気がするほど、嫌な瞳。

「少年を相手にするのは久しぶりだが…、お前ほど麗しい者は見たことがない。その強気をくじくのもまた一興。たっぷり可愛がつてやるっ… じっくりとな?」

頬に触れた、油ぎった丸々とした手を打ち払いたかった。だが、拘束されているため、なすがままに触られるしかない。

せめて…と、思いっきりガンを飛ばしてやったが…さらに子爵の熱情を煽るだけになってしまった。

子爵ははべらせていた女を一人呼んでから、ひどく卑猥な笑みで玲を見つめ…ペロンと舌で自分の唇をなめた。

「黒髪の少年は、一体どんな”味”なのか…、楽しみだ」

18・女たち

「連れて行って、準備させる」

その一言で、薄着でベッドに寝そべていった女たちが「はあい」と返事しながらこちらにやって来た。

「お、おい…っ」

「まあ、綺麗な漆黒の髪、明け方の空のような灰紫の瞳…なんて綺麗な色なのかしら」

「白い肌ね…とところどころがさついてはいるけど、磨けば真珠のように光輝くわ」

「身長は高いけど細い腰ね…。まるで女の子みたいだわ」

しげしげと観察し、

女たちはキヤアキヤア騒ぎながら玲の身体のあちこちを、よく手入れされた指で触れていく。

始めは恐る恐るといった感じで触れてきたのだが、次第に遠慮がなくなってペタペタと触ったり、髪や頬を楽しげに笑いながらつまみ始めた。

なんだなんだ!!？

この見世物のような感じは！！

儼然として女たちを睨むが、それはあの肉まんを相手にしていた強者たちにとつて、可愛らしい抵抗でしかなく、ますます瞳を輝かせて玲を見つめた。

「あなたお名前は？」

「は？」

「名前を知らなくては呼べないでしょう？」

一片も形崩れしていない化粧をした女たちに顔を覗き込まれ、不覚にも少し怯んでしまった。

今だかつて、このような好奇心な目で女たちに四方から見つめられるようなことはなかったのだ。

「レ、レイ……」

「レレイ？変わった名前ね」

「違う、レイだ」

「あらそう。じゃあ、レイ、来てちょうだい。あ、あなたたちは来なくていいわ。ここからは私たちの領域よ」

レイに名前を聞いた女…は、おそらくこの女たちのリーダー的な存在なのだろう。

長く垂れた赤茶の髪の一房を耳にかける姿は、申し分ないほどの色気がある。

ぼんやりとそれを眺めていた男たちの手から、流れるような仕草で玲を引っ張る。

そのまま女たちを従えて歩く後ろ姿は、まさに女帝。

すっげー……けど、

俺、結構やばいかもしんねえな

女たちに挟まれて歩きながら、玲はひっそりとうなだれるしかなかった。

連れて来られたのは、隣室のさらに隣室にある先程よりは幾分か質素な、けれども十分にただっ広い豪華な部屋だった。

部屋に入ったら、どうなるのかと内心では不安だった。

女殴るわけにはいかないし…

つか、玩具とか言われたんですけど、俺!!!

一刻も早く、回れ右をしてこの屋敷から逃げ出したかった。

刃向かうのならば問答無用。

灰色軍団への報復ついでに、この屋敷もろとも塵と化してしまおうか…

ポキポキと指を鳴らす仕草を心の中でしながら、

玲は周りにいる女たちを眺めた。

皆、随分と若い。

あの時はそれなりに歳をいつてるのかと思っただが、ザッと見る限り玲と同年代か、それより少し上くらいばかりだった。

しかも、予想に反して部屋に入るとすぐに玲を縛り上げていた縄は解かれた。

「まったく、こんな少年にこれだけきつく縄を縛るたあ…本当、情も糞もないんだねえ…」

玲の縄を解いてくれた女…名前はルフルと言っていた、女たちのリーダーが、べしつと縄を投げ捨てる。それを見て、女たちはさも愉快そうにアハハハと豪快に笑いあっていた。

その姿には、

あの肉まんを囲んでいた色気はない。

あるのは、ただの女同士の楽しい会話だけ。

その明け透けな物言いは、どこか女子校的な雰囲気すらあった。

玲が立ち尽くしたまま女たちの会話を聞いていると、ルフルが玲の近くに寄ってきて、その肩に手を置いた。

「あんたも大変だね。あんな奴に目をつけられちまって」

「全くだ。あいつがドルフェ子爵か？」

「ああ、女好きで反吐が出るほど厭らしい豚野郎さ」

それに呼応して、周りの女たちも頷いた。

そして、あの子爵がいかにか好色なのかを語って聞かせる。

彼女たちは各地の娼館や孤児院、奴隷商人から買われたのだそうだ。そして、今は彼の玩具…性的欲求を満たす道具として扱われているらしい。

「本当…私たちはどこへ行っても所詮は男の玩具なんだよね…」

「身寄りのない私たちが生きる術なんてもんは、たかが知れてるか
らね」

誰からともなく酒を飲み交わす。玲も酒を飲もうとしたが、なぜか断られた。

何でも、この酒には微量な媚薬が入っているらしい。あの子爵に媚びを売るには、媚薬くらいなきややってられないだろ？と、豪快に笑っていた。

若干酒盛りが始まってくると、玲は一団から少し離れた壁際で一人で酒を煽っている少女を見つけた。

ただの一匹狼か、とも思ったがその少女が玲に目を向けた時に一瞬だけ光った眼光に引っ掛かりを覚えた。

まるで、玲を見定めようとしているような…

「…ふうん」

そのまま、また一人で酒を飲む少女をさりげなく横目で観察する。歳頃は17〜18歳くらいだろうか、シンプルな水色のスリット入りノースリーブのイブニングドレスを着ていて、ストレートの蒼色の髪を無造作に垂らしている。遠目からでもサラサラで微かな風ですら揺れそうだ。

秀囲気からして清純そうだが、猫のように吊り上がった瞳から知的な印象を強く受ける。

惜し気もなく曝された肌は、申し分なく白い。

あのエロ肉豚なら、舌なめずりすらして求めるような美しい少女だ。

「あの子は？」

近くにいたルシールに聞いてみると、ルシールは玲が目で示した方向を見ると、ああ…と頷いた。

「あの子は、サラサっていうんだ。ほんの数日前に連れて来られた子でね…可哀相だがもう少しであの子も、”奉仕”に出なきやいけないんだ」

「連れて来られた？」

「ああ…、私たちみたいに買われた女もいるけど時々、前触れもなく連れて来られる女たちもいるんだよ」

「その連れて来られた女つてのは…他にもいるのか？」

「まあね。連れて来られてから、またどこかに連れて行かれたり…ずっとここにいたりするよ」

その連れて来られたっていう女たちは攫われた女たちだろうか…。なら、ここには今まで攫われて…まだ売られていない女たちがいる

かもしれない…

携帯があれば、すぐにザイアスたちに知らせるんだがなあ。

改めて、この中世風世界を不便に思う。だが、ないものは仕方ない。自分がやれる可能な範囲と条件の中でどうにかしなければならぬ。

さあ…どうするか。

まずはこの屋敷の内部を知らなければ…。

「ルシール、便所に行きたいんだが便所はどこだ？」

便所という言葉に眉を潜められたものの、トイレの位置を教えてくださいました。

運良く、部屋を出て廊下の突き当たりにトイレはあるらしい。

男女共同だと言われて、礼を言いながら、今だ酒盛りという名の愚痴大会を繰り広げる女たちを背に、部屋を出る。

初めは真っ直ぐトイレに向かったが、辺りに人気がないことを確かめてからすぐに別の部屋に入る。

「……………ふう、理由が便所とは…俺もまだまだ修行が足りねえや」

それから部屋の中を見渡す。
相変わらずの成金趣味だが、どうやらただの空き部屋のような。あ
るのは、ソファと長机くらいで、後は壁に幾つものお面が飾られ
ている。

「ほ〜…」

幾つも飾られているお面はまさに多種多様。動物をモチーフにして
いるのもあれば、何をモチーフにしているのかすら分からないもの
まである。

ひっきりなしに飾られたお面たちの空洞となった目は、底無しのよ
うな光を持っていそうで不気味なことこの上ない。

「しっかし…趣味わりいな。お面にまで金細工を施すか？」

仮面屋敷と名付けたいくらいだな…と、辺りを見渡してから手近に
あるお面を手を取った。

どこことなく、他よりも金細工は少ない。面の上につけられた二つの
三角は耳のつもりだろうか？

化け猫の顔を顔に付けてみると、意外としっくりきて、それを失敬
することにする。

「一つくらいなくなってもいいだろ」

そのまま化け猫の面を被りながら、部屋に備え付けられたバルコニーに出る。

そろそろ星が見え始める頃だろう…

しばし空を見上げてから、バルコニーに足をかけてそのまま隣のバルコニーに跳ぶ。

軽く跳んだだけで、身体は重力など感じないのかと疑うほど軽々と浮いた。

この身体能力向上は、一体どうしたものか…と思う。一度、この身体能力はどれほど上がったのか正式に計ってみたい。などと思いつつ、あらかた部屋を調べるがこの階にはいないらしい。しばし考えてから、バルコニーの柵に登り、上の階によじ登る。

「…よっ」

掛け声と共に、上の階のバルコニーまで登りおえる。

まあ、これは向上した身体能力のおかげで成せた技だ。

ふと、後ろに広がる光景を見ながら、高所恐怖症だったら失禁、もしくは気絶しそうだったなあ…と他人事のように考えた。

「さて…探すか」

それから化け猫の面を被りながら（気分はスパイか暗殺者）、各部屋を探す。
覗き込んだ部屋に、着崩した制服のまま仲間と下品な笑いを浮かべる灰色軍団の一部もいた。

ちよつとした悪戯心から、ふと窓に視線を向けた男に窓から化け猫の面だけ見せてやった。

もちろん、すぐに階を移動したが驚いたように目を擦りながら窓を凝視する奴らを見るのはちよびつとだけ面白かった。

今のような隠密行動でさえなければ、もっと遊んでやったものを…と残念だったが、後のお楽しみにしておこう、と我慢した。

それから、ほとんどしらみ潰しに捜したがなかなか見つからなかった。

ここにはいないのか…？と、諦めかけたところで、ふと最上階の左端の部屋の窓が外側から頑丈な鍵をかけられているのに気付いた。
普通、窓には内側に鍵を付けるのが普通だ。

「…ビンゴ、かな」

逸る気持ちを抑えて、左端を目指して猿よろしく身軽にバルコニー

からバルコニーに飛び移る。

スタントマンも真つ青だな。と、笑いながら目的に難無く到着。カーテンがかかって中が見えないので、仕方なく頑丈な鍵が三つも付けられた窓に耳を押し当ててみる。

ひい、ふう、みい……

人の気配を数えていくと、だいたい八人くらいの気配がした。ここに来る前にザイアスからこっそり見せて貰った報告書には九人の少女が行方不明だと記されていたのを思い出す。

301

ここにいるのが八人だとすると……一人足りないな。

そして、頭に過ぎったのは蒼い髪の少女。いきなり連れて来られたという彼女が九人目の少女かもしれない。

当たりをつけたはいいが、事前準備に予想や予想を大幅に残してはいけない。

玲は懐から針金を取り出して、鍵穴にそれを嵌め込む。

外から見れば空き巣同然だが、これは閉じ込められたら、すぐに自分で逃げ出せるようにとあっちの世界で教わった技だ。

玲の収めていた族の中には、こういう犯罪的な技を知ってる奴が何人かいたのだ。

縄抜けや鍵開け、罨の見破り方や気配の殺し方… などなど。とにかく、色んな技を教えられた。

玲が何でも興味を示し、またさらには彼らも玲がそういう状況に巻き込まれたいざという時のために熱心に教わるのを勧めたからでもあるが…。

手首を器用に動かしながら、難なく錠を開けて行く。

そして最後の錠を外してから、そっと窓を開けて中の様子を伺った。

カーテンを小さくめくってみると、案の定、中には手足に枷をつけられた少女たちがいた。

それぞれ、自分に起きたこの状況を察しているのか顔には絶望の色が濃い。

視線を走らせ、監視カメラなどがないことを確認してからトントんと窓を鳴らした。

初めは風の音だと気にも止めていなかった少女たちだが、何回も続く音に不審に思ってたか、振り向いた。

そして、カーテンから顔を覗かせる玲を見て目を丸くして、口をパクパクと開閉させる。

化け猫の面を取り外して、しーつと人差し指で自分の唇を押さえる。その仕草に我に返ったのか少女たちが一斉に近づいてくる。慌てて両手で押し止めてから、玲はあることに気付いて眉根を寄せた。

「お前ら…声が出ないのか…？」

一定の距離を保ったまま、少女たちは玲を見つめながら泣きそうな顔で首を上下に降る。

首元を見ると、妙な印が描かれた首輪らしきものが付けられていた。つくづく嫌な趣味を持った野郎だ、とムカムカしながら玲は少女たち一人一人の顔を見る。

13〜20歳くらいの少女たち。

「どうやら、この部屋が”当たり”で間違いないらしい

「俺はレイ。こここの薄ら馬鹿子爵たちに攫われた女たちを捜しているんだが…お前たちが攫われた女たちか？」

その言葉に少女たちが同時に頷く。

「そうか…、安心しろ、とはまだ言いにくいがお前たちを捜して助け出すために、今カルディエ公爵が動いている」

一瞬、落胆の色を見せていた少女たちが驚きに目を見張り、それから見えてきた”希望”に頬を緩ませた。

「俺はいわゆる囿ってやつだ。で、今はカルディエ公爵たちの救援隊が来るのを待ってる。そしたら、すぐにお前たちを助けてやれる」

少女たちは色めき立つが、すぐに顔色を変えて玲を見遣る。

その焦った様子に玲が首を傾げると、少女の一人がペンを持ち紙にサラサラと書き付ける。

書き終わったそれを見せられた玲は、チツと舌打ちをした。

「リミットは明日の明朝か…」

少女たちは先程まで浮かべていた喜びを打ち消すように、暗い表情を浮かべていた。

「いつあいつらが来るかまだ分からないしな…どうするか」

ぶつぶつと呟く玲を継るように見つめる少女たち。

その視線に気付いて、玲はふつと微笑んだ。

「大丈夫だ。お前たちは絶対助ける。ここから出たいだろ？」

少女たちは暗い目を輝かせて、ちぎれんばかりに頷いた。

その様子に安心させるように笑ってから、一人の少女がさらに新しい紙を手渡す。

中には、自分たちのうちもう一人、連れてこられた子がいてその子は数日前に部屋から連れて行かれたことが書かれていた。

「それって、ストレートの蒼い髪をしていた女か？」

こくん、と少女は頷く。

それを見て、玲はやっぱりあの女が九人目だと確信した。

「分かった。そいつ含めて全員助けてやる。もう少しの辛抱だからな」

それを聞いて、ようやく安堵の表情を浮かべる少女たちに玲は微笑んだ。

その顔を見て、少女たちは顔を赤らめるが玲はそんなことに気づきもせず、再び面を被る。

「じゃあ、またな」

玲は少女たちに手を振ると、

またバルコニーをつたって下へと下りていく。

風がビュウビュウ唸っていて、幾分か慎重になりながらも徐々に元いた仮面部屋まで向かっていく。

最後にバルコニーを飛び越えて、仮面部屋のバルコニーに到着した。

「ま、”当たり”は見つけたし上々だったな」

化け猫の面を立てかけようとして…そのまま服の中に隠す。

「案外使えそうだもんな、このお面」

そう言いながら、部屋を出ようとしてふと部屋の前に誰かがいる気配がした。

ドアノブを掴みかけたまま玲は動きを止める。

通りかがりか…??と思うが、その気配は一向に動かない。

まさか、この部屋に俺がいることに気付いた誰かか…？

真っ先に浮かんだのは灰色軍団たちだが、すぐさまそれを否定する。
気配は一つ。

しかも殺気も警戒も何もない。

ただ、そこに立っているだけのようだった。

「……………開いてみるか」

一向に動きを見せない気配に、玲は腹をくくってドアノブに手をかける。

敵だったら、

ここ数日分の記憶を消し去ってやるっ…

バキッと指の関節を鳴らしてから、ゆっくりとドアを開く。

そして……

「……………」

目の前にいたのは、蒼い髪をした九人目の攫われた少女――サラサ
だっ
た

19・受け入れ(前書き)

遅くなつてすみません(< | >)

19・受け入れ

「お前は……」

目の前で、じっと玲を見つめる少女の瞳は決して揺るがない。

サラサという少女は、部屋に閉じ込められていた他の攫われた少女たちとはどこか違うと思えた。

その瞳には、何の感情も窺えないのだ。

恐れや怯え、はたまた怒りや不信感さえも……

しばし見つめ合いながらの沈黙が辺りに満ちた。

そして、この沈黙に口火を切ったのはなんとサラサからだった。

「彼女たちには会えましたか」

「……彼女たちって？」

「私と同じく攫われた女の子たちです」

……俺が、何を目的にしているか気づいてる？

警戒を強める玲に、サラサは無表情のまま淡々とした口調で続ける。

「そこまで警戒しないで下さい。私はあなたの敵ではない」

「じゃあ、味方だったか？」

「そうですね。私たちの目的が同じであるならば」

一向に無表情のままだが、サラサが嘘をついているようには見えなかった。

だが、玲はこのサラサという”九人目の攫われた少女”に不信感を拭えない。

その落ち着いた瞳には、あの娼婦の女たちが憐れみを抱いていたような絶望など全くない。むしろ、強い意思すらも感じさせた。

ただ単に攫われた奴じゃないな…

というより、目的があってわざと攫われたと考えるほうが妥当か。

目的というのはおそらく”子爵”の人身売買についてだろう。なら、内部で一人で暗躍するよりは手を組める相手がいるのは幾分かも手間隙が省けて良いのだが……正直、信用できない奴と組むのは気が引ける。相手かたは玲がなぜここに来たのかも分かつているのかが気になるし、そもそもこの少女のバックにいるのがどのような奴らかも分からないのだ。

ちっ……

分からないことが多いな

突発的にここに来てしまったとはいえ、情報不足なのは痛かった。何よりも情報というのは欠かせないものだ。と玲は常々考えている。それは、あつちで総長を務めていた時に前総長であった男から教わった教えでもあった。だからこそ、乗り切れるだろうと思われる安易な事柄に関しても事前情報にはぬかりなかった。それが、今この時になって悔やむことになるうとは思わなかった。

「……………はあ」

くしゃり、と前髪をかきあげながら指先をトントンと額に押し当てる。

考えても仕方ないか：

今はまず、あの馬鹿子爵どもを血祭りにあげるのが先決。

この女がどこの誰かは分からないが、俺にわざわざ接触してきたということは相手もまた内部での手を組む相手が必要だと感じたんだろう

なら、今のところ俺の邪魔になるようなことはしないはず…

「なあ、お前が一体どこの誰かと聞いたら答えるか？」

サラサはしばし押し黙ってから、静かに首を振った。

「私はここに潜入を命じられただけです。我々の名を明かしてよいかは指示が来ておりませんから何とも申し上げることはできません」

やはりな。

だが、我々というからにはそれなりの規模がある組織なのだろう

「そ。で、お前たちの目的とやらは？」

辺りにはまだ人の気配がない。

監視カメラや盗聴器なども見当たらないから、聞いても差し支えはないだろう。

サラサは、またしばし間をあけてから口を開いた。

どこまで話していいかを計りかねているのだろうか。

「：子爵の人身売買の証拠を押さえ、さらには売買された少女たちの救出をすることです」

「ふうん、じゃ、一応俺の目的とは被ってるわけか。まー、それが分かってるからお前は俺に話かけたんだろうけど？」

サラサは何も答えなかった。

だが、その瞳がそれを肯定していた。

「それで、今、俺の前に現れてどうするつもり？仲良く手でも取り合いましょってか？」

「…私は、ただ貴方の目的が我々と同じか確かめたかっただけです」

「そう。じゃ、俺は俺のやり方で好きにしていいいわけ？」

「…我々がすでに綿密な計画を立てています。貴方までわざわざ動いて、我々の計画にヒビが入ってしまったって困るのです」

「…なるほど。今のお前は、俺の監視役というわけか」

何も言わないサラサの表情は無表情だが、何より相手の感情を読み取るのには慣れている。

玲も何も言わなかった。

二人の視線が交差するが、どちらも瞳をそらしたりなどしない。

やがて、玲があまりに長くトイレから帰ってこないのを心配したルフルが探しに来る気配を察するまで二人ともその場から動かなかった。

「さて……レイ、そろそろ準備しないとね」

眉根を思いつきりしかめるルフル並び、女たちの視線に玲はふつと口角を吊り上げた。

「そうだな…、念入りに頼む」

玲が嫌がると思っていたのだろう。そんなことを言われると思っていなかった女たちが目をパチパチと瞬かせて互いに顔を見合わせる。

「レイ？あんだ…いいのかい？」

「ん？ああ…どうせなら、完璧に仕上げたい」

恐る恐る聞くるルフルに、玲はあっけんからんと答える。

遠くからサラサが玲をじっと見つめているが、その視線に気付かないふりをしながら玲は、驚きを通り越して憐れむ女たちを見回す。

「ところで聞きたいが…皆はここから逃げたいか？」

玲がいきなり発した問い掛けに女たちは一瞬目を見張ったが、すぐに困惑した顔で玲を見つめた。

何と言っているのか迷っているのか、玲のことを頭がとち狂ってしまったと思っっているか…

「レイ、あんたいきなり何を言い出すんだ？」

ルフルが周りの女たちを代表するように言う。

幾分かの動揺もない。ただ、その目には玲を咎めるような意味があった。

「俺は、皆の気持ちを聞きたいだけだ。いつまでもあの肉団子の言いなりになるつもりか？」

「なるつもりも何も…私たちにはどうすることもできないんだ」

「それは、どうすることもできないんじゃない…どうしようもしないだけじゃないのか」

瞬間、女たちの目つきが剣呑なものへと変化する。

「あなた…それはどういう意味？」

「あんなたちは、何もできないとは言うけど、それは何かをしてから得た結果から出た言葉か？それとも、ただの自分の憶測から出た言葉なのか？」

「私たちはしがない孤児で娼婦だよ…。何も持っていない私たちが何かをできるわけでもないだろう！！？」

「それは、ただ自分たちには何もできないと思い込んでいるだけにしか聞こえない。何かをする前に、あんなたちはただ自分に絶望し、自分の境遇を哀れんでいるしかすぎない」

「な……っ。なにも分からない坊やが私たちの何が分かるっていうんだ！！私たちは、今までずっと…ずっと、大人の顔色を窺って、媚びを売って、はたまた自分の身体で……っ、だけど私たちは結局何も与えられない。与えられるのは、クズ共を悦ばせるための薄っぺらい安物のドレスや、最低限の衣食住だ。それでも、逃げ出せないように嚴重に檻に入れられて…それで、私たちに何もしていない、自分を哀れんでいるだけだっって！！？」

厚く化粧を塗り施した顔を怒気に染め上げるルフルに続いて次々と怒りの声をあげる女たち。

女たちの怒りを真っ向から受けながら、玲はただ黙って立っていた。

「私は、身請けしてくれるって約束した人に裏切られて奴隷市に売られたわ!!!」

「私は孤児院の院長に、ずっと親なしだと蔑まれながら生きて、あげく金で売られたのよ」

「私は親に捨てられたわ。子供なんていらなくてね。小さい女の子一人で生きていく方法なんてたかが知れてる。今なら最低限でも衣食住があるだけで幸せだわ」

サラサは後ろの壁際に寄りかかりながら様子を見ている。

その目は玲がこれにどう收拾をつけるのか見定めているようでもあった。

玲はちらりとサラサに目をやってから、居並ぶ女たちに目をやった。

「そうか…、だが俺は別にあんたたちを憐れんだり、同情したりは

しない。俺はあんたたちの境遇、思いを全てを理解することもできない。でも、俺はあんたたちがこんな腐れ野郎のもとで落ち着こうとしているのはどうかと思う」

いきり立つ女たちに、玲はさらに言葉を続ける

「本当にここにおいて、幸せだと言えるのか？確かにここでは衣食住は保障されるし多少我慢していれば生活には困らない。だがそれと幸せかどうかは別だろう？落ち着こうと、幸せだと思い込もうとしても、自分の心に嘘はつけないんじゃないと俺は思う。あんたたちは本当に幸せか？あの豚のもとで、ずっと過ごすつもりか？何の自由も選択肢もないまま……」

しん、と部屋の中が静まり返る。玲もそれ以上は何も言葉にしなかった。サラサも黙ったまま玲とあられもない格好をした女たちの一団を見つめていた。
このまま沈黙が続いたままかと思われたが、女たちのうちの一人がポソツと呟く。

「……………幸せ、なわけないよ……」

それを口火に、他の女たちも次々と同意の声を上げる。

「私も…」

「こんなところ、早く逃げたい」

「でも…逃げて、私たちに行くあてなんてないわ…」

哀しみに満ちた口調で女たちは互いに目を合わせる。

玲はそれを一通り首を回して女たちを見つめながら、口を開いた。

「おそらく、今日中に子爵は捕まる。人身売買、誘拐、不当な暴力、賄賂、…諸々の罪に、上はもう見過ごせないと決断をしたらしい」

はっ、と女たちが顔を見合わせる。

「レイ、それは本当なのかい…?」

ルフルが顔を若干青ざめさせながら玲に問う。
玲は頷くと、ルフルは「ああ……」と、そのまま椅子に背をもたれさせる。

「分かってはいたけど……そう、ついに……だね」

「この屋敷、ヤツの権利、金、全てを撤収されるだろう。…それで、問題はあんたたちだ」

ぴくつと女たちの肩が揺れる。言い知れぬ不安を浮かべる瞳は絶るように玲を見つめた。

「…本来なら、あんたたちもヤツの”仲間”として捕らえられるだろうが…一つ、提案がある」

「……………提案？」

ルフルがうなだれていた顔を上げて、玲を見遣る。
玲はその施設に真つ正面から向かい合いながら頷いた。

「そう。…俺のもとに来ないか」

「……………は??」

パチパチとルフルは瞬きを繰り返す。それに、玲は一瞬だけ頬を緩める。

その顔には見覚えがあるのだ。

遠くない…でも、近くもない過去に。

「俺があんたたちの身分、生活を保障して責任をもつ。だから俺のもとに来ないか」

ポカンと口を開いていた女たちだが、すぐに眉を潜めて玲を睨みつけた。

「坊や、大概にしなよ。あんた自分が何を言っているか分かってんのかい? あんたみたいな坊やに私たち全員的生活が保障できるとでも?」

「ああ。もちろん、タダで保障するわけじゃない。仕事をしてもらって、それからそれ相応の給金を払おう」

「ふん、坊やが娼館でも開くつもりなのかい？」

「いや、まさか。仕事はちゃんとあんたたちに選んでもらうよ。
…まあ、あんたたちには自由がある。それだけは絶対だ」

自由、という甘美な響きに不審感ばかりに募らせていた女たちの目が少しばかり揺れ動く。

しかしルフルは今だ厳しい目つきをしたままだ。

「口ではどうでも言えるよ。坊やは…どこかの金持ちのお坊ちゃんなのかも知れないけどね、人を一人養うだけでも、一体いくらの金がかかると思う？それに、あんたが私たちを手放した時、私たちはどうしたらいいんだ？それなのに、あんたを簡単に信用できるとも？」

「そうだな、確かにあんたたちに今すぐ俺を信用してもらうのは大変そうだ。だけど、ここで生きてくなら俺に付いてきたほうが一番だと思うな」

玲は懐から出したカードをルフルに見せる。
これは、馬車の中で預かってきたカルディ工家（家族）専用のスパーカードだ。

初めは怪訝そうな顔をしていた女たちもそれを見た瞬間に「あ」と驚きの声を上げた。

うん…

俺、これ印籠みてえだな

ここに助さんたちがいないのは残念だと思いながら、玲はカードを掲げてはつきりとした声音で女たちに告げる。

「名乗り遅れたけど、俺はカルディ工家のものだ。今回はカルディ工家からの命令でここに忍び込ませてもらった。今この時もカルディ工家の騎士たちがここに向かっているだろう。どのみち、あなたたちの身柄はカルディ工家で一時預かることになるだろう。…そこから、どう生きていくかには俺の口添えも、それなりに効果はあると思うが？」

どーせ、あの父なら彼女たちをみすみす何の保障もなしに、道にホイするわけないだろうけど。

あの兄も、それなりの人格者らしい（変態だけど）
だが、つい先程より浮かんた俺の考えを実現するには
彼女たちを身柄を預かるのは俺にしたい。

女たちはしばしカードを凝視してから、自分たちのリーダー格であるルフルに目を向ける。

ルフルは考えこむように、玲にじっと見つめていた。
玲もその目からそらすことなく、むしろ余裕を示すように口角を上げる。

妖艶とも取れる笑みに、ルフルはくつきりと鼻に皺を寄せた。
そして、長い溜め息を吐き出しながら玲を見上げる。

「あんた、カルディエ家の密偵だったんだね」

「ああ」

「他にカルディエ家のものだと示すものは？」

「これだな」

首に提げたネックレスを指で指す。
ルフルが近づいてきて、それに刻まれているカルディエ家の紋章を見ると……ようやく納得したように頷いた。

「どうやら、本物のようね」

「偽物ならこんな堂々としないだろ」

「馬鹿言っんじゃないよ。はったりが得意だろ？……女は」

最後の部分は玲の耳元で囁くように告げられた。

「知ってたのか？」

「私の目を舐めるんじゃないっての。何人もの男を見てきた私からしたら男と女の区別くらい簡単につくよ」

「その割に坊やと言ってたじゃないか」

「その格好から察するに、女だと思われたくないのかと思ってね」

のってやったままでだよ、とウィンクするルフルに玲は小さく笑った。

「はははっ、なんか…あんたには敵わないな。で、俺の案にのるか？」

「……そうだね、どのみちここにはもう入れられないだろうし。こういう博打に私は意外と勘が働くんだ」

ルフルと玲は、互いに微笑みあい手を握る。

これが後々まで続く友情になるとは、玲もルフルもまだ知らない…

20・誘惑大作戦1

「うーん、こんなものかしらね」

鏡越しにルフルが眉を潜めながらもようやくOKのサインを出すのが見えた。

やっと終わった…。

玲は鏡に映る自分を見ながら、眉を思いつきりしかめていた。正直、力を入れてくれとは言ったが、これはちよつと…と言いたい。もともと、小市民であるのにこんなけばけばしい化粧と衣服はご遠慮願いたいくらいなのだ…。全力で。

「やっぱり素材を生かし切れないのは残念だけど…あの肉厚布団にはもったいないからね」

「いや…ルフル…これは、少しやりすぎじゃないか？」

「やりすぎじゃないわ。本当はあんたにはもっと薄めの化粧でこのグロスも赤々しいものよりはほんのりピンクがいいと思うし。私からしたら、素材を生かすより殺すような派手派手しい装いになるのが口惜しいくらいだよ」

「素材を生かそうが殺そうがどっちでもいいよ、俺は…」

力無く脱力した玲に、ルフルは腰に手を当てて呆れたような声を出す。

「なあに言ってるんだ。あんたはれっきとした女の子なんだからね。なのに、自分の魅力を殺すような装いをする奴があるか」

いや、あるけど。

ここに…とは言わないが、玲は自分の頭にドシツと重りのある飾りを付けられてしまったのを、うっとおしく思いそれを外せないかと思案する。

しかし、それを読んでいたのかルフルから「その飾りは外すんじゃないよ」と言われてしまった。

さっきからそうだが、ルフルは少し遠慮がなくなっただけがする。

もともと姐御肌なのだろうが、玲の着付けをしている間にもずつと「女の子なんだからたまには綺麗なかつこうしな」「化粧したことない!? あんた、それで本当に女かい」「ちよつとサイズ計らせな」「下着はもつと可愛いのにしないと男はなびけないよ。下着をいかに気合いを入れるかで女の魅力には違いが出るんだからね」…などなど。

母親や彩香にすらここまでズケズケと女らしくないと言われなかった。

まあ、彼女たちの場合はすでに玲に”女らしさ”を求めることを諦めていた節があるが。

「なあ、腰痛いんだけど」

「それくらい我慢しな。本当ならあとワンサイズは小さくする予定だったんだから」

それを聞いて玲はサツと顔を青ざめさせた。
あとワンサイズも…

このぎゅつと腰を絞る拘束具コルセットを忌ま忌ましく掴む。
とは言っても、掴むような感覚はなく、あるのは下手な防具よりは固そうなものが指の腹に感じるくらいだが。

「苦しい…」

「情けない。そのくびれた腰を手に入れるためなら、何サイズだろうが我慢する女たちは多いんだ」

くびれた腰など必要ない。
むしろ、くびれた…というよりも腰がぐしゃっと潰れそうなくらいの圧迫感しか感じない。

自分で言っていてゾツとしてしまった。
腰が潰れるなんて…冗談でも勘弁して欲しい。

「はあ…脱ぎたい」

「ふん、すぐ脱ぐことになるよ。あの肉厚布団は手が早いから」

さらに背筋に寒気が走った。

冗談にしても言っていて欲しくはないこととは、まさにこのことだ。

「ルフル…んな気持ち悪いこと言うな」

「おや、何を言ってるんだか。あんたは今からあいつに抱かれに行く”男娼”なんだよ？」

「……………」

この世の苦渋を背負ったかのような顔をする玲にルフルは堪え切れなくなったのかハハハと豪快に笑う。

「本当に抱かれるわけじゃないんだろ？なら、そんな顔する必要ないじゃないか」

「考えるだけで嫌なんだよ」

「ふーん？何だ、レイ。あんたもしかして、処女？」

「……………」

何も言わない玲に、へえ〜と物珍しげにルフルは目を丸くした。

「…何だよ、んな目でこっち見るな」

「あんたがまさか処女つてのは意外でねえ…。ま、今まで女らしい格好してなかったし、あんた中性的な顔してるからね」

「俺がどんな顔だろうと関係ねーだろ」

「贅沢なことを言うんじゃないよ。あんたの顔は、綺麗とか可愛いなんて言葉より何より人の目を惹きつける。そんな顔になりたい奴はたくさんいるだろうよ」

「そんなの知るか」

「でも、あんたはもっと自分の身に気を遣えば綺麗になるよ。誰にも負けないくらいね」

ニコツと笑ってルフルが玲の肩を叩く。

「今度はちゃんとあんたの顔や雰囲気合った装いをしよう」と言

いながら。

玲はルフルの言葉に何の反応も示さずにただ鏡に映る自分を見つめた。

短い黒髪は上に結い上げて、そこにキラキラとした宝石やらがついた飾りをつけている。

肩にチャラチャラと揺れる金のビーズがかなり邪魔だ。

幸いなことに肩や胸元の露出は少ないドレスを着せられた。

しかし、さすがあの好色変態肉団子だ。足のスリットが嫌になるくらい入っている。

どうやら奴は胸よりも何よりも足フェチらしい。

全くもってキモい。

ほとんど腰まで達したスリットのせいで足はほぼ丸見え。

しかも薄い布生地だから身体の線が妙にハッキリと見えているのが、たまらなく扇状的で厭らしい気がする。

玲は男だと思われているらしいが、一応女の格好をさせるといふことらしいので、胸はちゃんとある。

ただ、本来ならこれは詰め物で作られた紛い物の胸だろうが…玲は女だからと詰め物は必要なかった。

普段はサラシで隠しているから分からないが、実は意外と胸はあるほうだった。

中学時代はさほどあるわけでもなかったが、中学の終わり辺りから急に栄養が胸にまわりだした。

さすがにサラシで隠し続けるのは限界に近いほどになってしまうのではと不安だったが、今はまだギリギリ隠せる。

……これ以上大きくならないよう祈るばかりだ。

コルセットで締め上げた腰の成果もあって、玲の胸はさらに強調されるように突き出ている。

女たちは羨ましそうな感嘆の溜め息をついたが、玲は自分のそれを見て舌打ちを禁じ得なかった。

鏡に映るのは間違いなく”女”だ。

化粧はかなり濃いのが、それでも人目を惹く顔立ちであるのはすぐ分かる。

申し分ないスタイルも相まって、もし男たちが見れば…どうなるかは想像に難くない。

「とにかく、これが私たちが出来る精一杯だ。存分にあの肉爆弾を誘惑してきな！」

威勢のいいルフルと違って、玲は「ああ…」と消え入りそうな声で頷いた。

本当、ここに来てからるくなことにならない。

誘惑なんてものを玲は一切やったことがないのだ。自分から逃がしてやる、助けてやる、など言った手前、自分が逃げ出すことは矜持に反するが、だからといって嫌なものは嫌だった。

こんな姿…マジで誰にも見られたくねえ…。

見られたら自害してやる、と半ば本気で思い、自らの拳を握りしめた。

ふと、視界の端にサラサが映る。彼女は待機組だったので今の今まで部屋の外で玲の着替えを待っていたらしい。

丁寧にノックして入った彼女は玲のほうを見て、ギクツと動きを止めた。

幾分か、あの無表情に驚きの感情が窺えて玲は少しばかり気分が良くなる。

あの無表情もたまには感情を表に出すんだなあ

端から見れば、玲も十分感情を窺えない無表情組に類するのだが、最近顔をしめたり、眉を潜めたりと嫌々な感情は表に出てきている。

それはあの、妹至上主義と豪語してやまない兄たちが一役買っているの
は言うまでもない。（彼らからすれば玲のしかめっ面ではなく満面の素晴らしい笑顔をお目にかけていと願っているのだが…今だその
目的は果たせていなかった）

玲はドレスの裾に足が絡まないよう注意して歩きながらサラサのも

とまで歩く。
歩きたびに踵になる白い足が美しく、その様はまるで優雅な白鳥のようでもあった。

「よっ」

片手をあげてサラサに合図をすると、彼女は一瞬惚けた表情をしたがすぐに彼女らしい無表情に戻る。

「着替えられたんですね」

「まーな。動き憎いったらないぜ」

「しかし…よくお似合いだと思います」

「んなことねーよ。こういうのはもっとスタイルが良くて綺麗なやつが着るもんだ」

サラサは玲の姿を下から上まで眺めてから控えめに言葉に出した。

「十分、その条件に当て嵌まると思います」

「は？嫌味かそれは」

「いえ、そういうわけでは…」

「ふうん、ま、いいけど。…で、首尾はどうなってる？」

低く潜められた声に、サラサも無表情に若干の真剣さを帯びる。

「……首尾は滞りなく行われているそうです。あと、カルディエ家の騎士団たちもこちらに向かっている模様だそうです」

ザイアスたちもうまくこの場所を突き止められたらしい。それを聞いて玲はひとまず安堵する。

しかし、サラサは鋭く瞳を細めながら玲を見つめる。

「貴方はカルディエ家の者だというのは分かりましたが、かといっ

て我々の計画を乱されるのは困ります。ですから、余計なことはなさらぬで下さい」

「余計なこと、ねえ……。でも俺は馬鹿にされたまま黙ってるのは性に合わないんだよな」

このまま注意を引き付けるためにあの肉団子に誘惑しなきゃならねーし。と呟くと、サラサは冷たく切り返す。

「敵地に潜入したのならば、最善の策を一番に取るべきです。互いに目的が同じであるならなおさら。私の主が立てた計画は完璧であり、一部の隙もない。見たところ貴方が来たのは少々行き当たりばったりであったようですよね。なら、貴方はおとなしくして下さい。…誘惑なり何なりは貴方が蒔いた種。貴方が責任を持つべきことですから、一切関与しません。が邪魔だてされるのだけは阻止させて頂きます」

「そ、なら勝手にすれば？」

あっさりと言う玲に、サラサは少しばかり肩すかしを喰らったような気分になり玲を見上げる。

玲の灰紫の瞳が煌めいて、深い藍色のようにも見えてサラサは目を瞬く。

「意外なことを言った…ような顔だな。お前らはお前らで好きにすればいいさ。俺からしてもお前らと関わる気は一切ねーよ。俺は俺の好きにやる」

「ですが、邪魔だては…」

「邪魔かどうか俺の知ったこっちゃねえ。邪魔だとそっちが判断したら阻止だろうが何だろうがすればいいだろ。だが俺は俺の自由にやらせてもらう。そのほうが俺はやりやすいからな」

言うや否や踵を返して玲は”娼婦”としてのおめかしをするルフルたちのもとへ戻っていく。それを呆然と見送るサラサに「じゃーな、情報さんきゅ」と玲は手を振りながら、一切振り返ることはなかった。

21 誘惑大作戦2

「……………っ、子爵がお呼びだ。さっさと来い」

待機していた部屋には既に着替えとメイクを済ませた妖艶美女軍団が待っていた。

知らせに来た男は、一瞬目を見張り、ゴクリと唾を飲み込んでから早口に用件を言って出て行ってしまった。

「さあ、いよいよね。レイ」

「……………おっ」

重い腰を上げて立ち上がる。

シヤラリと髪につけた飾りがその動きに合わせて揺れるのが目に入っ
って溜め息をついた。

「いい？まず、ここにいる五人があいつの前で踊りを披露するの。
その間にレイと残りの子たちがあいつに杓をしたりして、…まあ、
ご機嫌とりをするのね。そして気に入った子がいたら、あいつは自
室に連れていくから」

説明しながらも、うんざり顔を隠せないでいるルフルに玲自身も嫌悪を隠せないでいた。

あの重ね着させられた腹に近寄るだけでも嫌だというのに
玲は今夜、やつに召し上げられるように”誘惑”をしなくては
いけないのだ

「……………最悪だな」

はあ…と頭を抱えていたら、踊り子の衣装に身を包み長い髪を後ろで緩く結わえたサラサが隣に並んでいた

「怖じけづいたのですか」

「……………はあ？」

怖じけづいた

そんなことを言われるのは初めてだ。剣呑な表情を現にするがサラサはどこ吹く風で、それを見つめ返した

「頭を抱えていらっしやるので。貴方がこれからなさることを嫌がっているのかと」

「…嫌なのは嫌だがな、俺は怖じけづいたつもりはねえよ」

「でしたら、しっかりとお願いします。今日の宴の終わり頃が…時、ですから」

「言われなくても」

サラサは「よろしく願いします」と言ったきり、あとは口を閉ざして前のほうを見ていた。

扱わずらいやつ…

玲は隣にいるサラサと、これから来るであろう”時”を思っ

め息をついた

華やかに舞い踊る……とまでは行かず、ただただ際どい衣装から際どく覗いた素足と腰の動きを堪能しながら子爵は、横に侍る美女軍団に鼻の下を伸ばしていた
玲はまだ子爵から”お呼び”がかかっていないからと、部屋にある衝立の裏に隠れていたのだが……

正直、ここにいて良かったよな……

目の前で繰り広げられる、下卑た男の下卑た狂宴に玲は眉間に寄るシワを一向に元に戻せなかった
さらに言うなら、先程から感じ続ける嫌悪によって握りしめた拳がプルプルと震えている

ふざけんなよ、肉団子…っ！

宴とは名ばかりの、ただ女のあられもない姿を鼻の下と腹の肉が伸びきった助平爺が楽しむだけの個人娯館のようだ

今も、曲に合わせて統率のない踊り…をする彼女たちを助平爺は、うひょひょと目を三日月にしながら眺めていた

ぶっちゃけなくてもキモい

興奮するたびに揺れるあの脂肪の塊の化している肉がウザい

護衛と称して子爵と共にいる警護兵は、あの灰色軍隊とは違ったが、鼻の下の伸び具合からして仕事をしている感じでは全くないむしろ、食い入るように踊る女たちを見る目が血走っているようにすら見えた

玲は、ひらひらと身体の線を見せびらかすように踊る女たちを見つめた

その中で一番踊りらしい踊りをしているのは、サラサだった

一つにくくった髪を揺らしながら手を大きく振り上げたり、軽々とステップをふむ姿は、踊り子といっても過言ではない

ターンするたびに揺れる腰紐や、スリットから見える足はセクシーだがどこか上品だった

他の女たちのよりも洗練されていて、いやらしさというのが不思議と感じない

淡々と無表情な顔つきでステップを踏みつづける姿は、いささか何かの呪文を行っているかのようにも見えたが玲は、魅入るようにその踊りを見つめていた

「そういえば、あの子供はどうした」

宴のメインであり余興である踊りに気分を良くした子爵が、自分の胸にもたれるようにしてしなを作るルフルに問い掛ける

ルフルは、

赤く塗りすぎの唇をにっこりと弓なりに反らせて子爵の耳ギリギリに唇を寄せて囁く

「あら、子爵。あの少年をまだ気にしていたの？」

ふっ、と耳に息を吹き掛けながらルフルは流し目を送る

ゴクリ、と生唾を飲み込みながら子爵はルフルのくびれた腰に手を回しながらにんまりと笑った

「そうだ。男にしては、妙に色気のある少年だった。ただの少年ならばすぐさま奴隷市にでも売りさばこうと思ったが…儂もいささか珍味というものに興味が湧いて……な」

「まあ、子爵様だったら…わたくしたちを差し置いて、ですか？」

「ふふふ、そう言うな。珍味は所詮珍味。儂はいつも極上のディナーを味わえているのだから…」

ペロリと舌で自身の唇を舐めながら、ルフルルの豊かに盛り上がった胸を眺める

その瞳に情欲が湧くのをルフルルは冷めた心持ちで見っていたが、表情には一切ださなかった。

代わりに、まあ…嬉しいわ、とわざとらしく自分の胸をべったりとした肌に押し付けるようにした

ルフルルとしては、やはり玲がこの助平肉布団と（フリとはいっても）襦を共にしようとするのは賛成できなかった

玲が妙齡の少女であることもそうだが、先程からチラチラと視界に入る玲の顔が青を通り越した真っ白に染まっていたからだ。それが、不安などではなく…怒りによるものだと気づいてはいるが…おそらく、彼女自身も気付かないうちに怯えも混ざっているのではないかとルフルルは考えていた

娼婦をやって何年か経っていれば、だいたい女を見れば経験済みかどうかはすぐ分かる

経験済みか否かでは匂いが違うのだ

どんな匂いだと問われれば、どう答えるべきか悩み所ではあるがそれでも女の嗅覚、もしくは六感から与えられるそれをルフルルは確

信にも似たものだ」と理解していた。先程、玲にも確認したがやはり彼女は処女。それに、もともと理由は分からないが男装していた少女だ。このような”女を發揮させる”ところには慣れないに違いない。それならば、少しでも彼女が不安にならないようにしなければ…そう、自然と考えていることにルフル自身も驚く。自覚はしているが、このような職業柄、人を見る目は人一倍厳しいし、何よりも人をあまり信用することなどできない。なのに…なぜかルフルは玲を信じてみよう、信じてみたいと思っている。なぜ、そのように思うのかは分からないが、それを疑問に思いながらも受け入れようとしている自分の気持ちのほうが大きかった。

まさか、

あんな娘っ子の言葉を信じようとしているんだからね…

この悪夢から抜け出す道を指し示すという、あの少女を…

だからこそ、自分ができなければならない

「子爵様は、もうわたくしのことなど飽きてしまったの？」

ぶよん、と効果音がつきそうな腹肉に内心では眉を潜めながらもルフルはことさら子爵に身体を近づけた
いつもより積極的なルフルに、子爵は鼻の下をさらに伸ばしてその魅惑的な肢体をねめつける

「何だ、儂がお前のような女に飽きるとでも…？」

べったりとした汗が滲む手をルフルの腰に回し、その手でゆっくりと肌を撫でる
べたつく感触への嫌悪感を隠しながらもルフルは、子爵にお酒をつぐ。

今日用意した酒はアルコール度数がいつもより格段に高い
もとから酒に強くはない子爵の身体は酒の熱により真っ赤に染まっ
ていて、まるで焼豚のようにすら見えた
笑みを押し殺しつつも、次々と女たちは子爵の杯に酒を注ぎ込んでいく

女たちの意図を知らない子爵は上機嫌に注がれるままに酒を飲み干していった

「ああ…いい気分だ」

「そのようですわね、子爵様」

「つむぎ、これならばまたいつものように……といきたいところだが……」

ちらり、と部屋の奥にあるドアを見ながら子爵はルフルの腰を抱く

「……しかし、今日は珍味もあることだしな。どれほどの珍味になるか見てみよう」

ククク、と笑いを浮かべながら子爵は近くにいた護衛に玲を連れてくるよう促す
護衛の兵は、それに頷くとすぐに衝立の裏にいる玲のもとにやってくる

「おい、子爵がおよび……だ……？」

言いながら、目を真ん丸に見開いた男に、玲はうつすらと赤く塗られた唇を弓なりにしながら頷いた

しかし、いつまでも男がジロジロと上から下まで玲を眺めてくるのでイライラと指で腕を叩く

「……………おい？」

「……………っ、来い」

ハッと我に返った男の案内で玲は衝立の裏から姿を現す
ちやらり、と髪につけられた飾りが音を鳴らす。

短く揃えられた玲の黒髪も女たちのハイパーテクにより、うなじを見せれるほどアップできるようになっていた

また、少し飛び出た髪の毛がうなじにかかっているのが、妙に色気があるというのは全員の見解が一致したことでお墨付きをもらえたのだ

後は俺の演技……………っか、

あのデブをなんとかして潰さねえとな

ここまでお膳立てをしてくれたルフルたちや、今もなお怯えている閉じ込められた少女たちを思いながら玲は顔をしっかりと上げて、射抜くように子爵を見つめた

近づいてくる玲を惚けたように凝視していた子爵は、護衛の「連れて参りました」の言葉に意識を再び取り戻した

「お前が…あの小僧か」

「…ああ、そつだ…いや、そつです?」

こんな焼豚饅頭に敬語を使うのは、甚だ遺憾だが今回しなければならぬミッシヨンはこの男爵を”落とす”、”潰す”こと。全く、初めはただの服の買い物であつたはずなのに、なぜこんなことになつたのか…と、玲は首を傾げたい気持ちだつた

「……………ほう、これはこれは」

舐めるように（実際、舌なめずりをしやがった！）玲を眺める男爵はその少年とはいえ、具に自分の欲を掻き立てるその姿に身体の奥で熱い血が廻つていくを感じた

少女のような少年のような、中性的な不思議な少年。初めは、ただの冗談のつもりだったが、今やそれは冗談とはいえなかつた…否、思えなかつた

欲しい……

この少年に……触れたい

子爵は半ば投げ捨てるようにルフルの腰から手を離すと、よつこらしよと重い身体を持ち上げながら立ち上がる

薄い申し訳程度に巻かれた腰布をずり落ちないように支えて玲の近くまで歩いていく

そして、直立不動をしたままの玲の横に來るとおもむろにその腰を抱き、もう片方の手で太股をなでさすった

「良いな……よし、やはり今宵はお前に相手をしてもらおう」

張りのある玲の太股に気を良くして、子爵は上唇がめくれるほどにったりと笑う

玲は微かに拳を握りしめながらも、顔を青ざめさせる……かのような演技をする

嫌がつてる玲に、嗜虐心がそそられるのかますます子爵は機嫌を良くし、玲の細い腰を強く引き寄せた

「今日の相手を決めた。残りの者たちは去ね」

冷たく護衛兵に命じながら、玲は子爵に連れられるように奥のドアまで進んでいく

兵たちに部屋に戻るよう促された女たちは、心配そうに玲を振り返るがそのまま部屋を出て行った

22・誘惑大作戦3（前書き）

男爵ではなく子爵でした。

申し訳ありません（<―>）

22・誘惑大作戦3

連れられた部屋は…ラブホテルよりもさらに趣味が悪い部屋だった。壁一面どピンクという恐ろしく…吐き気のするもの。げええ…口を抑えながらも眉が眉間に寄せられる。

「こつちに来い」

腰をべたつとした手に触られる。脂っこく太い手が薄い生地できた服にしか覆われていない腰に纏わり付く。

感触が直に触れてきて、気持ち悪い。とてつもなく気持ち悪い。

隠しきれない嫌悪感を必死に押し止めて、玲は言われた通りに子爵のもとまで近寄る。

ベッドにはなぜか薔薇の花びらが散りばめられていて、呆れつつもその子爵の心内を現したかのような陳腐な装いを小さく鼻で笑った。華美な装いにも、それが映えるか映えないかを整えるのはその家主。せっかく個々では素晴らしいのである。調度品の数々があつたとしても、この陳腐な男の手に委ねてしまえば、どれもこれもが部屋とはミスマッチ。しいて言うなら、悪趣味。ただ、この一言につきる、としか言いようがないものばかりだ。

いそいそと、でっぴりとした腹を揺らしながら天蓋つきのベッドに近づく巨体を横目に、玲は大きく息を吐き出す。

ここからが正念場だ。

さっさと奴をひねり潰し、踏みにじり、海の藻屑にしてくれるわ！！

沸き上がる闘争心を隠すように顔を隠す。シャラリと揺れた髪飾りが顔の横に垂れてしまつのがうつとおしくて外してしまいたくなるがそこは我慢。

こんな馬鹿みたいな冗談としか思えない姿を見られたら、昔の……いや、大切な仲間だったあいつらは腹がよじれるほど笑うに違いないと思えば、苦笑こそすれ面白くも何ともない。

寝台の横で酒を煽っている子爵に、こっそりと近づき瓶の中にある酒を杯に注ぐ。

「ふん、気がきくじゃないか」

そのまま杯にある酒を一気に飲み干し、ぶつとい腕を玲の腰に回した。内心の嫌悪を隠そうとしたが、隠し切れなかったらしい。思わず身体を引いてしまった。

しかし、それに対して何に気をよくしたのか分からないが子爵は「ククツ」とくぐもった笑い声を漏らしながら、さらに玲の腰を引き寄せる。

薄い布ごしに伝わる、ねっとりとした手の感触にゾワワと身体を震わせる。

気持ちわりいい……！！！！

そんな玲の心の内などお構いなし、とばかりに引き寄せられ酒臭い息を首筋にかけられる。

おぞけに身体を震わせるが、それが子爵には玲が恐怖しているように見えたようだ。

嗜虐心に溢れた欲望に瞳をたぎらせながら、嬉々として玲の細い腕を掴んでベッドの上へとほうり込む。

放り込まれた拍子に、一度身体がベッドの上でバウンドする。ぎよっとして子爵を見ると、彼はすでに服を脱ぎ始めていて、もう薄い下履き一枚という、視界から即刻排除したくなるような……目が腐りかけてしまうのでは？と思うほど。

う……っ、と目をつむりかけたがなんとか首を横に振ることで意識を保つ。

……あぶねえ。

もう少ししたらこの肉弾を弾き飛ばすか、ぶっ潰してたかもしれない。

ぶるぶる震える自身の右手を左手で抑える。本来なら、利き手が左手である玲だと左で繰り出す拳の威力は右の比ではない。

おまけに今はこの世界での玲の能力値は「スーパーマンも夢じゃね

え！…嫌だけど！」といえるほど上がっている。
それを考えると、無意識のうちに右で殴ろうとしたのはかすかにあつた意識がそうさせたのか。
危ない危ない、と呟きながら拳を抑えていると、子爵がにんまりと歯糞のついた歯を出して笑う。

「怖がらずとも、まかせておれば良い。全く、男にしておくにはもつたいないな…」

は！？何言つてやがんだ、この豚！！

どうやら玲が震える手を抑えていたのを、”子爵の事を怯えて”という、なんとも自分に都合のいい解釈をして喜んでいたらしい。

どこまで馬鹿でめでたいんだ、こいつは…。

呆れた視線になるものの、子爵は一切気にせずギシリと奇妙なほど軋んだ音を立てて玲が放り投げられた寝台に巨体を載せる。
ゾワリと悪寒が走りながら、シリシリと後ずさる。シートに足が絡

まるでそんなこと気にならないほど、このデブ子爵が気持ち悪かった。

後ずさる玲に、またも都合のよい解釈をした子爵はほくそ笑む。

「どうして逃げる？怖がることはないんだぞ…さあ」

何が、さあだ。何が。

心の中で突っ込んでみたが、口には出さなかった。

背中にひんやりとした壁が当たり、これ以上下がれないと悟る。それを子爵も分かっていたのか、ますます笑みを深くした。

「下種め…」

憎々しげに呟くも、いきなり豚並みのぶよよんとした肉圧が密着してきて、全身に寒気が走った。

鳥肌が立ち、反射的に逃げようとするものの圧倒的な体重差で押さえこまれてしまう。

べつとりと汗ばんでいる身体を押し付けられ、なんとか抵抗しようとするがやはり敵わない。

「くくっ…世には男娼というものもあるしな。その嗜好がどうにも理解できなかったが…なるほど。少しは理解もできよう…」

一人勝手に何かを納得している子爵に、玲は「ふざけるな!!」と怒鳴りたい衝動に駆られながらも抵抗を続ける。

のっしりとかかる重みに、圧迫死するかも…と冗談のように思うが、あながち冗談ではないかもしれない、と不安になり始めた。

何を食ったらこんな身体になるんだよ…!!あれか?肉か?肉というより脂か!?

「く……っ」

「おお、そんな抵抗をしたとしても無駄だ。諦めるんだなあ」

舌なめずりを間近で見、玲はもう我慢ならん…っ!!
と、腕に力を込める……だが、

ドンッッ！……！！

激しい地鳴りがし、ガタンと寝台が軋んだ。

「な、何だ……？」

不安げに辺りを見回す子爵の、振動で揺れた腹の下で玲は小さく唇の端をあげた。

……やっと来たか。

「一体これは……おい……！！兵士ども……これはどついで……！！……！！」

部屋の外で待機しているであろう兵士を呼びかけようとしたところで、玲は子爵に向かって思いっきり拳を突き上げる。めきよ、と顔面にめり込むように放たれた拳により子爵の身体は肉弾丸のような勢いで寝台から吹っ飛ばされて、ゴロゴロと回転しながら壁にぶち当たった。

「……………ぐっ、ぐっ」

相当な衝撃をもって壁に激突した男爵はそのまま唸るようにしつづきまっけてしまった。

玲はそれに舌打ちをしながら、すぐさま寝台から飛び降りて、子爵のもとまで行き、その腹を蹴りつける。

「ぐ、あ…っ」

唇から泡を飛ばしながら、くの字に身体を折り曲げる。それでも顔をゆっくりと上にあげて自分を蹴りつけた相手を睨む。

「き、きさま…何の、つもりだ…」

玲はそれに答えないまま、ただ冷たい目をして子爵を見下ろす。底冷えするような灰紫の瞳が濃い深海のような色合いを帯びているようにも見えた。

それを綺麗だと場違いなことを考えながら子爵は玲を睨みつけた。

玲は腰をかがめて相手と目と目の位置が近づくようにする。近くなつた互いの瞳に相手がうつりあうが、子爵にはそれを確認する暇さえなかった。

ちりちりと肌を焼き尽かさっぱりに籠る殺気。

その殺気は子爵から血の気という血の気を何もかも奪っていきそうなほどに鋭い。

獰猛な肉食獣が可愛い子猫ちゃんにすら思え、子爵のべったりした肌から震えるように汗がしたたり落ちた。

「やっと来たかあ…おっせえんだよ、あいつ」

ポリポリと頭をかきながら、面倒くさいとばかりに髪飾りを外す。

肩に届かないほどしかない黒髪が、少しばかり跡がついて四方に跳ねてしまっているのはご愛嬌だと思いたい。

適当に手櫛で髪を整えてから玲は、今だ訳が分からないと目を白黒させている男を一瞥する。

ビクリと肩よりも腹が先に揺れる子爵を蔑むように見下ろしながら、玲はその顔に自分の顔を近づける。

「さあ……て、とうとう年貢の納め時ってやつだな」

「な、何のことだ!」

「何のこと? そんなの、薄々てめえで感じていると思うけど?」

意地悪く笑ってやると、子爵のなけなしのプライドが奮い起こされたのか勇ましくも玲を睨みつけ、唾を撒き散らしながら叫ぶ。

「訳が分からん! !なぜこんなことをする! 貴様、自分の立場が分かっているのか! ?」

早く起こせ! と、ばかりに怒鳴り散らす。しかし、玲は耳を小指でかきながら聞いているだけ。
いや、聞いているかすら分からないものでもあった…それがさらに子爵の怒りを煽る。

「おい、聞いているのか! 儂の商品となるくせに、そんな真似を…」

……くはっ！」

「誰が商品だつて？」

グリグリと腹肉を踵で踏み付ける。これでピンヒールなどというものを玲が履いていれば、また別の趣向のほにやららになっただけだが、今は踵なのでセーフだ。セーフに違いない、と玲は踏み付けている間に考え込む。

くだらない問いを考えている間にも子爵は腹にかかる圧迫感に苦しげに唸る。

だが、玲はそんな子爵など目もくれずもう一度蹴りつけてから子爵の脱ぎ捨てた服の懐にある鍵の束を物色し、うちが空かないからと束ごと鍵を拝借することにした。

「こんなに鍵あんのかよ、めんどくせーなあ」

ぶつぶつ呟いていると、背後でゲホゲホと圧迫されていた腹を支えるようにして子爵が立ち上がるうとしていた。

「げほっ……お前、儂に逆らうとどうなるか、分からないなら教えてやる……」

「はっ、どうかの古くせえドラマじゃあるまいし、んだよその台詞は」

「ゲホゲホ、…兵！！おい、お前たち、何をしてる！！早く入ってこいつを地下に閉じ込めておけ！！」

「へえ、地下ね。そんなところもあったのか…たく、この豚は叩けば叩くほど色んなもんが出てきそうだぜ」

はああ…と溜め息をつき、玲は今だ兵士を呼び続ける子爵を見る。

「兵！！早くこいつを地下に…！！」

「うっせーな」

「……………なっ！？」

次の瞬間には、いきなり玲の姿が子爵の視界から消える。

一体どこに！？と子爵が探す間もなく玲は子爵の後ろに回りこんで

その首に手刀を決める。
ズシン…と、静かではない倒れかたをした子爵に、何かと部屋の
前で待機していた兵士が入ってくる。

「ドルフェ子爵様、一体何が……………」

部屋を見渡し、そこに倒れる子爵とそれを見下ろす玲を発見して兵
の顔が一瞬だけ戸惑いを見せた後に「おい…」と玲に近寄ってくる。

「おい、お前。子爵様に何を……………!?!」

厳しく玲を詰問しようとしていた兵は直ぐに驚愕に表情を歪める。
目の前からいきなり掻き消えたと思った…というのは勘違いで、ふ
わりと羽根が生えたかのように宙を舞う玲につい見惚れる。そのま
ま柔らかく、兵の前に着地した玲はにっこりと唇を上にあげる。
玲の身に纏う衣服もさながら女神のようで、”男”だという認識
もしばし忘れてその姿にボウツと頬を染める。
短いけれども艶やかな黒髪に、光加減によっては濃い藍にも見える
灰紫の瞳と、それを縁取る長い睫毛。白い珠のような肌の瑞々しさ
に、ごくりと喉が打ち震える。

玲は惚けたように玲を見下ろす兵の目を真つすぐに見つめながら人差し指を自身のふっくらした唇にあてがう。

それは”秘密にしてね？（ハート）”の必殺ポーズ。

ズゴツ！と、激しい精神衝撃に名もない兵士の男は、目を見開いて固まる。

玲は必殺ポーズを続けたまま、その唇をゆっくりと動かした。

「目を閉じて」

……………固まること数秒。兵士の男は条件反射ですぐさま目をつむじた。

ドキドキと騒ぎ立てる心拍音を静まれ静まれ！と抑えながら、待つこと……………数十分か。

何かおかしくね？と感じ始めた兵士は、そろそろとまぶたを開き…

……………

部屋には、伸びている子爵以外に誰もいなかった。

「意外と使えるんだな、これ」

兵士の男が疑い始めるより少し前、あの胸糞悪い部屋から出た玲は自分の人差し指を見つめた。

”まーったく、あんたって子は女っていう便利な性別を利用することもできないの？いーい？男はたいてい女からの《お願い》に弱いよ。だから、こうやって…そう、少し首を傾げて上目遣いにするのがポイント…って！！それじゃあ、ガンつけてるみたいになるじゃない！そうじゃなくて、こうよ。こう。…そうそう、は？意味が分からない？ばっかねえ！。意味が分からなかるうが何だろうが使える有効な手段は使うものなのよ。お分かり？あんたも、磨けばなかなか良い女になるんだから覚えておきなさいよ。そして、いつか使える時に使いなさい。…いいから！！どんなもんでも覚えておいて損はないのよ！！だいたいね、私の娘なんだから、それくらいできて当然なの！ほら、もう一回やってみなさい！いつか絶対使える日が来るからー…”

あの時は、こんなもん使う時なんか死ぬまで来ねーよ。と悪態づいていたが…まさか使う日が来ようとは思わなかった。

「母さん…」

浮かぶのは、自分が本当の母親だと思っていた母親のこと。

黒く、ピッタリと豊富な身体に馴染んだスーツを着こなし、世界を飛び回っていた豪快が服を着て歩いていたような女^{ひと}…。

ニカツと歯を見せて笑う姿や、ある日突拍子もない説教（女はいかにして女と成り得るか云々など）を仕出すことが、まるで過去の思い出のように蘇る。

「…………絶対に帰る方法を探してやる……」

ボソリと囁いた声は、そのまま小さく、しかしはっきりとその場に響いたー…

23・突撃〇秒前？

しばらく廊下を走っていた後、目の端にあつた扉の中へと駆け込む。

「何だお前！！」

「うおっ、やべ！……じゃなくて、ラッキー！」

駆け込んだ部屋には、数人の身なりの良い男たちが中央のテーブルでカードゲームに興じていた。

男たちは突然部屋に乱入してきた玲に驚いていたが、玲はすぐに行動に移す。

叫び出して騒がれる前にしとめようと、一気に駆け出して男たちの腹に拳をめり込ませて行く。

一人だけ、レイピアと呼ばれる剣を向けてきた男もいたが、玲が三人の男たちを矢継ぎ早に潰して行くのを目の当たりにしているせいか、向けているレイピアが小刻みに揺れていた。

玲はそれを一瞥すると、右足を軸にしてレイピアを持っている手の甲を狙うように左足を薙ぐ。

「うあー！！」

レイピアが宙を舞うようにして男の手から離れる。

手の甲を抑えて呻く男の隙を逃さずに、玲はそのまま男の懐に身を滑り込ませて鳩尾に拳を入れた。

声なき呻きを出しながら、男が地面に倒れ、玲はおもむろに右手を突き出し…ちよと宙から舞い降りてきたレイピアを掴んだ。

一部始終をザイアスが見ていたら「さすが師匠！！」と狂喜しただろつ流れを、あいにく見ている者は誰もいない。

「…さて、こいつらは一体何なんだ？」

身なりが一般人とは違って、良い仕立てのようだ。ならば、貴族だろうか？

玲は「うーん」と首を傾げながら男たちの懐を物色する。

「うわ、金細工の時計じゃん。高そ〜…」

どれどれ、とさらに物色。

ここで追いはぎのようだとか微かに頭の中で思ってしまったが、そこは……考えないようにしておこう。

「んん！？すっげ……この財布、パンパンに膨れてるし」

爆弾か！？と突っ込みたくなるほど、膨れ上がった財布。しかも四人とも似たり寄ったりぐらいに財布の中身が豊満になっている。

「さすがに中身を見るわけにも行かないしなあ……」

試しに財布を振ってみると、何か小さい紙がヒラリと落ちる。落ちたんだから見て構わないよな？と一人で確認した後、すぐに紙を拾う。

紙に描かれているのは、《37》という数字のみ。

「何だ、これ……？」

ひっくり返して見ても、やはり書いてあるのは数字だけだ。

「つまらねー…てつきり秘密文書かと期待したのによ」

遊園地の整理券かよ。と嘆息したところで、玲はハツと顔を上げる。

「整理券…？まさか…」

玲は急いで他の三人の財布も調べてみた。

そして、三人とも同じように数字だけ書かれた小さな紙を持っている。

「もしかして、”売り”の会場はここか？」

金をたくさん持った身なりのいい男たち。おそらく、この数字が書かれた紙は、整理券と考えて良いだろう。

あの糞子爵が女の奴隷売買を行っていて、部屋に閉じ込められていた少女たちがその”商品”。そして、妙に金を持った男たちと数字

の書かれた券。

導き出す答えは…「ここが」売り」の本拠地とされていること。そして、それが正しいなら……

「一気に潰せる」

玲は一人呟きながら、だからこそサラサが玲にあんなにも”邪魔をするな”と釘をさしてきた理由が分かる気がした。

サラサたちは、あの攫われた少女たちだけでなく、この子爵とそれに関わって売買に携わっていた腐れ貴族たちも一網打尽にするつもりなのだ。

「なるほどな…じゃあ、あいつらはもうここに来てるだろう」貴族”も把握済みなのか…」

カルデイ工家がどこまで調べをつけていたのかは分からないが、ここまで調べて計画していた組織があるのを見ると、自分の領地で行われていたこの行為を知らないというのはさすがに怠けすぎている。

しかし、まあ、あの公爵に限ってそれはないだろう。

見た目は優男風だったが、あの目は…鋭い鷹のように賢く狡猾な色合いをもっていた。

それを考えつつ、玲は一癖も二癖も厄介で面倒な兄弟たちを思い出しながら嘆息する。

ザイアスに伝言を頼んでおいたが大丈夫だろうか…

ディアルたちの過保護っぷりには辟易するばかりだ。だが、あの構い方はあっちの世界で、あいつらと共に過ごしていた日々を思い起こさせてひどく懐かしく感じてもある。

「……………はあ」

一つ溜め息をついてから、玲は自身の姿を眺める。決して…もう二度と着ないであろうこの姿。

あの兄弟たちに見られてしまったら、エロ豚子爵は即効地獄に蹴落とされ、骨の随まで恐怖を刻みつけられるだろう。

あの豚はどうなっても構わないが、あの何しでかすか分からない奴らが半狂乱になったのを見るのも、さらにはそれを宥めるのは骨が折れるに違いない。

「……………着替えよう」

しかし、この部屋は無駄に広さがあるくせに待合室みたいなものなのかイスとテーブルと娯楽用品しかほとんどない。クローゼットがあれば適当な服を失敬できるのだが…見当たらないのならば仕方ない。玲はだらしなく伸びている男たちの一人一人を見て、男たちの中ではそれほど体格が良くない男の服を眺める。

「これにするか」

――――

「フィアネリーナああ…」

「いい加減うるさいよ、ディアル兄さん」

膝を抱えながら”フィアネリーナ”と呟き続ける長兄を見て、ノイドグレイアとイアンリードは呆れたように視線を交し合わせる。

【怜悯な美貌をもつカルディ工家次期当主】と、サロンの令嬢方に噂されるディアルとは全く似ても似つかない。というか、このような情けない姿を見るようになったのはひとえに今まで行方不明だった愛しの妹が我が家にやって来てからだだった。

「フィアネリーナああ…私は…私は、ああああ……」

こんなのが王家にも覚えめでたいカルディ工家の次期当主だとはなあ…と、ノイドグレイアは冷めた目でそれを見ていた。だがノイドグレイアはディアルほど取り乱してはいないが、可愛い妹のことが心配で心配で堪らなかった。心配しすぎて剣を振るっていたら、たまたま剣に当たった木が折れてしまった……後で、弁償しなければ。

「フィアネリーナ…大丈夫…かな」

いつも…例え家族であつても人の事に興味の一欠けらもない双子の弟…イアンリードも、妹に関しては別らしい。あまり表情が変わらない顔に一抹の不安を過ぎらせている。

「大丈夫だよ、きつと。だいたい、大丈夫じゃなかったら…許さな

いし」

ねえ？と、後ろに控えていたカルデイエ家専用騎士に声をかける。彼は青ざめさせていた顔をコクコクと忙しなく上下に振る。

名前は確か、ザイアスといったか。フィアネリーナの暴走を間近にいなから止められなかった馬鹿野郎…。

今後は王家の騎士だけではなく、自家の騎士の教育も一から手をつけたほうがいいかもしれないな。と、天使のように柔らかい、人の良さそうな顔を黒く歪めながらにんまりとノイドグレイアは微笑んだ。

それを見て、さらにザイアスの顔が真っ青を通り越して真っ白に染まるが…そんなのは気にしてなどいなかった。

「ノイド兄様、ザイアスをあまり虐めちゃだめですよ。彼は姉様と仲良しの騎士なんですから」

まだ声変わりをしていない少年の声がして、ノイドグレイアはそちらのほうに顔を向ける。そこに立ってたのは末っ子であるアルティスだが、その姿はいつものソレとは非常に異なる。

「何だ、アル。もう”姫ごっこ”はやめたのか？」

「姉様の一大事にあんな馬鹿らしいことさせるつもり？それに、
姫ごっこ」は兄様たちが勝手にさせてたからじゃないか」

愛らしい天使のようだと評された顔はそのままだが、いつもより好戦的で生意気そうな印象を受ける。さらに、ふわふわと腰まで下ろされていた髪は耳の後ろ辺りで短く揃えられていて、着ている服もドレスではなく少年が着るようなシャツに短パンというラフな格好だった。

少年のような姿をした…否、本来の姿に戻ったアルティスは、ふう…といつもより短い自身の髪を撫でつける。

「ああ、もう落ち着かないなあ。この格好…」

「その姿を見るのは本当に久しぶりくらいだね。フィアネリーナが帰ってきた時点で、元に戻すのかと思っていたけど…」

「タイミングがなかったんですよ、タイミングが。それに僕は別に”妹”のままが良いですからね。だって、姉様も”妹”になら随分と気にかけてくれようとしてるみたいだし」

「アル…カルディエ家の末弟が女装癖だと言われたら最悪だろう」

「こんな癖がついたのも、姉様がいなくて寂しがつてた兄様たちが戯れに小さい頃から時折ドレスを僕に着せては楽しんでたからでしょ？それなのに、そんなふうに言われるなんて心外ですね」

にっこり、と微笑む顔は”アルティス姫”そのもの。

しかし、その笑顔の裏にはとんでもない悪魔が潜んでいるのをノイドグレイアは知っている。

だから、それについてはもう触れまい。と頭を振った。

ふと、ザイアスが目を丸くしてアルティスを見ているのに気づいた。そして、彼が”アルティス姫”を”姫”と思っていたことを察する。

「何だ、君も知らなかったんだな」

「は…！？いや、え？アルティス姫が…ええ…！？」

どうやら混乱しているらしい。そろそろ”合図”が来るといつのに、こんな調子で大丈夫だろうか。

アルティスといえば、驚くザイアスなど無視して遠くにちらちらと見える”目標”に目を眇める。

「あそこに姉様がいるんですね…大丈夫かな、姉様…」

姉様に何かあれば皆殺しにしてやる…と、物騒なことを呟くアルテイスの横でイアンリードも小さく頷いていた。

白衣の中に潜む”劇薬”が今か今かと出番を待ち構えているのが見えるようだ。

「大丈夫に決まっている！！ああああ！！フィアネリーナ！待っている、すぐに助けに行くからなあああ！！」

走り出しそうになるディアルの首根っこを掴みながらノイドグレイアもハラハラと”合図”を待つ。

バタバタと暴れるディアルを抑えつけながら、この邪魔な兄を少しでも大人しくできないのか？と考えたところで、複数の馬がノイドグレイアたちが潜む野営地にやってくる。

馬に乗っているのは、ノイドグレイアたちが要請したカルディエ家の騎士たちだった。

オルギードやアルカートを先頭に、精鋭と各地方に名を連ねるカルディエ家に仕える騎士たちが夜の闇と共にひそやかにディアルたちのもとに集まる。

ディアルも騎士たちの姿が視界に入ると、先程の情けない姿はどこへやら…とばかりに背筋を伸ばして、その美貌に一切の崩れを見せない。

変わり身の速さが一流…言い換えれば、仕事時のオンとオフがあからさまなほどはつきりとしているディアルに内心で感心しつつ、ノイドグレイアもディアルと一緒に早馬を飛ばしてきた騎士たちに労いの言葉をかける。

「よく来てくれたな、お前たち」

「は、若様がたの危急の知らせと聞けば我らが騎士団に異論の余地はありません」

へらへらとしたオルギードも仕事の時は、大変頼りになる男になるのをディアルもノイドグレイアも知っているからこそ、それに対して鷹揚に頷く。

そして、オルギードたちに”作戦”を語るのをディアルに任せて、ノイドグレイアはそつと野営地よりも少し離れたところにある小さなテントに向かって歩く。

「兄様、どうしました」

「ああ…」彼”に、騎士たちが来たことを伝えてくるよ”

「分かりました。僕はイアン兄様と一緒に合図が来ないか見てます」

頼んだよ、と伝えてからノイドグレイアは足早にテントに向かう。
二つ、三つあるテントのちょうど中央にあるそこへ行き、テントの
前に立つ騎士たちに挨拶をする。

「ご苦労、お前たち、隊長は中にいるかな？」

「は、隊長殿は中で身体を休めておられます」

「そう、じゃあ問題ないな」

ノイドグレイアは慣れた様子で、ひよい、と幕を開けてテントの中
に入り込む。

「隊長、僕の家のお優秀な騎士たちが到着しましたよ」

「……………そうか、分かった」

短く得られた返答もノイドグレイアにとっては馴染みのもの。
そして、目の前の”世にも稀な美貌”を持つ彼を見て、ノイドグレイアは小さく溜め息をついた。

「わざわざ貴方が来るのを知っていれば、こんな手間暇をかけなくて済んだんですけどね…」

「…俺たちがこれを調べていたのは知っていただろう」

「知ってはいましたけど、まさかここに本拠地を構えてるなんて…、連絡の一つくらい下さいよ」

「連絡をしようとしたが…仕方ないだろう」

嘆息する姿も彼がすれば、芸術の神に愛されたのかと問えるほどに美しい。

なのに、自分の美貌にとことん無頓着な彼に、ノイドグレイアは呆れるより他ない。

この世界では、大切な妹の夜闇の髪色と同じくらい珍しい白銀色を宿した髪を肩より少し下まで伸ばし、それを無造作に首の後ろで引っ詰めているのも妙な色気があり、碧の瞳は深海の海よりもなお透

明感があり、うっかりそれを見つめてしまえば惹き込まれてしまいうようになる。

女よりも白磁のような肌をしながらも決してひ弱には見ええず、むしろ他のどの男たちよりも引き締まった、惚れ惚れとしてみたいくなる身体をしているのを知っている。

共同の風呂に入る時に、彼を見て溜め息をつく部下たちにノイドグレイアはいつも苦笑して慰めているのだ。

「すみません、隊長。妹が先走ってしまっただけで…」

「全くだ。…深窓の姫君と聞いていたのだがな、貴様の妹とやらは」

「深窓の姫君とは…僕も本当なら籠の中の鳥のように大切に閉じ込めておきたいくらいなんですけどね」

「貴様にそれだけ言わせる妹か…妹がいたことも俺には初耳だったか？」

「僕たちの大切な”姫”ですから」

隊長は、ふうん、と呟いた後は興味がなさそうに顔を背ける。

「作戦遂行も大切ですけど、僕らは妹を無事に助け出すことを優先させますからね」

「……………副隊長だろ、貴様は」

「隊長がいるからいいでしょう。それに、僕にとっては妹は何よりも変え難い存在なんですよ」

「……………好きにしる」

長い睫毛に縁取られた碧の瞳が閉じられ、ノイドグレイアは微笑みながら静かに頭を下げてテントから出る。

「…待っててね、フィアネリーナ」

すぐに、助けに行くからー…

24・突撃1（前書き）

前話で書いた”隊長”の容姿を少し変えました！

24・突撃1

「右よーし、左よーし」

左右確認をしてから、そつと戸口に身を滑らせ廊下に出る。

部屋の中には、即興で作った縄で縛りあげた男たちがいたが全員漏れなく気絶していた。

「案外バレないもんだな」

最初に入った部屋で”借りた”服は少しばかりブカブカしていて身体には合わないが、あの吐き気がするような衣装よりはマシだった。あの時調達したお面をつけて暗躍を繰り返すが、”自分”がやっと”己”に変わった気がして血がたぎっていくのを感じていた。

この緊張と緩和の入り乱れる中で生まれる研ぎ澄まされた五感と、それを感じることで得る感覚は一度どっぶりつかると忘れられない心地よさだ。

”レイ”として、あちらの世界で名を馳せた(らしい)時も、こういう感覚に陥る時が一番自分らしくいられるようで好きだった。

「さて…と、やっぱりこは”売り”の会場だったみたいだな」

先程の部屋の男たちが持っていたのは、やはりあの数字が書かれたカードだった。

懐にはさらに何枚も同じようなカードがあり、破り棄てたい衝動に駆られるものの、重要な証拠になりえるかもしれないと渋々衝動を抑えている。

あちらにいた時も、”そういう”界限に殴り込みをした時もあつたにはあつたが、やはり嫌悪感は拭えない。

無造作に懐にカードを入れてから、廊下の左右にずらりと並ぶ部屋の扉に耳を澄ませる。

人がいなさそうならば他の部屋に移り、そして微かにでも人の気配がすればその横の扉に入り込んで、バルコニーから侵入し……証拠を奪う。寝転がる男たちの扱いについてはサラサたちのお仲間というやつに任せてしまおうと、一応縛りつけてはいるが放置にしてある。

サラサは邪魔な動きをするなと牽制していた割にいつこうに姿を見せない。

おそらく、先程の爆発騒ぎの際に彼女の仲間と合流したのだろうと玲は検討をつけていた。

少女たちの監禁場所までの道筋は、おおよそ把握してはいるが今は証拠集めと、その”集団の関係者”を割り出すのも先決。

この感覚が、やっぱり一番馴染み深いとは……俺もまだまだ抜け切れてねえんだな……

苦笑しながらも頭は妙なくらい冴え渡り、警察犬よろしく証拠を次々と上げていく。

違法薬物、違法売買、奴隷市場のメンバーズカードなど。この文字はなぜか読めるようになっていたのが幸いしているからか、どれが証拠なのかの判別もお手の物だ。

もう懐がパンパンになりそうなほどで、再び二度めの大きな爆発音が聞こえる。

爆発音ばかり響いてるけど、一体何をしているんだ…

ぼわんと頭に浮かぶのは、何日間か前に会った兄妹たち。

あいつらなら何かやらかしそうだけど…、サラサの仲間とやらもいるらしいしな。

廊下でのバタバタと走り回る音も先程よりは随分と慌ただしくなっているようだ。

うむ…と、顎に手を添えながらしばし熟考したあとに玲はバルコニーの手摺りから、上へ上へと登っていく。

脅威の身体能力あつての命綱なしの行動だが、それでもひやりと肝を冷やす場面はいくつかあった。

「よっ…と」

サラリと風に揺れる前髪を鬱陶しげにあげる。
自分の髪は今、見慣れぬくすんだ灰色に染まっていた。

「この色間違っ たかなあ…」

子爵の部屋にある整髪料みたいなものを使ってみたのだが、こんな鼠色になってしまったのが口惜しい。
黒髪が珍しいというこの世界では、黒髪だと動きづらいと判断したのだが…もう少し色にはこだわってみたかったなあ。と玲は小さく溜め息をつく。

イアン辺りに聞いてみるか…

頭の横にかけた猫のお面を正面に戻し、突き出た屋根の上に身を躍らせる。

「おー…」

眼下に広がる光景は、玲がよく見ていたものと似ているようで異なっていた。怒声を上げながら侵入を防ごうとする人々と、それを押し退けていこうとする甲冑を着た騎士のような人々。

手に握り、煌めく銀色の光が指し示しているのは現代っ子である玲には馴染み深くない長剣だ。

カキンカキンと金属が打ち鳴らされる音を聞きながら、玲は眼下に視線を走らせる。

「ザイアスとかいるのか…？つか、ぜんっぜん分からねーし」

人の顔は見慣れないし、何よりも今は夜の星月が瞬き始めた時刻をとうに過ぎている。

どっぶりとした暗闇の中で、人を判別しろというのは無理なことだった。

「んんー…？あれって…カルディエ家の…か？」

遠くに目を凝らすと、確かにカルディエ家の騎士たちがよく着る深

緑のマントのはためきが視界に入る。よくよくその近くを眺めていれば、なんとなくだが見知ったような男たちがいるような気がする。

「……あ、あれってカルサマかな。…あれが…ドルク？…あ、アルカートじゃん…」

見知った眼鏡の副隊長が剣を容赦なく振るう様を眺めながら、こんな時とはいえ少しだけ面白くなって、傍観者気分のまま、しばし視線をぐるりとその辺りに巡らせる。

すると、一際動きが機敏でキレのある空間があり、そこではドルフエ子爵の警備隊たちが蛛の子が散らされるように薙ぎ倒されていた。

「…ノイドじゃん。へえー…さすが王宮ってところで騎士やってるだけはあるな」

その素早さやキレの良さは遠目から見ても抜群に群を抜いている。

一振りでも何百人もの敵を…云々、なレベルではないがそれに近いくらい警備隊では全く歯が立っていない。

歴然とした力の差を感じているのかノイドグレイアの周りには警備隊の腰が憐憫を向けたくなるほど引けている。

恐らく、あの近くに行けばノイドグレイアの殺気をひしひしと感じる羽目になるのだろう。

ご愁傷様。

と、冷たく心のうちで輪唱してから、ふとピリッと肌に纏わり付くような殺気を感じた。

”あるべきもの”というよりは、”あるべきだったもの”という意味を含めて懐かしく、または自分のうなじの毛が逆立つほどの殺気にはなかなかお目にかかったことはない。

懐かしさと沸き上がる好奇心により、玲は殺気が感じられた方向に視線を向けた。

どこから……？

視線をカルディエ家から離し、右に滑らしていくと……またもピリッと産毛が逆立つような殺気を感じた。

その一角に注目し、そこには円状に多くの警備隊が失神しているのか何なのかは判断しにくい。が地に伏していた。折られ、飛ばされた剣が地に突き刺さっているのはまさしく”戦場”という名に相応しい風景。

しかし、まるで台風そのものの襲撃にあったかのような惨状にさすがの玲も怖気のようなものが背筋に走る。

「一体何だつてこんな…」

眩きながら、その惨状を引き起こした”台風”の中心を見遣る。ちようど”台風の目”の位置に立っているのは一人の男。

白雪を切り取り写したかのような白銀の髪を風にふわりと靡かせ、小さな風を巻き起こしながらも常人の目では追いつききれないほどの迅速さで手にもつ異様なほど長い剣を振るっていた。

カルデイ工家とは違う…おそらく緋色のマントを肩に斜め掛けしながら、彼はゆつたりと、しかし遅いわけではなく、その歩みを進めている。

遠目で、しかも夜目なことあつて正確に判断はできない（異世界に来てから玲の視力もレベルアップしたようで、普通の人間よりは夜目が効くようにはなっているが）。

ただ、その顔がディアルたちと同等、もしくはそれ以上に整った顔立ちだというのは伺えた。

長身、容姿淡麗に加えて、剣の扱いはおそらくノイド以上。

こんな超人的な奴がいるのかと驚きつつ（今の玲も十分、超人的な面は多々あるけど）、さすがは異世界だなー、と大いに納得する部分もある。

この世界に来て、最初に出会ったのがあちらの世界では考えられない伝説の獣や二足歩行の動物たちだ。

彼らがいるなら、もうこの世界には何でもありだ。と思うほうがよっぽど適している。

柔軟というよりは、ほぼ達観した視点で玲は白銀の男を観察することにした。

カルデイ工公爵夫人も珍しい銀色の髪をしていたが、さらに白に近い白銀の髪は普通に綺麗だと思える。

この世界では基本、茶系や金系、もしくは赤、蒼系統の髪色が多いらしい。銀は時々いるくらいで、黒はさらに珍しいと聞いている。

日本人は染めれば何色にも変色できるが、所詮”和”の日本。

基本は黒髪。そのアジアンテイストさは、外国人から見れば”神秘” ” 清纯” ” 大和撫子” など多様な見方があるらしいが、この世界ではそんなもの珍しさの上をいく貴重さで見られるらしい。

あの糞子爵も、玲の黒髪をやたら撫でては感嘆の溜め息をついていたし…… 思い出すだけでも玲にとっては吐き気を伴う暗黒の記憶ではないが。

頭を左右に振り、気色悪い感触を打ち消す。

話を戻すと、そんな玲でも白銀の髪という話は聞いたことがない。銀系統の部類に入るのだろうか？しかし、それならばむしろ白系統に入れたほうがいいような感じもする。

ほとんど白というと、爺さん婆さん特有の白髪のようにも思えるが、なぜか彼からはそんな年寄りくさは感じない。

どちらかと言えば、彼の孤高で気高い心根をそのまま表したかのように高貴な輝きを持っているような気がした。

白銀の男が振るう剣でまた一人、二人と警備隊が倒されて行き、そこには男のために一本の道ができているようだ。

あの男と俺だったら

どっちが強いかな……

むくむくと好奇心が頭をもたげるが、今はそれどころではないと意識を切り替える。

ただ、いずれ機会があれば手合わせを試みよう、とは心に誓った。

「サラサたちのリーダーは、もしかなくても多分あいつだよな。うん、あんな気を放ってる奴なんか他にはいないし」

カルディ工家と一緒にいるということは、互いに協戦をしているのは確かだ。

ならば、武力に関しては問題がなさそうだ。

ノイドもいるし、ましてあの白銀の男がいるならば滅多なことでは押し切られないだろう。

さて、自分はどうかするか…

サラサがどこにいるかは知らないし、ルフルが無事かどうかも心

配なところだ。

「後は、まだあそこに少女たちがいるかどうか…」

玲は手元のお面を指でくるくる回しながら、とある部屋のバルコニーに視線を定める。

幾重もの鍵をかけられたそれは、少女たちが監禁されている場所。これほどの騒ぎだ。

今は場外で防戦している警備隊でも、もう長くは持たないだろう。それならば、残りの場内にいる人間たちは何をするか…。

「逃走と証拠の隠滅…」

玲は、ふうつと小さく息を吐き出しながらお面をそつと顔に被せる。

何でいちいち被るのかというと……あれだ。隠密っぽいことしてみたいっていう子供の時の囁かな願望を体現してみただけだから、あまり気にしないでくれ。

誰に弁明しているかは知れないが、心の中で言い訳しつつ玲はコキコキと軽く準備運動をしながら、屋根の縁に手をかけて身を踊らせる。

命綱なしの危険な行為（良い子は絶対に真似しないでね？）ではあるが、そのまま手近なバルコニーまでジャンプする。

足に地がつく安心感を少しだけ味わってから、少女たちが監禁されているであろう場所まですむ。

ルフルたちのことが気にかかったが、彼女たちもただでは負けな言いと言っていた。

だから安心して玲のしたいことをしろ、と…

「女の子たちを安全な場所まで連れて行ったら、次はルフルたちだな」

彼女たちの行く末をどうすべきか。

実は少しだけ考えがあるのだが、果たしてそれが良いか悪いか、もちろん彼女たちにとっても良いか悪いかは判断できない。

ただ、あそこまで啖呵を切り、あげくに巻き込んだ手前、彼女たちの今後に妥協などするはずもないし、見捨てるつもりもない。

「……あんまり、変わらねーな。こっちも……あっちも」

独白のように呟かれた小さな声音は、眼下の喧騒によりそのまま掻き消されてしまった――…

25・突撃2

幾重にもかけられた錠を器用に外していきながら、玲は妙に部屋が静かなことに違和感を覚える。

おかしいな…

前は少しでも気配を感じたし、これだけの騒ぎがあれば彼女たちにも伝わってはいるだろうし…

そこまで考えて、ふと自分の予感が当たっているのではないかと
思い、すぐさま錠が外れた窓を思い切り蹴飛ばす。

「…いない」

開け放たれた窓から見えた部屋には人っ子一人いなかった。

ガラン、と人の気配が何もない部屋を一度見渡してからそこに降り立つ。

もぬけの殻と化した部屋には、あの少女たちを繋ぎ止めていた鎖が無造作に外され、あちこちに散乱していた。

逃がされた…にしては、

荒っぽすぎる。

鎖にはまだ真新しい血が少しだけこびりついていて、無理矢理外されたように見える。

館内に通じていた扉もほとんど開けっ放しで、そばには窓に付けられていたような錠が幾つも床に棄てられていた。

一つの錠を手にとってみると、そこには薄汚れた足跡らしきものが幾つもついていて、手で払ってみると指にも微かに汚れが付着する。それを指で擦りあわせながら、錠を投げ捨てた。

「先を越されちまったか…」

窓の外からは今だに激しい攻防戦が繰り広げられているらしい。ガチャガチャと騒がしい金属音にうんざりしながら、玲は廊下に出ながら辺りを確認する。

もともとこの部屋は端っこにあつたので、左側はすぐ壁で塞がれていて廊下は右にずっと続いていくしかない。

迷わず右に行こうとして…ふと、微かな…本当に微かな隙間風が背中をさらう。

振り向くが、そこにあるのは一面の壁だけ…。

「まさかなあ〜」

…とは言いつつも、怪しいものは見過ごせない。壁に近寄りトントンと拳で軽く叩いていく。
何回か壁を叩いていくが、どの場所で叩いても同じ音しかしない。
諦めて右に行くか…と思いつつ、壁をトントンと叩くとガコンツと壁の一部分が奥のほうに減り込んでいた。

「おおっ！」

ゲームのPRGか、とツツコミながら目の前でガタガタと音を立てながら新たに組み立てられていく”道”を見つめる。

隠しダンジョンが現れる様は、まさに現実としてはありえないが、もうこの世界に来たら何がありえないの？てか、ありえないものって何よ？みたいな感じになりつつあるから、気にはしまい。

ようやくダンジョンが出来上がり、そこはやはりゲームの世界に存在するような抜け道らしい。そこから頬を撫でるように伝わる風から、外に通じているのだとよく分かる。

そつと耳を澄ませてみるが音はしない。

ならば、少女たちは結構前にここから連れ出されたた可能性がある。間に合うか、否か…

そんなのはただ一つ。

「間に合わせるしかねえだろ」

玲はそのまま外に通じる抜け道へダイブすように躍り出た。

――――

「次！」

短い声と共に流れるように剣を振るいながら、近衛騎士団長であるオラディエル・クルセラードでは、鮮やかな白銀の髪を柔らかな風に乗せる。

戦場とは場違いな幻想的な光景に、敵となる衛兵たちはボウとその姿に見とれている。

その神とも見まごう端麗な容姿と、凄まじい剣捌きと相まって人外とも呼べるほど圧倒的な存在感と威圧感をもって、次々と衛兵たちを地に臥せさせる姿は軍神と呼ばずして何と呼ぶのか。

容姿に気を取られ、かつ目にも止まらぬ剣捌きに翻弄されていく彼らをオラディエルの部下たちは「あーあ」と少しだけ同情しつつ、慣れたように剣を振るっていく。

”白銀の軍神”との異名をもつ上司が屍の道を作り上げていく様を見ながら、本当に人か！？と問いたくなるのはもう諦めた。

今はただ、兼ねてから狙っていた獲物を狩るのが彼らの使命。

一心に剣を振るいながら、獲物が救う屋敷を目指す。

戦闘がだいぶ治まり始めてから、前方でヒラヒラと手を暢気にふる男がやってくる。

「隊長。南方面の制圧は終わりましたよ」

マントにこびりついた血を丁寧に払いながら、オラディエルに話しかけたのはノイドグレイア副隊長。柔和で甘い面立ちからは想像できないが、一度戦闘モードに突入すれば、まさしく鬼神のごとく敵をちぎっては切り捨て、ちぎっては切り捨てるほどの猛者である。外見と中身のギャップが凄まじく、鬼畜な内面を知る仲間内からすれば”戦場の紳士”と女たちから騒がれているのは鼻で笑いたくなるほど。

女つてのは外見しか見てないんじゃないかね？と、女不信になるものが多数続出してさえる。

その元凶とも呼べるノイドグレイアは、軽く片手を上げてにこやかに微笑んでいる。

微笑だけならば、剣術なんて野蛮なものより女性とウフアハしながらダンスを繰り広げていたい（偏見）甘えた貴族のお坊ちゃんにさえ見えなくもないが、内に秘める獣が狂暴すぎてその微笑すら、悪魔の笑顔に見えるから不思議だった。

「そつちも終わったみたいですね。収穫はありましたか？」

「何も。こいつらがいかに腑抜け、墮落した生活を送っていたか分かっただくらいだ」

「僕もです。全く、カルディエ家の管轄下に置いてなかったとしても我が自領でこのていたらくとは…頭が痛いですね。一度、ここらの衛兵たちを鍛えておく必要がありますよ」

鍛える、とノイドグレイアが言った瞬間、近くにいた近衛隊の何人かが「うげえ…」と悲鳴を漏らす。

悪夢だ…悪夢がやってくるぞ…

隊員たちは自分たちが副隊長から受けた数々の訓練…という名の拷問を脳裏に思い浮かべて、げっそりと頬をやつらせる。

あの日々があるからこそ、今の自分達がいるとはいえ…よくぞ自分は生き延びてこれたものだと自身に喝采を浴びせたい。

始終、笑顔を浮かべながら鬼畜なメニューを告げていくノイドグレイアに何度ぶっ殺してやろうかと思っただか…

もちろん、寝首をかこうとした馬鹿もいたが…言っまでもあるまい。

とにかくあの日々は幾ら時が経とうとも忘れられるようなものではない。

静かに打ち震える部下たちに気付いているのか気付いてないのかは分からないがノイドグレイアはニコニコと楽しげだ。

「貴様の兄はどうした？」

「ディアル兄さんですか？あっちのほうにイアンというと思います」

けど…」

指をさした方向には緑色のマントをはためかせた男たちと、その中心に一際目立つ美貌の主が立っている。

いつも玲の前ではへたれ兄ぶりを示すディアルも、この時ばかりは次期領主としての風格が出てきており非常に頼りがいがあるのはノイドグレイアも認めているところだ。

横にいる銀髪的美青年は、せつせと負傷者に自身が作った滋養回復の薬を分け与えていた。

「さすがはカルディエの精鋭部隊だな。予定よりも早く終わりそう
だ」

「まあ、隊長率いる近衛隊と我が家が出れば事が早く治まるのは当たり前ですよ」

「だが標的はまだ捕まえていない。逃げられないよう包囲網は張っているが…面倒だ。終わらせるぞ」

「了解です。僕も早く大切に可愛い妹と楽しい実家暮らしを再開したいんで」

ウキウキとあからさまに楽しげな笑顔をしたノイドグレイアを見、オラディエルは端正すぎる顔をしかめて溜め息をついた。

「またそれか…。貴様もさっさと戻ってこい。仕事が溜まってるんだぞ」

「嫌ですよー。あんな書類くらい隊長が本気出せばすぐ終わるし、カルトにもしっかり任せてますし」

カルトとは、ノイドグレイア付きの秘書官みたいなもので、いつもノイドグレイアがオラディエルから押し付けられた雑務をさらに押し付けられている哀れな男だ。

ノイドグレイアたちは近衛隊という、本来ならば武官という立場を取ってはいるが衛兵たちの配置、各皆への人員派遣や食糧配布の取り決め…等々、時には文官のような書類整理をしなければならぬ。それが訓練外にも課されてしまう隊長や副隊長の負担でもあるが…秘書として付いている文官に投げ出したりもぼちぼちある。面倒なことは大嫌い。なノイドグレイアは時折、休暇という名の逃げをしていてカルトに任せっきりな部分は多くあった。元々、イアンリードほどではなくも頭が良いノイドグレイアにしてみれば、それほど大変な作業でもないが…何回も言うと、彼は面倒臭いのが嫌いなのだ。

「あれは面倒臭いんですよ。そんなのやってる暇があるなら妹とイチヤイチャします」

「…イチヤイチャする暇があるなら仕事をしろ」

えー、と顔をしかめるノイドグレイアに神をも凌ぐほどの美貌をもつオラディエルは美しい眉を器用に片方だけあげる。

「貴様がまさかそれほど妹を溺愛しているとはな」

「可愛くて可愛くて、本当に仕方ないです。やっぱり、本物の妹っていうのはこう…愛しさが込み上げてくるんですね」

ほんわりと柔らかく微笑むノイドグレイアの顔には、いつものような腹黒さなど一切なく純粹な慈愛しかなかった。

この男にこんな顔をさせるとはな…と、オラディエルは少しばかり”妹”に興味をもつが、それは慌ただしく近づいてきた少年により遮られた。

「ノイド兄様!!!」

ノイドグレイアよりもさらに女顔をしたふわふわの綿菓子のような短い髪をした少年が、焦りを含んだ声でノイドグレイアの名前を呼びながらかけてくる。

細身な少年…カルディエ家四男、アルティスを包む格好にも所々に赤い点がついていて、さながら戦場に舞い降りた天使のようでもあった。

「どうかした？」

落ち着きなよ、とアルティスの背中を撫でながら問うと彼は息を素早く整えるとオラディエルに礼をしてからノイドグレイアに向き直った。

「伝令…から、聞いた、ん、だけど！姉様が、いな、いんだ！」

「どっぴいっこと？」

アルティスの言葉に、ノイドグレイアの目に鋭い光が生まれる。

伝令、というのはカルディエ家の精鋭の何人かのことで、戦闘の隙をついて屋敷に秘密裏に送り、彼らに中の様子を探らせていたのだ

がそこで与えた指令として、

今回のターゲットである子爵の所在、それと彼が応じていた犯罪の証拠、人身売買に荷担した貴族、さらわれた少女たちの確認、そして連れられたカルディ工家の姫の奪還と護衛、を任せていた。

近衛隊からも人員が何人が送られていて、それがサラサたちの入っている所属部隊でもある。

指令とはいえ、ほとんどはサラサたちに任せ、カルディ工家では主にフィアネリーナの保護に尽力を注ぐようにしていたのだが、

「姉様が監禁されていたような場所もないし、足取りがほとんどないらしいんだよ。だから、姉様がどこにいるか屋敷中探しても見当たらなかったみたいなんだ！」

「…まだ、探し損ねている部分があるかもしれない。僕もすぐ行くから搜索を続けるよう言ってる」

「もうイアン兄様が探しに行ってる。ディアル兄様にはまだ言っていないけど…」

「ディアル兄さんには言わないでおこう。ここで騒ぎ立てられても困るし」

遠くには今だ騎士たちを先導するディアルの姿が見える。

むやみにフィアネリーナの詳細を言ってしまうと、すぐに取り乱し

てしまうかもしれない。

…そう考え、ノイドグレイアはディアルにはそれを伏せておくことにする。

殊にディアルはフィアネリーナにゾッコンラブなので、こんなことを言えば間違いなく彼は自身の持てる力の全てを使い、この一帯を端から端まで探しつくすに違いない。

別にそれでも構わないが、後処理が面倒だし、近衛隊たちがいる前でそのような暴走を次期カルディエ家領主がしたと見られるのはさすがにまずいだらう。

アルティスに先に行くよう促し（もちろんディアルには内緒で）、ノイドグレイアも周りにいる近衛たちに指示を出す。

「正門、裏門、全ての門に見張りを。後は、周りで少しでも怪しい気配がしたらすぐに知らせるんだ。いいね？」

いいね？に、どす黒いオーラを纏わせると哀れな近衛たちは脱兎のごとくそれぞれの持ち場に走る。

それをただ黙って静観していたオラディエルだが、背後から小さくカサカサと木葉が揺れる音がして、目にも止まらぬ早さで鞘から剣を引き出し、切っ先を音がしたほうへ向ける。ノイドグレイアもその動きに合わせるように素早く腰に下げた剣の柄の部分に手を添えて臨戦体勢をとる。

「誰だ」

「私です」

威圧感たっぷりに問うた声に答えたのは女の声で、その声には二人とも聞き覚えがあった。

「サラサか？」

「はい」

夜影にひっそりと佇む女は、オラディエル直下の配下で主に諜報部隊として働くエリートだ。主に彼らの情報源である彼女は、いつもながら無表情ではあったがどこか悔しさを滲ませた顔をしていた。

「先程確認しましたが、攫われていた少女たちが監禁されていた場所には誰もいませんでした」

「チツ、混乱の隙をぬって逃げだしたか。…追えるか」

「はい。隠し通路を見つけましたのでそこから追えば…」

「分かった。俺も追おう」

いつも笑顔など浮かべたことがないオラディエルの口元がうっすらと弓なりに上がる。

それを直視した部下たちは、顔を赤らめ、それからすぐに赤みがなくなり青を通り越した真っ白な色に変わる。

隊長が微笑みを…!!

明日はきつと朝日が出ないぞ！

馬鹿…っ、俺にはまだ妻と可愛い子供がいるんだ…っ!!

各々震え上がる部下たちはさておき、サラサはオラディエルに向かって「はい」と頭を下げる。

それから、サラサはノイドグレイアに向き直ると懐から出したものを手渡す。

「ノイドグレイア様。これを…」

「…っ、これは！」

手渡されたもの、それは馬車の中でフィアネリーナに渡したカルデア工家専用カードだった。

「これをどこで！？」

「隠し通路の手前に落ちていました」

それを聞き、ノイドグレイアは一つの可能性に一気に顔を青ざめさせた。

「まさか…。いや、だが…」

ぶつぶつ呟くノイドグレイアにオラディエルはサラサが手渡したも

のを改めて見遣る。

「これは、貴様が持っているものじゃないか？確か」

「そうですよ。でもそれは僕のじゃなくて妹のものです」

「妹の？じゃあ……」

「……ええ。僕も一緒に追わせていただきますよ。サラサ、案内を」

「分かりました」

風のように去っていく三人の姿を見ながら、部下のうちの一人の男が呟いた。

「奴ら（敵）……死んだな」

その言葉に、近くにいた何人もの部下たちは阿吽の呼吸で頷いた。

26・突撃3

「うえゝ…暗すぎて何も見えねえし」

隠し通路に飛び込んだのはいいものの、通路に明かりなど照らされていないはずもなく文字通り、真っ暗な暗闇の中を手探りで歩くしかなかった。

「あゝ…、ぼんやりとは見えるんだけどなあ…」

暗闇に慣れたのと、この世界に来てから格段に上がったスキルのおかげで意外にサクサク進むことはできているが、やはり明かりが何もないのは辛い。

拳げ句、この隠し通路は右へ進み、左へ進み、さらに左へ進んでから上へ行き、下へ行き…と一方通行ながらも入り組んだ形をしているようで、何度も階段につまづいてしまった。

「めんどくせえ…！！隠し通路なら隠し通路らしく、さつさと外に出るや…！」

悪態を尽きつつも、ここまで来たら前へ進むしかないと思いながら歩を進める。

じめじめした空気が肌を撫で、さらには新しくできた屋敷ではなかったからか黴臭さや埃っぽさが鼻腔をくすぐり、何度かくしゃみを

繰り返した。

「くしゅっ!…あー、ったく。少しは掃除くらいしてねえのか…」

とは言っても、隠し通路なのだから知っているのはこの屋敷の主かその血縁くらいだろう。

それならば、この隠し通路がほとんど使われず、かつ掃除されていないのは仕方ないことと言えば仕方ないことだ。
でも…と、玲は不機嫌そうに顔を歪める。

「隠し通路なんて面倒なもん使うんじゃないよ」

つか、使い道間違ってるね？

やましいことをしていないのに、誰かに狙われてしまった故の脱出…なら、まだ隠し通路が道徳的に使われているような気もする。しかし、やましいことをして逃げるための手段として隠し通路を使うならば、それは悪用という形でしかない。

「こんな面白いもんを、こんなことに使うなんて!」

ズレた怒りではあるが、それでも玲はこの屋敷の主への怒りを募らせる。

若干、歩みを早くしながら玲は力強く階段を駆け降りる。

今のところは下へ行くばかりだ。
しかし、外では爆撃なども使って派手にドンパチやっているようなのだが、ここでは音や振動は一切感じられない。
意外と強固な作りなのか…と、何気なく壁を撫でる。
すると…

「……………っ!？」

ガコン、と壁の一部がスイッチのように押される。

「は!？え、何だ…？」

戸惑いの声を挙げたが、それはすぐ掻き消される…ゴゴゴゴと言う低い音に。

たたり、と嫌な脂汗が流れる。

次第に大きくなる音に玲は、まさか…という想像を打ち消すようにして背後をゆっくりと振り返る。そこに見える、いや…微かな香りとして匂ってきた潮の香り…、これはもうアレだ。隠し通路にあった不審なスイッチ。それから潮の香りと何かが迫ってくるようなゴゴゴという音。

アレしか思いつかない。絶対にアレだ……………逃げよう。

「やべえええええええ!!？」

女子とは思えない叫びを上げながら、急ぎ廻れ右をして全力疾走。ほとんど階段を飛ばし気味で下つていくが背後から聞こえてくるソシの音は大きくなるばかり…。
ていうか、ほとんど近い。

「無理無理無理無理いいいい！！死ぬから！！絶対死ぬから！！！」

転びそうだ、なんてことは一切気にならない。

とにかく一刻も早くここから逃げ出さなければマジでデストロイ！！そんな気持ちしか今は思いつかず、玲は自分が出せる範囲のスピードで隠し通路を走りぬける…が、いくらパワーアップした能力があるとはいえ、所詮は人の力。
それが自然の力に勝てるはずなど……なかった。

「……………っ！！ぎゅあ！！！！」

ダイレクトに背中に当たった冷たい飛沫。
そして…

「ぎゃああああ…！！…ゴボッゴボッ」

そのまま雪崩のように迫った水の流れに玲は巻き込まれていった。

「ここまで来れば追っ手も来ないだろう…」

それを合図に、一目を憚びながら早足で歩いていた一団はほっと息をつく。

木の幹に寄り掛かったり、地べたに座り込んだりと思いつきの休息方法を取りながら、ふーっと額から流れる汗を男たちは拭い去る。先頭を仕切っていた男は今ももう遠くにあるであろう屋敷の方向を見ながら、ククツと喉を鳴らして笑った。

「あの馬鹿親子には腹立つこともあったが、良い金ヅルではあったな」

男が笑っていると近くにいた男たちも笑いが伝染したかのように、にやにやと頬を緩める。

実はこの灰色軍団（玲命名）はドルフェ男爵が雇ったならず者の一団だった。

警備隊だと言っていたのも全て偽りで、人身売買の”商品”となる少女たちを男爵のもとに連れてきていたのも彼らの仕業だった。

もともとは彼らが旅人の金品の強奪やら、女の誘拐などをしていたのを男爵が金で雇い、彼らを専属の護衛とし、さらには彼らの行いを”仕事”として自身の利益に繋がるように”商売”としたのだ。

彼らは、ドルフェ男爵の庇護の下、さらに勢力をつけて人身売買という商売に身をやつし、そしてその利の流れを見つけすぐにドルフェ男爵に代わる新たな雇用人を探し出した。

だから、男爵の屋敷が襲撃を受けた時にすぐに商品となる少女たちを連れて、以前に酒に酔った男爵から聞き出した秘密の抜け穴を使って外に出ることに成功した。

今、あの屋敷では男爵や人身売買に荷担していた他の貴族たちが捕まえられているところだろう。その間に自分たちは、さつさと次の拠点に移ってしまえばいいのだ。

馬鹿な貴族共はせいぜい、俺らが逃げるための時間稼ぎに利用させてもらっぜ。

地面に無造作に置かれている麻袋を横目に、ふっと口元を歪めて笑う。

幾つも並んだ麻袋は動くことなく、固まりとなってただ地面に横たわっている。先程までは、じたばたと芋虫のように動き続けていたのだが、少し脅しただけで大人しくなるのだから可愛いものだ。

「頭、俺この中身で遊んでみたいんですけどダメっすかあ」

ニヤニヤと下品な笑みを浮かべる仲間に、同じような笑みを浮かべながら「好きにしろ」と囁く。

「ただし、あまり遊びすぎねえようにな。大事な商品だ。使いものにならなくなったら意味がねえ」

なあ？と含みのある言い方に、周りで聞いていた男たちはこらえきれなくなつたかのように「違いねえ！」と笑いあう。

麻袋を担いだ男も、仲間たちの笑いに応えるかのように手を振りながら「用足しに行ってくる」と言いながら、茂みの中へと入っていく。

これから行われるであろう”遊び”に触発されたのが、数人の男たちもそれぞれ目をつけていた麻袋を担いで茂みの中へと消えていく。残った男たちは、「全く、あいつらは……」と呆れたように笑いながら、そつと茂みの向こうに耳を澄ませる。

「……なんも聞こえねーな」

「……ああ、あいつら、どこまで遠くでやってんだ？」

再び耳を澄ませるも、聞こえてくるはずの”遊び”が一切聞こえない。

少しくらい俺らにも聞かせろつての、と男たちが不満そうに顔を見合わせたところで「ぎゃああああ……」と叫ぶ声が聞こえた。

「何だ今の？」

誰かが呟いた瞬間、
茂みが一瞬だけ風に揺れた。

「みーつけた」

26・決着？

茂みから突如現れた”少年”に、男たちは驚く。

「何だ、お前……!!」

「何だ、だあ？てめーらのせいで俺は水浸しなんだぞ、こら。クリーニング代請求してやるうか？」

確かに少年…玲の姿は、どしゃぶりの雨に濡れたのかと思えるほどびしょ濡れだった。服や髪から滴る水滴が一向に止まらず、地面に幾つもの跡を残している。

「マジない。乾かす暇もねーし、疲れたし、耳に水入ってるし…
!あー…っ、くそっ!!」

ぶつぶつと文句を呟きながら、玲はその場で服の裾をぎゅっと搾る。水滴が地にぼたぼたと落ちていくのを玲は忌ま忌ましげに見つめると、呆気にとられたように自身を見つめる男たちを睨みつけた。

「見世物じゃねえぞ!!あんな通路通るくらいなら、正々堂々と正門から出て行け!!」

そしたら隠し通路の意味ないじゃん。

…というツツコミは誰の口からも発せられなかったが、玲は今だ男たちに怒り続けている。

突如現れた玲に呆然としていた男たちだが、玲が一人でいるのと、見た目的にひ弱で非力なのを見て取ると次第に余裕と落ち着きが生まれてきたのか、玲に睨みを効かせながら、玲を中心に円になるように囲む。

「お前、誰だ？」

リーダーである男が、玲の真つ正面に来て下から上へと玲を値踏みするように視線を動かす。

その視線はかなり不躰なものだったが玲はそんなことよりも男の言った言葉に眉を寄せた。

「誰、だあ？よくも俺にそんな口が叩けるな。テメーの面、^{つら}忘れてねえぞ。灰色軍団の親玉め！！」

灰色軍団って何だ…！？

玲を囲んだ男たちは一様に首を傾げたが、リーダーである男だけは玲を注視し、その顔に見覚えがあることを思い出していた。

「…ああ！まさかお前、あの爺に夜伽を命じられた男か」

「よ…!?!?…まあ、いい。思い出したか。テメーらがまさか賊だったとはな、町の警備隊に成り済ましてたのはあの糞豚野郎が差し金か？」

「ふっ、その様子じゃあ逃げ出したようだな、小僧。まあ、あんな襲撃をされちゃ、あの爺も”お楽しみ”をできないわけだが。…ああ、そうだ。俺たちはしがなただの山賊だ。あの爺に雇われてからは、警備隊つてのもやっていただけだな」

「そして今は山賊よろしく逃亡中…ってか。お宝を持ち去って…」

ちらり、と自身を囲む男たちを横目で見ながら言う玲に、リーダーの男は「そうさ」と笑う。

「俺たちはどんなに雇われても、どんなに腐っても結局は山賊なんだよ。あの爺の家は俺たちみたいなの野郎には笑えるほど性にあつた。貴族だか何だかだと威張り腐つてはいたがあの爺も所詮は俺たちと変わらねえ。金と欲が全て…だからなあ？」

「随分とちっぽけなんだな、お前たちの全てってやつはさ」

玲が冷たくハントツと言い放た言葉に、周りを囲んでいた男たちは目尻を上げて口々に玲を威嚇する。

中にはナイフを出して威嚇する者もいたが、玲は顔色一つ変えずにそれを見遣った。

普通なら怖面の賊に囲まれ、さらには刃物もまで出されたら怯えてしまうと思うが玲は”普通”とは違う環境を乗り越えてきた少女。刃物を向けられるなんて経験は一度や二度ではない。

ズラリと並ぶ男たちを鋭く見返しながらも、玲は落ち着いた様子で目の前にいるリーダー格の男を見る。

「お前らはもう逃げられない。さっさと投降すんのが身のためだぜ？」

「はっ。ふざけた事ぬかすんじゃないやねえよ。現に俺たちは逃げてきた。もう新しいパトロンも見つけてる。ただ山賊をやった時より羽振りが良くて、な？」

にやり、と人の悪い笑みを浮かべて男は玲を嘲笑うように視線をよこす。

「小僧も馬鹿だよなあ…。のこの俺らのとこまでやってくるなんてよ。どうせ、あの襲撃してきた奴らはお前の仲間だろ？」

「さあな？俺に仲間なんてのはいねえ。少なくとも、ここには…な」

「へえ…じゃ、今この場にいるのは小僧一人ってことか」

「ああ、そつだ。ここまでテメーらを追ってきたのは俺だけだよ」

玲が肯定すると、周りにいる男たちはますます笑みを深くして舌なめずりをしながら玲に一歩近づく。

「ますます馬鹿だな。わざわざ一人で来るなんて、愚かとか言いようがないぜ？」

「生憎だが俺は愚かなこと、無駄なことはいらない主義だ」

「なら、何でここまで一人で来た？周りを見てみるよ。俺たちとお前。どっちが馬鹿かは一目瞭然だ」

「ふんっ、数が多ければ良い、なんてのはもう古いな。俺が一人で来たか？そんなのは簡単だ。テメーらみたいな糞野郎をぶちのめすのは俺一人の力で十分だからなんだよ」

腕を組んで、いかにも余裕ですくという態度をしてやると案の定、血の気が多い山賊たちは怒りもあらわにしている。今にも襲いかかってきそうな一触即発の雰囲気になっていた。

「おい、あんま調子こくんじゃねーよ、ガキが。あの馬鹿子息たちを縄につけたからって自分の力を過信してんじゃねえのか？あの子息についてたのは俺たちん中でも下っ端の奴らだ。あれと同じように俺たちも考えてんなら…後悔することになるぜ？」

「後悔、ねえ…。そりゃしてみたいもんだな」

「…その言葉、後に引つ込めようとしても知らねえからな、、、やれ」

手をサツと振り、下ろされた合図に気色ばみながら男たちは玲に襲い掛る。

玲はそんな男たちをざっと見渡してから、ゆっくりと唇を弓なりにして…微笑んだ。

「…敵の力量を分かってから来るんだな、雑魚どもが」

ふわりと玲の髪が風に巻き上げられる。

それと同時に男たちは肌をピリピリと鋭い針で突き刺していくような異様な空気に包まれた。

「…っ」

男たちの足が、玲との距離まで1メートルあるかないかのところで立ち止まった。各々を取り巻く突き刺すような空気に、自然と身体が縛られたように動かなくなり、かつその場から逃げ出したい衝動に駆られる。

「このくらいの”殺気”で怖じけづくのか？山賊だとか言ってたけど、マジかよ？」

呆れたような物言いだ、男たちは玲から発せられる殺気にただただ怯えていた。

「お、まえ…っ、なにもんだ…っ!？」

リーダーの男も先程とは違い、非常に青ざめた顔で玲を見遣る。その目にはつきりと浮かぶ怯えた色に玲は嘲りも含めてにこやかに笑いかけた。

「ただの”小僧”だよ、山賊」

一歩、玲が男たちに向かって足を進める。

男たちはそれにビクツと身体を震わせ、玲を怪物を見るような目でみていた。

それに気付いた玲は、不快に顔を歪めることもなく、またさらに一歩彼らに近づいた。

「お、おい…っ、あいつらはまだか！？馬鹿やってなー戻ってこ
いってあいつらに…っ！ー！」

焦りを含んだ声で命じるリーダーの男に、他の男たちも今更気付いたように茂みの向こうで楽しんでいるはずの仲間を声をかけようとしたー…が、

「無駄だよ。お前らの仲間はもうこっちには戻ってこない」

呟かれた声に男たちが反応した途端、玲の姿が掻き消える。

「な…っ！？…っが！ー！」

目を見開いて玲がいたところを見ていた男たちの一人が、突然近くに生えていた木にまで吹っ飛ばされる。
衝撃とともに、男は気絶し、男が吹き飛んだ方向にあった木がメキメキと倒された。

「ひい…っ」

喉にヒュッと空気が通る音がした瞬間、その男もまた同様に吹き飛

ばされる。

「な、なにが…っ」

何かの魔術でもかかったかのように次々と吹き飛ばされ、または地面に伏していく男たちを見ながらリーダーである男は顔色をなくしていく。

「ぐあっ!」

「ぐっ!…っあ!」

「ぶほあ!…!」

なすすべもなく倒れていく男たち。

すでに他の男たちからは戦意が喪失され、ただ逃げたいという気持ちだけが頭の中を占拠する。

「う、うわああ!…!」

一人の男が耐え切れなくなったのか、回れ右をして茂みのほうに逃げ出す。

その男を皮切りに、他の男たちも金縛りから抜け出して一目散に男に続いて逃げようとした。しかし、突如風を切り裂くように何か男たちを横切り木にドスツと突き刺さる。

頬から横線に切り傷が出来た手前の男は、ひいっ！とその場に尻餅をついた。

動きを止めた男たちの前で、玲は木に突き刺さった…カード（貴族の男たちから拝借した整理券）を抜き、くるくると指で回しながら男たちを見遣る。

「逃げようだったって無駄だったの。あっちもそろそろ終わりになるだろうし、すぐにさらわれた娘たちの搜索のためにお前たちを追ってくるだろうぜ？」

「な、なに…っ」

「ただ何もしないで追いかけるわけねーだろ。今頃、俺が残した跡を辿って来るだろうな」

ピンツ、とカードを放りなげて二本の指でキャッチする。にやり、と笑みを浮かべると男たちは気圧されたように顔色を無くしていった。

「お、おい。あいつらはどこに行ってるんだよ…！」

「馬鹿やってねえで早く女たちを連れていくように誰か…っ」

”お楽しみ”をしに行った仲間のことを思い出し、男たちが慌てたように辺りを見渡すが、玲はそれを一蹴するように鼻で笑った。

「あの糞どもなら、今はもうおねんねしてる最中だよ」

そう言つて、玲が指を鳴らすと同時に茂みの向こうから恐る恐る出てきたのは男たちがさらつてきた”商品”たち。

すでに手縄も猿轡も外され、男たちを睨むように見据えていた。

「お前らは…っ！…！」

さすがに驚愕をしめすリーダー役の男に、玲は「さてと…っ」と指を鳴らす。

「終わりにしますか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0818q/>

令嬢は元暴走ヤンキー

2011年9月22日01時48分発行